

515

83

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25

始



3.411

515-83

1

はしがき

釣は釣ることそのものが面白いのではありませんが、これを見ても聞い
ても又讀むだけでも、何かしら引つけられて行く。私はいついづこに居
ても、之に接することゝに於て生きてゐる一人で、それがまた現代人にふ
さはしい趣味として生きたいといふ研究慾が加はつて居ります。

私ばかりでない。私が少々ばかり書いたり話したりして見ると、その
反響がいつも幾十倍した速度と分量とを以て迫つて來ることから見て
も、この趣味も一般的に新しく目ざめつゝ、あることが分ります。

サネヂー毎日が、これを趣味又は運動の方面から、家族的にも、一般
的にも、また記録に講話に實際に、率先してリードすることは更に大な

大正
12. 11. 3
内交

るヒントを得るものとして共鳴するものであります。

この一冊が何もそれらの期待にそふなきとは及びもないことですが、皆さまと文字の上でお目にかゝることが、やがて何かしら大なる機会を作る動機ともならうかと、色々な方面から資料をまとめ、私見を加へて見た次第です。

今一つは、この記録が今後如何なる形を以て、如何なる方面にまで、趣味を廣く深くするかは、私としては餘程興味を覺ゆると同時に、更に皆さまの貴い体験とその清新な趣味を伺ひたいと祈つてをります。

大正十二年八月中旬

上海聯絡船中にて 著 者

釣 の 話

目 次

釣の話……………三

日本アルプス溪流の岩魚釣……………五三

四月の沖釣……………六四

鮒の乗つ込と釣場所……………六七

鮎の川開きと蚊ばり釣……………七〇

夏の磯釣の快味……………七四

夏の沖釣……………八〇

新秋の夜釣……………八四

釣 話

近來民衆的な娛樂趣味と目すべきものは、凡ての方面に於て、その時代に相應はしい色々な考究が盛んに行はれて居り、殊に体育運動に至つては、その指導設備技術共に先づ一通りは普及されたかの感があります。然るにこの釣魚といふ娛樂趣味は、或部面に於て稍認めらる、だけで、一般的にはさういふものか、兎角閑却され易いやうな傾向がある。なる程釣を樂むものは、到る處にこれを見るのでありますが、現代人の趣味として、如何程向上したかを顧みますと、他のものに比して頗る物足りなきを感じる所以であります。

在來各地各人各様に面白い研究も出来てもるませうし、また専門の學術的方面にはなかく、貴い攻究もあるのでせうが、それが吾々に惠まれて参りませぬ。のみならず現在に於ても、釣魚を何か一種の殺生であるかの如く卑まれて居ることは争はれない。或地方では漁者に「オゲ」といふ特別の稱呼を以てするものがあります。尤もこれは職漁者に限られてはをりますが、オ

チヌの晝の川釣 九一

ウグヒ釣の快技 九七

月下の太刀魚釣 一〇四

掛釣の流行 一一四

小魚の釣り方 一一八

晩秋の鮒釣 一二二

紳士的な鱒釣 一二七

寒 釣 一三二

魚は釣餌や人影を何う見るか 一三七

釣具の考案とその趣味 一四二

(終)

ゲは或は汚穢として面白からぬ意味に聞えて居る。その半面には、暗にスポーツとしてもこれを排する如き、否少くもこれに諒解を持たない方もあるやうに考へられます。また或方面に於ては、魚を釣ることが如何にも時代遅れの娯樂の如く心得て居る向もあります。なる程近代的な他の新しい娯樂趣味が幾干でもあるに拘はらず、しかもこのセチ辛い時代に、釣なごするのは餘りに呑氣過ぎると見られるのも無理からぬことで、殊に現代文化に伴つて進んでゐないといはれるにも一理はありませうが、その呑氣な處に自分の頭を休め体力を養ふことも出来るので、しかも文化的に進まうとすれば、また現代人の趣味に融合しないことはないと思ふべきであります。

これを外國の事例に就いて見ると、佛國のある水産學者は曾て斯ういふ批評を下して居る。即ち「英國ではこれを紳士の名譽として居り、その國民は各自の才幹を示すものである」と見做してゐる。諸君も御存じの如く我が攝政宮殿下が、歐洲御見學の途に上らせ給うた際、蘇格蘭ハイランドのアソール城内の清流に於て、鱒釣を興がらせられ、前首相のロイド・ジョージ氏なごも鱒つりには一廉の天狗ださうですが、これも英國上流紳士間に如何に釣魚趣味の普及

してゐるかを物語る一例であります。同國の紳士は夏季になりますと、態々瑞西方面まで避暑するものもあるが、それが風光明媚な山間の清流に綸を垂れて一夏を過ごす、尙遠く米國に至り、太平洋沿岸の釣魚地として知られてゐる加州の沖合のサンタ・カタリナ、或は桑港、サンビードロ、サンデイゴ方面に出掛けて大洋的氣分に浸ることもあります。また米國人は何うかといふと、近年自動車で毎土日曜に釣の遠出をやる人が非常に多い。私の知人が昨秋夜遅くシヤトルに着しまして、棧橋に澤山の自動車が集つてゐるので、多分出迎だらうと思つて卜陸して見ると、豈圖らんやそれが皆舶來の太公望ばかりで、しかも女性の多いのに驚いたさうであります。

前申したサンビードロでも、デドンドでも、港相當の大棧橋があり、ある海岸の公園の様な所では、半月形の棧橋を設け、それが二段になつてゐて、其處に釣客が一齊に腰を掛けて釣をするといふ始末で、釣竿は恰も芒の穂のやうであるといはれて居ります。また棧橋の中央にはこれを見るもの、爲め広い場所もあり、夫婦や一家族が、サンドウ井ツチや果物を嚙りつ、終日楽しむ。そのまた橋の袂には、釣竿に糸餌付一日幾干で安く貸して呉れる釣道具屋がある。そ

れも幾百千本の仕掛が用意されてゐる所もあり、カタリナ島などには完全な釣魚俱樂部が瀟洒な建築をして、部員は釣の試験に合格したものに限り、中々盛大なことが窺はれます。

尙河湖水では、土曜の午後になると、細君同道で自動車を飛ばして、或者は山間に分入り、先づ細君は溪流の林間に天幕の用意をする。湖では舟を組立て、浮べる。主人公は日が暮れるまで釣魚に餘念がない。そして晚餐は潑刺たる生魚を調理して共に楽しむといふ風がある。盛夏百十度乃至二十度の炎天から逃れて海拔七百尺以上の清流に一日を樂む。斯うした趣味は、いつも四月から十月まで盛んに行はれます。田園の人としては、水ある所婦女子に至るまでこの趣味を解して居るかと思はれる位で、旭日昇天の勢を以て世界に風靡してゐる米國は、矢張カウボーイ時代のキャンプ生活を忘れず、その釣といふ一の趣味に於ても右のやうな次第である。兎に角國家、州或は都市に於ても、または各同好者に於ても、これ等の設備に努力することは、保健及趣味の上から見て實に結構な措置と思ひます。この一事はやがてその國民が何處までも元氣が横溢してゐるといふことを物語るもので、何處に釣が卑むべくまた時代おくれで

あるかと申したくなるのであります。

これを我古代の傳説に依るも、亦科學的に發見研究した所によるも、決して卑むべきものはありません。かの大國主命の子事代主命が出雲美保關に於て、治國の大柱を釣をしながら、天孫の使者の武甕槌命に渡したといふやうな面白い話もあり、また今日まで發見された貝塚の遺物に於て見るも、その釣具の種類も多くして、發達してゐたことは、或は現代以上ではないかと疑はれるとまで、專攻學者を驚嘆せしめてゐる次第であります。古代埃及に於ても、釣は一種の藝術的氣分を示し、かのアントニーとクレオパトラの如きも即ちそれで、古代文化の上からも輕視すべからざるものであると信じます。これを宗教的方面より引例しますと、聖書には魚は神より與へられてゐる。基督はペテロに魚を釣らせてゐる。また佛敎の輪廓の説もあり、俗間「獵漁りもせよ」と教へられて居ります。釣るといふことには何等煩はしい偏見に捉はるゝ必要はないと思ふのであります。

元來魚を見て釣りたくなり、或は虫を捕るとかいふことは、よく子供の頃から喜ばれますがこれは心理學者の説くまでもなく一の本能である。大抵の人は何うしても一度はさういふ處を

通るものである。倫理的には、これは生き物を殺す業で、甚だ残忍なものであるといふかも知れないが、魚を釣り虫を捕ふるために、却つて蟻つてゐる残忍性を發散させる効果があります。恰もヒステリーの女が非常に癪癪を起して、半巾を引裂き、袖口をかみ破るといふやうなことをするが、それが爲に気分が和ぐといふのと同いで、これを教育の方面に導いても決して悪くないと思ひます。

またこれを原人時代に溯つて考へて見ると、我々の祖先が農土に親む前には、何れも海に山に狩獵を以て生活してゐたものである。我邦の如き四面環海の國で、しかも美しい河や湖沼の多い所に生活してゐる國民として、水と漁獵に多くの親しみを持つといふことは無理からぬことで、現代の文明に心酔するものにも、この原人の憧れを抱いて、折々全く異つた境地に於て、これを試みることは當然であります。これを外に見、内に省みると頗る人間的なもので、吾人の生活に意義あるものとなつて來ることを思はねばなりません。

清淨な空氣を心行くまでに呼吸し、日光に晒され、或は寒暑に抵抗して、自然の裡に活躍し、食慾を進め、神經を休め、尙幾多の趣味を感受し、更に不知不識の間に天候氣象に就ては、そ

の想像が機敏になり、山岳森林に對する理解が深くなり、或は海流水質とか、若しくは種々なる生物に對して、子供は子供ながら、女性は女性として、各自種々なる感興と觀察が次から次へと展開して參ります。斯ういふ從屬的な價値は日常他の機會では容易に得られない貴いもので、これが一家の生活に大なる効果を齎すことにもなるかと思はれます。

沖づりなきは殺風景だらうと想像するものもありますが、海上に出て見るとまた洋々たる氣分の湧くもので、時に自然の威壓に對する牛の歡びも一入に感ぜられます。また何百といふ帆船の航行してゐるのも一の浮世で、船の上には夫婦喧嘩も始まれば、意外な處から笛の音までも聞えて來る。或は釣舟同志で歡聲を擧げたり、色々の交渉もあり、舟中ものにはそれ相應に面白いとも湧いて、非常に親しみを持つものであります。しかも一本の竿、一筋の糸に全精神を集中してゐるこの状態が續く間は胸中何等の蟻りも煩ひもない。實に單一なる生活、純なる三昧境に入るといふことは、殆んど他に見られないデリケートな味のあるものであります。

外國の釣の雑誌なきを見ると、釣に出掛ける人は、同時に野外科理を樂むといふ風がある。吾々は野外に出掛けるといへば握り飯でなければならぬ人間であります。併し料理も一の趣

味として見るべきであると思ひます。米國ではさういふことに對する供給設備がなかく、行届いてゐるといふことであります。數日間も山間入つて家族がつましく、まじけな清いキャンプ生活を營み、短時日の楽しい田園旅行を試み、それら變つた境地に一家を導くといふことは、これも釣に關する從屬的價値として認むべきものと思はれます。

我國では釣には在來遊山氣分の伴ふこともあります。無論一概に排すべきものであるまいが、しかも茲二三年を通じて幾分それが衰へて、東京或は阪神間では婦人或は子供、即ち家族打揃つて釣に出掛けらるゝのを頻々見受くるに至つたことは、實に美しい現象であると思ひます。子供は子供向、下手は下手ながら、上手ならば愈妙で、打連れて行くとすれば、ある者は小さい可愛い魚を、他は大ものを、しかも種々異なる仕掛を以て同舟同場所を楽しみ、これに清鮮な料理を加味して一日を樂むとなれば、この上なく結構なことでもあります。

登山銃獵などに適しない人でも、また短時間より暇のない人にも、何時でも手軽に行ける楽しみであり、避暑、避寒、入湯、水浴、轉地療養等に出掛ける折には最適當した方法たることは申すまでもありません。

所で我京阪神地方の釣は一体何うすればよいか。これが差詰め共々に研究して見たいのであります。都市の膨脹と共に釣も段々窮屈になつて來て、在來の釣場は殆んど跡方もない譯で、そこに釣場の延長と魚を釣る上の實際の技巧を研究する必要があると感されて參ります。

釣場所に就いては諸君はそれ／＼の得意な方面に御出掛けでせうが、京都ならば疏水とか桂川若しくは淀川、巨椋池、大阪でいへば淀川の毛馬閘門、長柄橋、市内で堂島木津の二川、西に接して神崎川と上流の猪名川、或は武庫川といふ風に淡水魚を漁るとすれば、まだなかく餘地のあるもので、郊外電車や他の交通の發達は、吾々に大分活躍の新境を拓かせて呉れます。

しかし、またその年々の天候の如何によつて、その折々に應じて、種々工夫して見なければ、それも妙味がないことになる。しかも次から次へと魚の種類が代つて來たり、潮の工合でその移動が急になつたりして來ますから、そこに常に色々釣りの研究が必要となつて參ります。

神崎川では春の五月初旬から八月頃にかけて、川尻の堰からチヌが入つて來ます。それは築港でとれるのは少し幅が廣く、鰭の尖が黄色味を帯びてゐる。即ち土言キビレといふのであります。それを狙つてゐる數人の釣手を見受けました。これなごに當地のある釣客が三十年

前から秘密裡に研究して、特殊な仕掛を以て罾張も舟づりもやつて居たもので、それが或る竿師と数名の好き者によつて樂まれてゐたものであることを突止めたのであります。チヌの川のほりは土佐邊でもよくあることですが、つい目先の神崎や大淀でチヌの晝の川釣が出来るのも面白いことではありますまいか。

尼崎出屋敷邊の色々の釣は申上ぐるまでもないことでせうが、丸島附近にはかなりキスゴの寄る處もあり、西に行つて今津の舟溜も夏秋の小魚やチヌ、セイゴでは一寸味が有り、西宮東口より濱に小川に添へて、一直線に下ると、芦の多い泥池の海に通じてゐるのがある。秋の寒くなるまでのハゼ釣には、家族的にも安全で折々出掛けて見ました。奥さん女學生殊に腰の曲つたお婆さんが孫らしい腕白を連れてなかく味なことをやつてゐます。

西宮港では釣具店と釣手共に何うもまだ思はしくないが、一寸工夫すれば初夏からボラ、イナを狙へる場所があり、セイゴ、ハゼ、カレイ外二三の魚は舟づりで味があります。淺瀬した凹み所々にあつて港内も捨て難く、青木深江の波除の石垣、魚崎の田圃といふ邊には、別荘連に首を捻らせる魚族がやつて來ます。

御影住吉なごは釣手の勘定にも入らない位に思つて居る方もあるが、時にはイナとアイゴの子がウンと寄ることがある。チヌも夜づりで意外に釣れるといつた譯で、製鮎或は酒屋の洗ひ汁、或は東明発電所から流出する温かい水の邊なごは悪くはない。大石の川尻沖から岩屋のボートハウスまでには、キスゴの好いあじろがある。グチも出ます。神戸東部の葺合以東には、私のよく存じてゐる處では、チヌ、セイゴ、アイゴ、ウナギ、キス、小サバ、タコ、カレイ、縞ダイ、本コチ、ヒラメ、アナゴ、アブラメなご四季折々のものが多少共釣れてをります。

須磨では春の四月中旬から、メバル、アブラメ、カレイが釣れ始め、程なく鯖が加はり、六月からはベラ、ガンゾウガレイとなります。本コチは例年秋口になると、備前の漁船が隊をなして明石海峡を東に掛けて須磨神戸より、西宮尼崎まで海上數十日を釣くらすのであります。それから例の太刀魚、ハマチ、アラ、トラハゼ、ハゲ、小ダイ、ヒラメなご順繰り釣れてまゐります。釣り方もカケ釣が色々に工夫されて益興を添へてゐます。

塩屋垂水は殆んどベラ専門の釣場として最面白く、家族的に樂むにもよい處で垂水沖の平磯燈臺の前後には大魚を狙ふ工夫もあります。たゞ船頭が親切ではあるが釣としては頭が少し

働かない憾があります。舞子の前は深く潮流が早い。釣として面白い處ですが、素人には底が分りかねることもあり、明石までの間は垂水塩屋ほきには樂めないことがあります。明石は直ぐ前では釣にくいですが、あの一帯は釣の本場としては申分はありますまい。中にも例の西方數里を家島の南方沖合鹿の瀬の暗洲までの釣は、春から夏にかけて實に面白い。七月までの勝負で、大潮の折は前日終電車又は汽車で出かけて、漁夫の家に泊り、又は砂上の舟の中で帆を着けてとろくすると、夜中の二時三時に舟を出す。二十數尋より五十尋近くの底から八九寸の白キス、幅二寸に餘る大ベラがグーツと重く引く所を手繰る。二見高砂沖近くでは形は小さいが數多く樂める。本鯛のことは有名ではあるが四月から六月頃に終り、それから秋にかけては迷子の三年まで位のもの釣るのです。黒人でも二三日も駄目なこともありますので、客を之に乗せるのを厭ふ風があるから、一寸誰でも味ふ譯には参りませぬが、船頭としては感心しないこと、思ひます。殊に前申上げた鹿の潮行の釣舟を或船宿が發動機船で送迎し始めたのを、他の船頭が之を妨害して中止させたなごは、甚面白くないことかと思はれます。兎に角明石の海は風が出ると少々凄味も見えますが、釣の研究と海の氣分に浸ることには申分が

ありませぬ。東京邊の羨望するのも無理はないと存じます。

淡路の東岸で、岩屋は阪神より夜の汽船で行くには最便利であり、あの江崎燈臺附近の海面には潮流の加減で、他の浦々では居ない折でも、餌とすべき鯛がとれることがある。御承知の如く沖釣の餌は大抵エビで、岩虫類もありますが、その實大阪灣でも鯛で釣る魚は澤山ある。それが外にない時でもとれることのあるのは岩屋の特色であるともいはれる位で、西浦二三里は勿論、東北は舞子沖、東南假屋に接して、夏秋の磯の底魚、或は中層を行く背の青い大ものが釣れる。

洲本から四洲園あたりの磯づりも妙ですが、尙南方の山良海峽が理想地で釣舟で水平線が見えない位に出ます、あそこは直ぐ前に天然の防波堤の如き磯もあり、陸でも、沖でも面白い。殊に外洋に近接して最壯快な氣分を味ふことが出来ます。あそこには淡路魚釣會を組織して宿泊その他の便宜を計つてゐる個人經營のものが出来てゐることも、釣としての價値を示すものではないかと思はれます。

次に南海電車沿線の淡輪であります、小魚を釣るには最良の處だと信じます。なる程須

磨も釣としては魚族の種類も多く、のんびりしてゐます。須磨の特徴としては、大阪灣北岸での海底が砂泥と磯との界目になつてゐる所で、攝津と播州との國境に當る海水浴場の境濱から東南に一線を入れると、その以東大阪までは砂泥の平坦なる海底となつてをり、その以西は深淺起伏が漸次甚しく、大抵は岩礁砂礫になつてゐます。そこで東から來る砂泥すきの魚も、西から來る磯の魚も、一寸須磨で足を停めて一思案をするといつた風も見えます。所で淡輪は大阪灣の外洋に落ちて行く潮流、半面に於ては外洋から潮に乗じて入込む魚も、矢張あの邊で足を停める處があるやうで、磯があれば砂泥の底もあり割合淺い所が多い。磯も在外大きい石がある。波が穏かであるから、海藻もよく茂る。それに魚が付く。

私の經驗によると、大分獲物がありました。海に向つて右の山脚から百數十尺の坪網が出て居る。その網に近く舟をやらせて見ますと、附近に網に阻まれた魚が居るので、駄目だらうと船頭の思つてゐるに拘はらず、鯨がコロ／＼上つて來ました。何分船頭の仕掛が粗雑で、工夫も何も無視したやうな原始的なものが多いのですから、已むを得ず餌の工夫をして海老を胴体丈差して見たり、頭をつけて見たり、剥いて切つてつけたりして、少しづ、其動かし方を工夫

すると、七八種の變り物がかかります。

彼處は大体外洋の海峡に近接し、秋の日足が深日から谷川の方の小山に落ちてゐる阜及び背後にかなりの山が續いてゐることを見ても、東風または南風が吹く折にも、直接の影響を受けない上に、前申上げた通り、潮流が弱くて磯が多いのがなんとしても小魚や磯魚の棲むに適してゐることが證據立てられます。尤も西南谷川小島の沖合は大分深く、且外洋の潮流が影響してゐますから、相當大きな魚類が多い。讀者諸君にして若し明石の大鯛に憧れるならば、先づこの方面へお出掛になつて見ては何うかと思ひます。秋になれば少くも二三年ものが大小形があり、工夫すれば意外な大漁を見るのであります。殊に須磨明石には殆んど見られない魚族、即ち紀州邊でとれる魚が上つて來る所に感興を覺ゆるのであります。

海は先づこの位として尙淡水魚の方では、河内大和地方の池、少し遠くあるが吉野川、京阪電車沿線の池及大阪に通ずる流のやうな船の通ふ川が方々にあります。西は神崎以西、西宮以東を北方の山際にかけての小川や池も澤山あり、鮎ウグヒとしては前記の吉野川は勿論、隠れたる鮎の狙ふ所は寶塚武田尾間の牛瀬より北方自動車で約十分にして高座岩といふ武庫の清流

があります。これなごは、大に推奨すべき所と信じます。殊に琵琶湖或は播州方面には何としても釣場を延長すべきものと思つて居ります。

なにしろ以上の釣場所も、天候季節によりてそれ／＼出漁の方面を考ふべきで、同じ大阪灣でも東風が吹けば淡路東岸や北岸は駄目、築港は雨が強くは困る。須磨は南風が恐い、さうなるとそれ／＼差間のない方面を風によつて考へることもあり、同じ出掛けても都合が悪ければ急に變更する必要がある。季節の常風または折々の變化を知ることを中心掛ねばなりません。

船頭若くは釣具店の話によると、最近新にこの趣味に走られる方が多いさうで、それが何れも智識階級の方で、中にも熱心なのは工業殊に機械に關係多い方、若しくは生物に興味を持つてゐられる方、或は數學に達してゐる人、または醫師といふ風で、理學醫學の方々の多いといふことは——後にもお話ししたいと思ひますが——趣味としての釣の研究にも科學的傾向を帯びて來る譯で結構なこと、思ひます。東京方面が矢張その傾向が著しいのであります。また各方面から私に寄せらるゝ、同好諸君の書信にも確にこれを認めて居ります。

また従來の如く土手の下に半日も蹲んでゐるといつた釣のみでなく、更にもつと活動的な釣を好む方がほつ／＼多くなつて参ります。川では場所を移動し、或は動作に於ても餘程技巧周密な技巧を要するハヤ、ハス、鮎釣の如きも盛ではあります。尙海では帆を巻いて走るサハラ釣、ヨットに釣糸を仕掛けるとか、モーターボートで湖水の鱒を狙ふとか、山間深く岩魚、ヤマメを漁るとか、多少の危険を感じる位の處まで壯快な工夫を凝らすといふやうになつて参ります。しかも斯うした方の熱心な態度は格別のもので、これまでのやうに物靜かにやつてゐるといふよりは、今度は一層自分の境地を開いて、しかも動的に進むといふ近代的傾向を認めます。これは面白い現象で、米國の如きは大きなカジキマグロ、シビ、ブリ、鱈、マス、サケのやうなものを盛に釣つて居りますが、我邦は暖寒兩潮に恵まれて、斯うした魚族も或方面には豊富であり、活動的な現代人として、斯うした大洋的な方面に伸びて行くも當然ではないかと思はれないでもありません。

さて斯うした元氣で何時も出漁して見るのですが、そこに色々な不快不便を伴ひ勝てありません。これは漫然と出掛ける結果であつて、これには自身にて各魚各方面に亘る的確な一應の豫

備智識を要することになります。最も必要なことは、斯うした新しい趣味を感ぜらるゝ方にはそれ相應する熱心で且親切な指導を得ること、各自が科學的に研究することによりてその不快不便を除去することが出来るのみならず、それだけ趣味を深くする所以であります。またそれが日常生活の上にも種々好影響を及ぼして参ります。

それらに就いて聊か要点を区分してお話しますと、先づ第一に天氣を知る必要があります。東京釣友會員にはその家に晴雨計を用意して居られる方が大分あります。天氣豫報を見るのも必要ですが、明日は晴れか、こんな風が吹くだらう位は自身で、ほゞ推測の出来るやうに何等かの方法を講ずるやうにありたい。以前は測候所の豫報は餘り價値を認められなかつたやうに思ひまして、百姓が野中の水を飲むに「天氣豫報々々々々」と三遍繰返して「當らない」禁厭にしたと言ひますが、現今ではよく當りますから先づこれを知り、その地方にての四季の變化をよく記憶し、しかもこれを釣魚の上如何に利用するかをとくと考へねばなりません。

世界に於ける釣の聖書とも見るべきコンプリートアングラーを著した英國のアイザック・ウオルトン氏は、天候利用に就いて「風に背を向けてつれ」「陽に向つて釣れ」といふやうなこ

とをいつてゐたと記憶してゐる。實に尤ものことで、風を後にすることは餌を遠方に飛ばすことになります。岸より遠く餌を落すことは糸を低くするから、魚に警戒せしめないで釣る上に於て有効である。太陽に向つて釣るといふのは、糸を飛ばす時にその影や光が水に映つても魚に遠ざかり、また竿の影が短く映ることに理由がある。常風天候を利用するには一概にこれのみを厳守してよい譯でもないが、これらに注意を拂ふことが川釣には特に必要であります。

風と流れとが逆ふと否とによる釣る上の工夫、東風が吹くと見れば、魚の餌付や舟の位置をいかに工夫すべきか、北の冷風や西が強いと見れば、いかなる場所を選ぶべきか、南風の吹募る前に如何にして引上げるか、風の方向に依りて驟雨の襲來するか否やを見て出かけるとか、日光の光度と水色との關係、氣温と水温との關係等は考へるまでもなく、また時々刻々の天候の變化によりて魚の種類、釣場や餌の加減もするやうになるべきが順序かと思はれます。これに依り時間や勞力に無駄がなく、一面よく釣れる譯であるから、これらの觀察と利用を盛んにすべきで、その苦心する所になか／＼興味があります。

季節によりての標語を或人は作つてゐます。即ち「春は雨上り」、そろ／＼晴れようとして

水にも濁りを帯ぶる頃で、水嵩も増しかける頃に魚が岸に沿うて上るからである。故に春先は雨上りがよいとされてゐます。次に「夏は曇り」、夏は日中は光線が強烈で熱度も高いから、魚の喰が悪い。そこで曇りの方が良く且釣る時間が長いと見るのであります。もう少し詳しくいへば光度が弱いだけ魚が深みから幾分浅い處にも出て來るとか、糸が目立たないとかの都合もあるのでせう。次に「秋は天氣」、秋晴水澄の折には淀川の水でもよく澄み、鯉なまがよく釣れる。餘り濁つて冷えて曇つたりしては一寸よくない。「冬は風ぎ」勿論風のないトロンとした日がよいのであります。高氣壓が去つて低氣壓の來ない時なきによくある天氣であります。

次に注意すべきは潮汐であります。「潮がたるめば魚もたるむ」と申しますが、ペラなきの小魚の如きは水のたるむ折がよいといふやうなこともあり、これを一々魚の種類とその折々の潮汐とに對照して見て出掛くる所に苦心と興味があります。水溫水質と釣との關係に就いては専門上の科學的研究を要するのでありますが、大阪灣内のことすらまだ詳細な調査が出來てゐないさうで、或る信頼すべき専門學者は、既に大分準備も出來たから茲兩三年間には何とかして完成したいと申して居られます。これが完成したならば我々の趣味の上にも多大な便宜を得

ること、楽しんでゐます。何しろ一の波除なり防波堤や埋立が出來ると、局部的には流域と共に海底の様子が變化する位で、これが調査が完成したならば、また右の局部變化に氣付いた折は、透さずお互にその凡てを知らせ合ひたいと存じます。

また海の釣に於て常に注意しなければならぬことは、その日或はその季節に依つて非常に潮の工合が變ることでありませう。例へば私が足を悪くする前までは大寒から紀元節の時分まで海岸に舟を乗出して、鰈を熱心に釣つたものであります。それが節分過ぎると妙に魚の喰が悪くなりませう。魚はゐなくなるか或は居ても喰はない。段々考へて見ると潮の工合が變つて居ります。

冬が去ると外洋の暖流が西南から漸次活躍して來る。瀬戸内も大阪灣の潮も段々動き始めるといつたやうなことが一魚族にも影響して、移動するか、或は淀川や他の諸川から流出する雪解の淡水が影響するの、何れにしても水に變化がある。夏の頃港内でよく鱸が喰つたのが、一夜の波で居なくなる。これなきは、近來激増した發動機船の石油の浮流したもの、時化の爲に底から攪拌されて魚が居れなくなるといつたやうなこともありませう。水溫比重微生動物

の増減變化なき一々研究して魚の移動との關係を知ることは、誠に必要でありながら、それがまだ吾々の趣味の上には没交渉であり、且専門の研究も何處まで行届くか疑問であります。兎に角近い所でも淀川ではよいが、築港は駄目なこともあり、其折々のことを見てなにづりに出掛けるかをその折々に決定しなければなりません。

大雨のあつた翌日とか翌々日は、大阪灣に流出する淀川の水が段々西または南に擴大して來る。神戸築港まで來るのを高所から見ると、その移動がわかります。しかもその水が神戸の沖合から更に東に舞戻ることもあり、堺の方でも水族館ではよくその水が館内魚族に影響するから注意してゐるさうで、それ／＼聞いて見ると一寸したこととも判明するに拘はらず、漫然と、さうも此頃は何故釣れなくなつたらう、さうも變だ、さ、いつて、二三ヶ月否一二年もしてから氣の付くやうでは餘りに香氣すぎます。これらは折々専門の學者、または水産家漁夫などの實際家に當つても見、自分でも色々工夫して見ると自然分つて來ることもあり、魚の移動のいかに秩序的であり、微妙であるかを一端なりとも知ることはなかく興味ある問題で、ましてそれで釣り當てる所が所謂天狗の天狗たるべき所かと存じます。

川でも湖水でも、水質水溫流勢清濁色々なことから魚の移動または静止が行はれることは、海とはまた格別の興味があるもので、釣る半面の楽しみはその方の研究にありともいへないこともありません。

これに干渉して重要なことは、地形場所の研究であります。大抵の方は釣場所や地形を知るには、沖釣でも船頭任せ、手釣でも存外位置の選定には無頓着であり、川または海濱の岡ツ張では、同好者或は釣道具店餌屋などで近狀を聞いて見るものもあるが、聞いた話は何時も面白いことの多い割合に、出掛けて見ると存外失望するものであります。それは釣れる間は金儲と同じく互に秘密にして、餘り思はしくない頃に人に告げるのが普通の人情であるからで、これもその人から見て已むを得ないが、併し川釣ならばこれを後の参考として記録しておくこともよいことで、私はこれによりて餘程面白いことに出會して居ります。とにかく根掘り葉掘りよく聞き廻つてその位置を詳細に記憶しておくのであります。

次には根氣よく幾回も出掛けて見ることであります。魚は根氣のよいものに教へて呉れるとさへ申す位で、体験は無言の教師となり、チャンスが多く作ることになるのであります。何時

も柳の下には鱸は居ないといひますが、場所を知らば、季節と天候水質が一致すれば、鱸はそころか一つ穴から鰻が四すぢも五すぢも出ることがあります。たゞ魚の定着性のものと、移動性のものとは自然場所の選擇には色々の觀察を要しますが、川では大抵の場所では、魚が居なくなつても、水が一度出れば代りの魚が来る、即ち住みよき處には魚は何時も集るべき道理ですし、海でも、海底の高低と潮先の如何を考慮に入れなければ面白くはありません。

餌のことは殆んど釣る上の大なる要素であります。従来折にふれて愚見を述べても居りまして、説明すれば長くなりますから、氣付いた一二に就いてお話しします。當地方では他の地方で一才味ふことの出来ない繊巧な竿を使用するハス釣があります。彼の魚には普通サバノムシが良いとされてゐます。無論これは適當した餌ではあります。場合に依つては他の餌がよい時もあります。即ち天氣のよい光線の強い日、しかも水の澄んで居る時などは、同じ餌をもつてするよりも、他の虫に代へて見ることも必要であります。或人は蠅を取つて餌に使用して非常に成績を挙げたといふことであります。私は昨年ハヤに試みて同一の結果を見ましたが、何故餌が違ふとよいかと注意しますと、水が澄んで天氣のよい日には地味な色の餌は魚が見

やすく警戒しないで飛びかゝる。或はその虫がよく活躍する時間になるからではないかと思はれます。

何魚でも釣餌としては澤山ありますが、色合から又形状から見て、魚の喰馴れ見馴れた餌色または鳶色の餌は、朝の内または遅くも九時頃迄の空色なみに對しても、魚に見易く、日中は前申す通り黒色——俗にカラスといふ——がよい。蠅をつけて成績を挙げたのも全くその爲であります。

生物から得た餌は、殊にその選擇、さし方、動かし方なきを時によりて色々工夫して見るべきは勿論、擬似餌になると、その種類の選擇が難しいことになる。鮎の蚊がしら鉤の如きは、その種類も加賀鉤のみで二百餘種、土佐は百種あります。これなごもその地その場所の石の水垢の色合、水の工合に光線を考慮に入れて選擇して見なければなりません。加賀でよいから京都でも土佐でもよいとは申されませぬ。北の國は派手になり、季節でも變つて参ります。ですから鮎ばかりも幾百種のなかで本當に間に合ふものは十種、若くは十二三種よりありません。それを五六本づ、用意すればよいことになりま。殊に六月の川開の頃でありますと餘り吟味

しなくとも大抵のものなら釣れるのですが、九月十月頃の子持鮎を釣るには、随分苦心して適品を選択する必要があります。落鮎はまたなんでもよく喰ふやうにも見えませんが。

序に申上りますが外人のアンゲラーで、先づ感心するのが我が鮎の蚊ばりを使用する沈み釣ださうで、あの機敏な魚を小さい鉤の幾百種も作つて巧に釣るのを羨ましく思つてゐるといふこととであります。殊に最近三四年間に愛釣家の擬餌と魚の嗜好すゝ水垢 動植物質の研究が進んで、東京釣友會常任幹事の牧さんが近く鮎の釣り方に關する研究書を發表されるさうであります。この釣は全國的に益々研究が普及すべきで、擬餌鉤がそゝ先驅となること、信じます。

當地方の淀、猪名、武庫、吉野、桂、播州の諸川等、場所は澤山ありますから、研究の餘地はいくらもありませう。擬餌は鮎のみならず、ハヤ、イハナ、ヤマメ、マス、サケの如き、サハラ、カツナ、マグロの海魚の如き、随分ありますが、活餌を使用しないで、隨處にこれを應用し得るに至らむことを熱望するのであります。餌に生物を使用しないのは紳士的なスポーツマンの本領とでも申されませう。

ボラなごも 青森から送つて貰つた仕掛を見ますと、餘程變つたものを使用してゐます。即

ち魚を集むるに塩鱒を背割にして裏返して底に入れ、その下に鮎の筋子を斜に切つて附けます。筋子は高價であるが成績がよいさうであります。ウグヒを釣るにも鱒にも、將た米國のシエラネヴァタ山脈の山間魚マウンテントラウトなごを釣るにしても、非常によいとされて居ります。但馬の諸川では、春先溯河して産卵するウグヒの卵を、鱒が上つて来て喰べる位で、魚卵または幼魚を餌として研究するも面白いことで、活餌に窮しても魚が釣れる所が難有い譯であります。

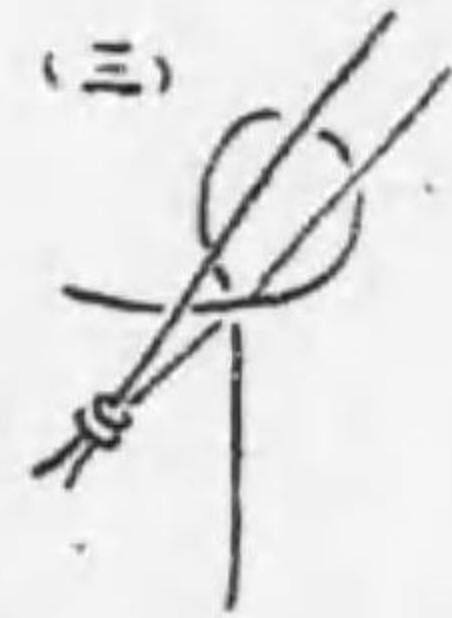
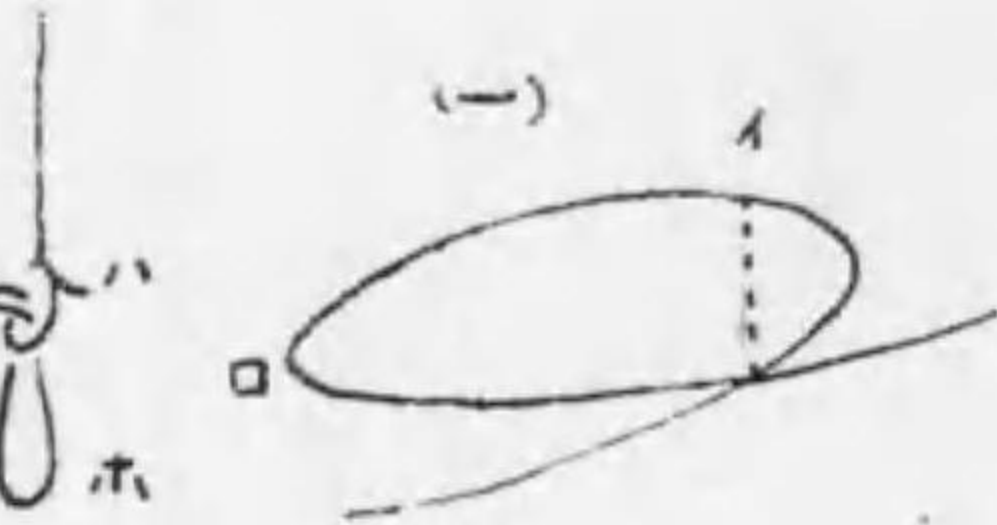
魚には實際良い餌が第一の御馳走で、仕掛よりも餌の吟味が第一である。同じ鱒でも薯ばかりで面白くない場合があります。養魚池の鯉或は製糸場附近の川の鯉なごは蛹がよいことは屢々實例を示して居ります。池のフナは田螺で寄せるとか、琵琶湖のアメノイチをいさだで釣るとか、凡て餌が分れば釣れない魚も鉤にかゝります。

尚申上げたきは、魚の口及喉の構造と、魚腹の嚙下物とによりて、いかなるものを食するかを見ることで、これなごは日々の魚屋の料理するを見てゐても、自分が解剖して鏡検してよいことで、得る所が多であります。

先を急ぎますから仕掛に移ります。竿や糸など凡て自分で考案するのが面白い。私の許に参ります。同好者の通信で、最要領を得たものは多く機械に關係ある方からのもので、さうした手紙や釣具を拜見することは非常に悦ばしく存じます。それも單純から複雑に入つて参ります。單純な一例としては鱒釣の針金であります。あの最大糸はピアノの線である。また小倉から参つたある工業所の方よりのお手紙では、門司邊で使用するフグやイカを引かける鉤の綸は大抵眞鍮の針金であるが、あれはキンクする即ち曲つたのが容易に伸びない。所が家に銀線があつたので早速それを利用してみようと、存外成績が良かったが、よく調べて見ると大正琴の針金であつたといふのですが、素人は偶然になにを見付出すか分りませぬ。實際米國製の鋼線には、いくら巻いてあつても、解けば糸の如くになつて折れも切れもしないのがある。それに煙焼したやうな錆止も施してありますから、我邦の在來使用してゐる他の糸に比しても、強さに於て利用すべきものがある。人造テグスがバイオリンの糸であつたり、音楽と釣とがとんだ處で鉢合をするのも面白いではありませんか。



先程お話しした鮎の仕掛でも、一日に十何種かの鉤を取換へ引換へするのは随分面倒なことで時間を要しますが、それを加賀流一本つりの名手で、現在福井で獨り天狗を極めてゐる西田豊吉氏のを見ると、斯ういふ結び方がしてある。先づ(一)のイを全部一と結びます。次に口を結ぶ。そして(二)の如くハを切る。ホには錘を馬尾の細いので取付け、ニの部分には、サンデー毎日第三十六號「晩秋の鮎づり」



の第三圖の如く、鉤を取付け、右ニの結び目と鉤の端とを引けば、易々と取り外しが出来るやうにします。即ち(三)の如くする。單純なやり方ですが米佛の釣魚書にも同一形のを見受けます。斯うなると、鉤が道糸や錘に巻付かないのみか、鉤がよく水中で躍るので魚の目を誘ふこととなる。また錘に細い白馬尾を使用するのは、錘が底の石に挟まつた時錘は失つても鉤を失はない利益があるからです。この鉤は同一形のもの

は求めれば幾千でもありますが、さうしたものか他の同一品と取かへると魚が喰はなくなるこ

とがあるので、さてこそよい釣は精々失はないやうに心がけてをるのであります。こゝにも細心の注意を要します。東京流の仕掛も餘程特長がありますから之もよく参考すべきであります。それから屢々見かけることですが、例へば築港で或人が八年子の大きなチヌを釣つたとすると、大抵なものはヤア大變なものが上つたと、その魚ばかりに見惚れて居ります。しかしテグス屋はその魚を見ないで、あれだけの大魚を引上げたテグスは果してこれ位の良質なものであるかを吟味し、釣屋にしても竿師にしてもそれごとく自家の立場からこれを察観する。我々は宜しく魚の大小を第二におき、先づ各部面からその仕掛と、それを釣上げた技巧や、餌の良否、その差し方、場所、潮時、餌の投込み方、喰込む折の魚の當り工合から、合せ方なご一々これを検すべきもので、なかにも仕掛に對しては特別なる注意を拂ひたいものであります。實際仕掛と竿とに自信のない釣は、魚がか、つても外れまたは糸を切られ、興味が著しく減殺せられます。

次にはその日の氣分が大切であります。このことは大抵釣の本を覗いても少々は書かれてゐるやうであります。釣に出掛ける時の氣分が一寸自分では分らない位のケリゲートなこと

でも障害になります。もしその日に調子の悪かつたことを顧みると、前日より睡眠が不足してゐるとか、非常に精神に倦怠を覚えてゐるとか、行く途中で蛇に會つたとかの不快が伴つて居ります。そこで人によると、初めて綸を下す時に「恵比壽さん」と口走り、或は鼠鳴をする。甚だ迷信的な行爲ではありますが、これによりて胸中の雜念を一掃して、全神経をこの指頭に集中する、即ち精神の統一が出来るのであります。英米人でも最初糸を入れるには祈る文句がある。まさか神よアーメンなご、は申しますまいが、「幸運なれかし」との意味で精神を統一することは外書にも見えて居ります。それが頭を緊張せしむる一の方便となります。

そして最初の一尾を逃さないやうに釣上げたなら、その日は少々無理しても調子が合つて来る。終日の士氣に關する最初の一尾に就いては、極めて慎重線密な注意を拂つてやつてのける。實際この印象が悪い日は何うも面白くないものですから、擔ぐのではないが、恵比壽さんでも、アーメンでもよい、精神を單一にして釣る。そこにも吾々の特權があるもので、釣が神経系の病氣に意外な効果を擧ぐることにもなるとの説も屢々聞かされて居る位であります。

話は更に指尖のことに移りますが、人体内部の組織の中に於ては、他動物のそれに對比して

最優越せる特有のものはないかと申すと、この指尖である。胃にしても腸でも海鼠の腸の内壁とこれ程の差異あるかは解らないが、指尖の組織機能は實に靈妙なもので、これに竿を傳つて魚の當りを感じ、糸から直接感覺することによりて、何魚が如何なる風に来たかを咄嗟に判断して、これを合せる、即ち頭と手と一時に働かすことに於て、無限の快感を知るとすれば、指尖を保護すると共にその日の氣分を爽快ならしむるには、あらゆる方法と注意とをもちつてしなければなりません。

斯ういふ風に天候風位潮汐水質地形場所餌仕掛その日の氣分等に手落なく氣を配ることは、何時如何なる場合にも必要で、そこに科學的の智識を應用する程合理的に釣の趣味を深くすることが出来る。なる程漁夫として今日までうまくやつて來てゐることは、矢張りよく見れば合理的なものであることを發見するのでありますが、またその半面は世の文化におかれて、唯多年の体験によりてそれだけの呼吸を呑込んでゐるに過ぎないともいへます。呼吸またはコツといふことは、その間貴重な時間と努力とを要し、吾々としては或点まで堪へ得べきことではない。殊にそのコツも近來の漁村では生活の上で動搖を來し、轉業その他色々な事情からよくこれを

体得するものは減少しつゝ、あるやうですから、それに代ふるにコツよりも合理的に研究し、如何なる素人でも易々として趣味を求め得るやうにありたいと思ふのであります。

さて一ト通りの豫備智識なり準備なりが出来て、愈々竿を入れる時になつて、その投込の方法が多岐多様に分れる。打込み方によりて魚を誘致することも出来れば、追散らすことにもなり、或は餌を千切らせたり、或は思ふ所に餌を達せしむることが出来なかつたりする。これらは一々体得する外はないかも知れませぬが、しかも遠くに餌を達せしむべきものとしては、西洋式投竿の練習場のことなきは最参考すべきものと存じます。

在來の手投げは糸が纏れたり、着物に引か、つたり、遠くへ行つた積りが近くで落ちたりして、一定の思ふ場所に達しない。そこにあのロッドは舟の如き水面に近く低い位置にあつてもまた石垣や橋の上からならば愈妙で、自由に遠方に餌を飛ばすことが出来る。大阪にも在來の投込む方法はあるが、矢張りこの式がよい、否もつと手軽く考案して見たいと思ひます。

同じ手投でも江州の湖岸ではウキの中に鉛を入れたのを使用し、東京でのボラのウキの所謂「いて來い式」のなきも應用の道が色々あるだらうと思ひます。

そこで、愈竿なり糸を入れてからは、各魚族の習性に應じて餌を動かすとか、或は魚の當りや合せる呼吸を計る最後の目的を達することになるのですが、そこに各魚族の習性の研究が必要となります。これは一々申上ぐる時間はありませんが、漁夫先輩、或は文字の上から殊に分の体験が貴いものになります。先程も申す通り、魚はその性質と季節その他、色々の關係で棲む所も異れば、嗜好も變り、その口その餌、または魚の大小鋭鈍によりて、餌の喰込み工合が非常に變つて参りますから、これを魚の當りによりて、直ぐ合すか、もつと喰込ませるか、ゆるめるか、逃げるやうにするかを、咄嗟の間に、適宜の處置に出ることがなかくの問題で、見聞と体験と精神の統一如何によりて格段の差を生じます。水中の魚が如何なる風に餌を流つてゐるかを知ることの必要なるは勿論ですが、一々分るものでないから、池、清流、海濱、または水族館に於ける各魚に食餌を與へる折なきに、常に深い注意を拂ひ、また釣る折の手の當りを吞込み、互に盛んに意見を交換してこれを研究する外はありません。

チヌの如きは色々な餌を好む。岩虫、チヨリ、イソメ、カニ、イワシ、エビ、カヒ、練り餌なき、それらのものによりて、喰込み方も合せ工合も異つて来るのみならず、大きい奴ほこ

靜かに來るとか、小さいのは軽快にやつて來るといふのですが、その間の機宜に應じて行くことが大切である。

鳥賊つりにも色々ありますが、晝つりとか、夜の太いかで——大分のモイカ——なきは、最初八本の足の内側に別にある二筋の長い力紐を引かけて、餌をチリ／＼引よせる。章魚にはそれが無いから一度に抱き付く。この場合は一旦軽く二尺ばかり上げて、急に糸を緩める。すると先生餌に逃けられるのかと思つて、後生大事とシガミ付いたと思ふ所を合せて、徐々に引上げるといつた調子でやる。

また吾々が沖で屢々出會すことであるが、スル／＼糸を下してゐる間にフイと軽くなることがある。或は底で魚をかけて上げる途中で、釣れた重味がなくて、更に急にグイと重くなつたかと思ふとボツと切られることがある。斯ういふ場合は、水の中層を行く魚が、餌や釣れた魚を目がけて飛か、つて來るものであるから、思掛けない風變りの魚と見るのである。切られては仕様もないが、糸を下す時に急に軽く感じた折は、ソレと感ずつたと同時に、三四尺極手早く手繰つて見る。エソ。ハマチ、フカの子なきが來るのであります。また下から來て軽くなる

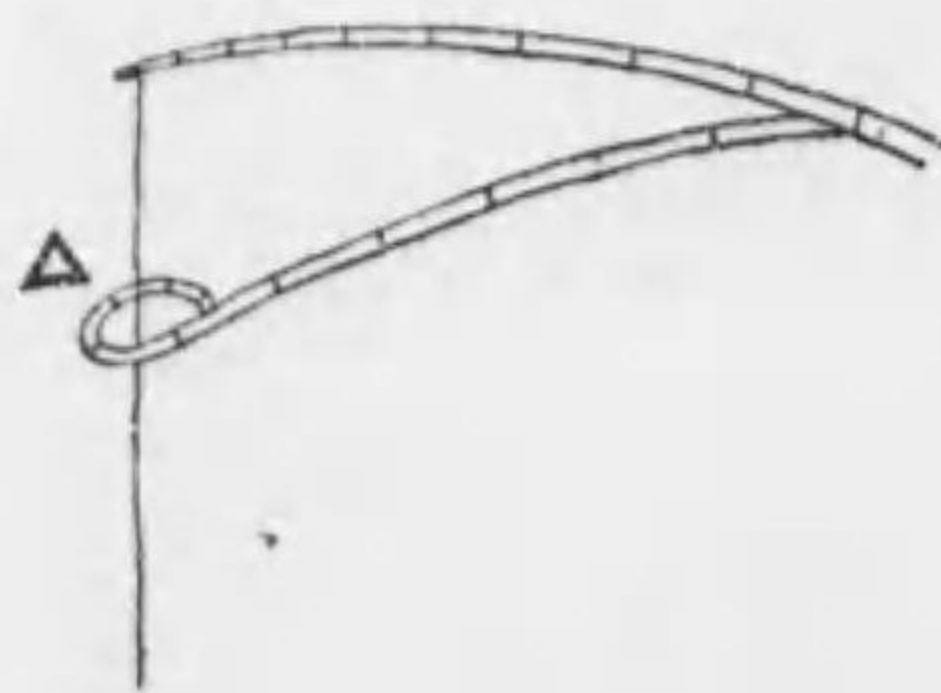
のは、魚が餌を口にしてスタコラ横に逃出す處であるから、一層手早く引上げるやうにすると意外な獲物に出會はすこともありませう。

それから築港の防波堤なきで、なにか魚が來たらしかつたが上らないで底にか、つた感じのすることがある。それが事實大きな築港を引かけてゐるならば幾ら待つても上りツこはありませんが、斯うした折にはまた意外なものがか、つてゐることもある。ある時私が知人と須磨に出かけた時のことですが、歸仕度に糸を巻かけてゐると、鉤が底に引か、つて了つた。唯僅に重く少しづつ、上る。困じ果てたので船頭に糸を渡して見ると、暫し上げて船頭は「旦那大變だ」といふのです。確かに生きてゐるものらしい。これを一氣に上げては糸が切れる。風で舟が流れるとそれだけ糸をゆるめ、また漕ぎ戻すだけ糸を引よせ、焦らず急がず辛うじて引よせて見ると、意外も意外も直徑尺もあらうといふモンゴ鳥賊でありました。大のヒラメなごも三四尺上るまでは生き物かなにか解らないこともあるが、それがコト／＼引込む時にそれと感ずるのであります。少し引よせる、またコト／＼引込む。その興は實に一入でありまして、無事にタマに入ると一尾を獲たのみで、すつかり満足して潔く歸りたくなる位嬉しいもので、そこに

職漁者とスポーツマンとの境目が異つて参ります。

序に申しますが挿入の寫眞はボラかけの竿であります。あれは出入橋の竿屋の爺さんが、約二十年前フグかけから考案した竿で、尖端が二つになつてゐます。この三角印の處の輪になつてゐる所が普通ツノとかセルロイドなごを使用すべきやうであるが、この爺さんのは竹である魚の引く時に、竹なるが故にカチツと響いて一層明確に喰込みを知ることが出来ます。この竿は棧橋の上から釣る爲のもので、普通に漫然と綸を垂れてゐるよりも、微かではあるがこのカチリと音のするのを見て合せる方が餘程興味があります。この竿はビジネスだけの竿屋としては思付かない仕事で、そこに趣味を味ふスポーツマンの態度が窺はれて來るのであります。

話が横道に入りましたが、魚の喰込を知るのが、釣の妙境でありますから、冴えた立鈴の音にしても、竿先の微妙な動き方も、またウキの引込も、それぞれに異つた感興を伴つて参ります。ウキぶりのウキの形狀及使用法も随分多様なもので、一々やつて見るとこの位面白いもの



はない。こゝが釣の趣味の極致だとさへ推賞される方があります。釣の妙味は手の感覚、視覚、聴覚と色々な方面から得られ、それが一々喰込み方によりて異なるものでありますから、あらゆる方面に其機会をつくることにしたいと存じます。これが解つて来れば自然合せ方も体得されて来る譯であります。

次に引上げ方ですが、元來合せらるまでのことは、そこに多少の巧拙はあつても、大小引かけ得るものである。釣の上手下手は寧ろそれを無事に引上げ得るかさうかによりて分れる位で、しかも引上げるまでの處が釣としての最妙味を存するとすれば、これはなかなか骨が折れる。先づ注意すべきは合せらる呼吸が、強くすべきもあり、軽くゆるくするのもあり、引く氣味があり、チーツと糸を止めるだけのがある。魚の性質と仕掛と、流れの工合、釣場所によりて、そこに千變萬化を呈して来る。

スゞキは鰓を洗ふ、鯛は走り込むと申します。鯛は最初コツコツン又はギーグーツと押へて走込んでしまひます。これを引よせるにしても、最後まで向うむきのまゝ、走込まうとした形で上つて来る。これを緩なすことがなく、骨である。馬關海峡で大鯛を釣つた方のお話では、

さうしても上らないので、糸を一枚の舟板に結付けて海中に投込んで成行に任せて、約一時四五十分も費したさうで、しかも道具の道糸は二挺振を繋いでおいたさうであります。スゞキは鰓を洗ふ、ハマチは一寸でも糸が緩めば在來の鉤では直に抜けてしまふ。しかも引けば魚が強く抵抗します。斯うして魚には飛切り丈夫な仕掛で、かう太くは魚は來ないかと思ふ位——と申しても程度も工夫もありませんが——のものゝ宜しい。そしてグーもすうもなく引いてく引あけるのであります。

竿つりでは、魚の大小と場所の工合、或は竿の調子なごをよく考慮し、極めて餘裕綽々としてよく魚をあしらふべきで、波瀾萬疊の間に妙境を見出すことを心掛けるのであります。そこに手よりも頭に充分の餘裕を持つて、緩急を計らなければならず、殊に魚の喉にかけるか、口をかけるかなごになると、愈妙技神に入り、眞に三昧境に浸ることが出来るとも申されませうかと思ひます。

それに最後に魚を掬ふことでありますが、漁夫はあの重いタマを直立にして急に突込み、素人は下から受けるやうにする、なかには冠せるやうにもする。これらは常に練習して見るのが

よいので、他の人の魚を掬つてやるとか、空しくひで練習を試みるか、魚と場所それらにや
つて置かなければ、一旦緩急の場合に魚をバラして了ふものであります。鯉を最後の数秒に跳
ねて逃がせたり、慌て、スバキを掬はんとして糸に引かけて切つたり、意外な不覺を招くのは
この練習に缺けてゐることを思はねばなりません。外國のアングラは、これらの凡てを練習
場又は練習會に於てひと通りやつて行く處があり、それだけの競技會を催す位で、我邦の如き
直に實戦に入るもの、多いのとは餘程變つて居りますから、此点を見るも基礎となる豫備智識
と技能の必要を感じます。

さて前後はしてゐますが、不完全ながらも釣に關する大要をお話致しました。そこで尙一寸
申残してある二三に就いて注意を願ひたいのは、第一魚の處置であります。水の中で藻掻いた
魚には、生簀に入れると直に仰向になり、遂に斃れてしまひます。そこに殺してしまつたのが
よいか、生かしておくべきかを考へて見なければならぬ。尤も大抵の魚は歸るまで生かして置
くのですが、それをさうしたらよいかといふと、前申したスバキの様なもの、釣上ると暫く
船板の上に置き、折々杓で水を打かけてやります。すると魚が跳ねます。三四回やつて後、生

簀に入れると多くは助かるものであります。さうしないで最初から生簀に入れると、暴れ廻り
或は水壓の強い底にゐた魚が水面近くになるに伴つて、水壓が減じて來るので、鰓の瓦斯が張
切つて來て、沈んだり普通に泳ぐ力がなくなり、或は草疲れて來るのであります。鰓の如きは
竹針を肛門の方から刺して、鰓のガスを排泄する。グチの如き甘鰓の如き、口から胃袋まで
吐出すこともありませんが、これらも一々鉤尖でちよいと破る、即ち魚それらに外科醫の手當
が必要とするのであります。

また殺す、即ち殺すにしてもそれらの方法がある。魚の棘に刺されても大變ですから。一
通りメ方も心得べきであります。烏賊は胴を攫んで逆さにすると、先生は八本の足を閉く。そ
の中央にトンビとカラスといふ口があり、その横に水を吐く穴がある。その間から斜に楊子箸
を突込んで、クルツと捻ると、さつと色を變へて死にます。魚の生命を早く斷つことも一の道
徳である。殺すべきものなれば一分も早い方がいい。それが却つて鮮度を保ち味もよいことが多
いものであります。

ヒラメや普通の魚は目の下の後部、延髓と思ふ部分に刀なり魚かぎを入れてえぐる。コチは

頭の頸部から魚かぎを入れて一二度捻る。太刀魚は頸部をかむか、頭部を舷側に叩付ける。カレイは寒くなると一寸とした位では死なない。鍋に入れるとパチ／＼とはねて思はぬ失敗を招くものであります。總じて鰈の如きチーと底に定着する魚は生きる力が強くキス、サバ、アユの如き活動の烈しい魚は、水から離れると存外生きる力が弱い。人間でも足の短い腹の太つた人は、体としての活動力はありませぬが、少々不味いものを喰つてゐても、また少々悪い空気に棲んでも随分達者であります。これは申談ではありませぬ。胆汁質に富んでゐる人は、多血質の人よりも丈夫な所があります。鰈に胆汁も多血もありますまいが、定着する魚には生きる力の強いことは争へませぬ。兎に角魚それ／＼のメ方も一寸覚えておいてよいと思ひます。最後に少し釣に關する愚見を申述べてこの項をへたいと存じますが、實際我々が魚を釣る上の方で不愉快不便を感じるのは、先づ思はしい釣具の手に入らないこととあります。テグスなり鉤なり竿なきがなか／＼選擇に迷ふものであります。これは専門の商店に就いても一應は分りますが、使用して見ると如何にも面白くない。殊に最初は金さへ出せばいかなる良品でも手に入るとも考へるのであります。大体天産物のことではあり、揃つた良品になると容易に

手に入りませぬ。淡路の由良では天蠶糸製造職人が千人近くも日夜従事してゐるさうですが、良品はなか／＼出来ませぬ。同じ一厘柄、五厘柄と申ししても、一本々々調べて見ると、一様でない、ボツリ／＼切れる。その見分け方も色々あり、商店が果して親切に扱つて呉れるかも知れず、全く骨董品同様に扱はれてゐるのはこの上ない苦痛であります。鉤にしても焼もよく品質のよいのは折れ易いのがあり、型の名稱太し細しも東西または製造家によりて異り、太くても焼の甘いのはグイと伸びて了ふ様な次第で、道具の改良及買入方に就いては、特に交互に熱心に研究して戴きたいのであります。

神戸の浅井謙太郎氏は自家用の釣具研究に就いては熱心な一人であります。船の機関長として多年従事してゐられただけに、それが頗る實用的で面白い。魚が深く呑込んだ鉤を外すことを工夫され、尙底でのかゝり外し、他にも色々あります。普通に鉤を抜けば魚を殺し、或はこれが爲に時間と手数を要し、肝心の好機会を逸します。鉤はつしは歐米にもあり、内地製のもあり、またそれ／＼随時の工夫もあります。従來のものは一旦外した鉤を引出す際に、また他の部分に引かゝりなまきしてうまく行かないことも多いので、この点に於ても浅井氏はなかなか

かよく考案されたもので、今少し改良すれば完全なものにならうかと思ひます、英佛米にはこの専門雑誌、釣具店のカタログを見ると参考品はいくらもありませんが、斯うした考案は素人なるが故に思付くことで、しかも興味の深いものであります。

リールの如きも、洋式より更に簡單で丈夫なスプリングを附けたのを浅井氏につくられて居ります。調子もよく感じ、はぜ釣に糸を伸ばす折でも、一寸遠方に投げ込むにもよいやうに思ひます。なんでもそれ、専門の立場からの御研究に俟つ外はありませぬ。

東京釣友會では昨年大正傘といふのをつくられた方があります。斯ういふ形で不用の折は疊

んで懐なりポケットにも入ります。これが好評を博して會中に流行し、



この式の天狗が各方面に押掛けるものですから、釣友會員のことを蝙蝠印と綽名して權威を示してゐるさうであります。尤もこの傘は強風には蓮の葉の如く反り返るのではないかと思はれますが、兎に角釣る上の便宜よりして、かうした漁装や辨當にまで改善を加へ、この趣味をしてより愉快ならしめることが結構だと存じます。

話が戻りますが、釣道具店も大勢に順應して、釣客に満足を取揃へ、且完全なカタログを備へて貰ひたい。賣る方も買ふ方も一目各種のものが取引が出来ます。船頭にしても、素人客に對して、殊に遊山氣分でないその釣の趣味を逐ふ者には、もつと親切に指導して得心するまでに説明を加へて、趣味を深くすべきであり、殊に沖釣でドシ／＼潮流で流されて行く處を漕戻つて時間を要したり、或は出發が遅れてその日の潮に乗る機会を逸しなごした折には、そこにモーターの活用に依り便ならしめるやうなことも同好者からして大いに促進せしめたいことであります。

尙釣の案内であります。互に釣場所を秘密にすることも已むを得ないことでありませうが、斯くては初心者は一、二日半日を楽しく暮すことは出来ませぬ。釣道具店での噂も参考にはなりませんが、前にも申上げたやうに、聞いてから出かけたのではさうも面白くない。然らばこゝにその土地々々に適切な釣遊案内をつくつて何人にもこれを開放し、同時に刻々のことは互に知らせ合ふことの必要を痛感致します。尤もその内容は一々實地に觸れたもので、詳密な程有効であります。

それから釣場所とその設備であります。我邦では所謂舟屋式の外は釣手の爲に何等の見べき設備がないと思はれる位であり、場所としても河川法や衛生取締の上から遊漁として開放されてゐる所もあるにはありますが、大阪市中の川でも築港でも實際の遊漁者として何程の便宜を得てゐるかを思ふと甚心細い次第であります。これは大に考究して、相當の便宜と自由を得るやうにすべきこと、思ひます。

米國の太平洋沿岸では、棧橋のある所は愛釣家に開放してあることは申すまでもなく、そこに集るものも實に多大な人でありますが。しかも交通道徳を尊重してゐますから、些の不都合も生じませぬ。これに比し大阪築港棧橋の釣が嚴禁されてゐるのも遺憾であります。この意味に於ては少しく否大いに反省したのであります。また郊外では堺淡の輪の如き、或は川筋や海濱に接續した遊園地なごは、電鐵會社なり市なりが少しく力を入れるならば、立派な岡つりの便利が得られると思ひます。淡輪の海に向つて右方の山脚の海岸の岩礁の上とかいふ邊なき、波浪の影響少き方面を物色してはさうでせうか。或は特殊な釣魚俱樂部を設け、これらの完成を期するも結構ですし、夏季山間魚を釣る上の設備とか湖上の鱒つりなきにはこれ

く適當した方法は幾干もあるべきこと、信じます。これらは早晚機會の到來することではありませうが、互にこれを促進し第一國民保健及山林海洋に關する思想を涵養する上に於ても、國家としても斯る健實なる趣味の方面より指導することが急務であります。

それからスポーツマンとして心得べきことは釣の道徳とも申すべきことではありますが、他の人の竿の上に自分の竿を持つて行く。また横の人が一尾釣上げて始末してゐる間に、そこに糸を投込むなを見受けますが、これは實に怪しからぬことであります。また魚族保護の上から或は單に釣そのものに親しむ以上無暗に多きを食ふこともさうかと思はれます。

米國の紳士には、今日は五枚あればよいと思ふ日は、よし二十枚つれても身長其他參考資料を記録しては放流します。一日二十五枚と制限され、或は何時以下の幼魚は釣つてはならないとあれば嚴守してゐます。釣具でも飛離れたしかも他の人の迷惑するやうな仕掛は持参しないといふ、誠に美しいことでありますが、吾々も獨自から反省し慎むべきことは随分數あること、思ひます。趣味を第一義とするものはこの雅量襟度を以て、魚に對し人に對し、しかも研究を深くして一人でも多くの人に樂ませる。之が現代文化人としての義務であり特權としたいの

であります。

當地の江子島に現在病癖にゐられる澤渡榮翁なごは遊漁者としては最尊敬すべき人格者であります。歐米殊に米國に於ける釣魚に於ては稀に見る通人で、今日までに隠れたる逸話を豊富にお持であります。曾て中宮寺湖の鱒つりに特殊の釣具を考案して成功し、しかも漁師仲間、それを惜氣もなく傳へられ、また或時は播州家島に出漁されて、チヌ釣の良法を漁民に傳へ、漁民の生活に恵まれたこともあり、また抱車夫と共に大和アルプスの溪流深く數日も入込んで、遂に車夫が市中のお伴ならば兎もあれ、こんな苦しいお伴は御免だと舞戻つたに拘はらず、遂に單身で目的とする一尾の山間魚を釣つて引揚げられたこともある。大正九年からは輕井澤以上の避暑地として風光明媚な信州野尻湖の鱒養殖場を擴張し、十一年は仔魚五十萬尾を解化放飼され、釣をもつて餘生を樂むと共に一般愛釣家の爲にもこれを開放されるさうで、海に陸に人の能くせざる方面にまで一步を進めて斯界の先驅たらむとする研究的態度は、學術及漁業の大本にも裨益することであり、吾々をして大に發奮せしむる次第であります。斯うなると釣魚も單にその時限りの娛樂のみでは濟まされませぬ。

實際今日の如く交通文化も非常に發達して居るに拘はらず、斯道ばかりは僅に東京大阪間に於てすら殆んど没交渉たるやの觀があり、釣具漁法の各地各様なる、その間交互参照して見ることなごも存外小部分のことで、如何に便利で興味ある思付も一向相通じないのは甚だ遺憾な次第であります。

文献の上に見ましても、現在趣味娛樂に關する書籍雜誌の發行は實に驚くべき多數の統計を示してゐるに拘はらず、釣魚の方だけは良参考となるものは實に寥々たるものであります。英國では釣好きの上流紳士中には、自分が体験研究した釣は、これを三十五百部といふ風にタイプライターに打たせ、或はコッビーに取つたりして知己に頒つて居るといふ風ださうでありますから、これら貴い文献即ち歐米釣魚に關する出版物は千二百種位に上つてゐるだらうといはれてをります。随つてその趣味と釣具その他に關する智識も、土地の遠近、階級の如何を問はず普及する筈だと思はれます。

我國では徳川時代に出來た文書は多少ありますが、これは主として江戸趣味の一部を極めて簡單に書いたもので、一般的なものでもなく、下つて明治になりました、讀物としての記録

は多少見られますが、科學的になるとごうもお耻しいもので容易に見當りませぬ。明治三十二年頃に日本釣魚學全書といふ小冊子を見たのですが廣く出て居ないやうですし、全三十九年石井研堂氏が「釣師氣質」といふのを發表されてゐる。これが稍纏つたやうであります。しかも東京附近の資料としてあります。雜誌もその後二三見受ましたが大抵は續かず、大正九年に渡邊氏の釣遊案内が出ましたが品川沖の消息が主となつたもので、汎く取入れてはゐないやうです。

そこで關西方面でもなにか今少しく各方面に亘り、お互に興味としての研究をする記録及び會合機關が欲しいと熱望して居ります。少くも文字の上のみでもと思ひますがそれすら認められなかつた次第であります。東京では釣友會報及他にも報告ものは見受けませんが、矢張り意味のものが見られないのを物足りなく感じます。米國では實に堂々たる釣専門の雜誌が數部發行されて居り、更に各地釣魚俱樂部または研究會が出来て居り、高原から大洋的な處まで、なにかしら參考すべき機關が出来て居るとすれば、この四面環海、山水明媚な我邦、殊に水に縁深き當地方の如きは、文字の上は勿論、實際的方面に於ても、更に文化的な智識を盛んに吸

收して、この豊かな天恵を享受したいもので、それにはなんとしても實質的な、しかも最開放的で寛いだ會合、または團體を組織するの必要を痛感するのであります。そして互に質疑應答は勿論、時に専門學術者の指導を仰ぎ、時に各方面に於ける視察交渉報告等に應ずること、し、そして之を家族的な清新な趣味として取入れることにしたい。諸君には特に此方面に着々其歩を進められんことを切望致します。

日本アルプス溪流の岩魚釣

一、岩魚は水の精か

鮎は惻巧だ、他の魚が見向きもしない水底の石の水垢を舐めて生活の安定を求めてゐる。それに清流に涼しい一生を送る爲めに賞美せらるると言ふならば、登山家の知る如く、五六歩踏込めば見る／＼慄ひ出して、頭の心まで浸み入る程清冽な高山地帯の溪流深く上り行くヤマメや

岩魚の如きは、水の精とも稱すべきであらう。

海拔四五千尺の登山道を分行く時、溪流に臨んで筵を吊した掘立小屋に人が熊か分らないやうな樵夫や炭焼の荒くれ男を見るが、其人達の唯一の珍味は此魚である。瑞西の山水美に憧れて来る歐洲の避暑客には、ヤマメ即ちトラウトを釣る爲めには、僅々三間足らずの釣場所を邦貨の五萬圓内外で落札し、夫に別荘なきに仕舞つてある組立自在な釣小屋を設けて、明暮魚を狙ふものもあるといふが、我邦の中部以北の深山では、斯うした男が思ふ儘に漁り歩いて、獲た魚は惜氣もなく汁にするか、笹竹に通して焚火の周圍に突差して焼くか、燻製にして置く。若しトラウト釣の外人が此水の精を喰つて生きてゐる原人振を見たならば何と思ふだらうか。

イヤ左なくとも、阪神の漁客が手釣の明石鯛の洗ひに灘の芳醇を思ひ多摩川黨が鮎の鹽焼に生粹の香味を占むる丈では全く物足らなく感ぜられる。鯛の美しさは見られずとも、鮎の香氣はなくとも、登山宿山間温泉場での刺身鹽焼魚田フライ或ひは白焼の養付に其邊で摘取つた山蕨、山うぎ、蕨、天然わさびを取合はせた旨さは又格別で、都人士の食膳には滅多に上らない此魚、しかも全く異つた環境から得られる此快味には、吾々の憧れるのも無意味ではない。夏

は天幕生活でもやつて、一つ此つりを研究して見ては何うだらうか。

二、魚の生立と漁季

イハナは我邦中部以北の溪流奥深く棲み、普通四六寸、大なるも七八寸に過ぎないが、少し廣い流れになると、越後邊でいふアメナが多い。之には一尺二三寸より稀に二尺に近いものも見られる。イハナは水中では暗い色に見えて頭部稍丸く、全身に目玉程の淡い斑點がある。鰭は根元に晴やかな黄味があり、腹は白いのと薄桃色のとあるやうである。ヤマメはあつさりした灰色で口元が少し尖つて全身に黒い斑點があり体側に十ばかりの縦線のボカシがある。木イハナはあまり移動しないらしいが、ヤマメ又は高地邊でイハナで通る縦線のある魚は晩秋に大分下流に下つて小石底に産卵し、新子は寒明けからそろ／＼上る。四五月には三寸位になつて釣にかゝるが、盛漁季は矢張り七八の両月で、逸物は雪解水の少ない頃に上り詰める。

大正十一年六月中旬日本アルプスに出掛けた友人黒田六花氏の寫眞と共に寄せられた通信では、島々の上手の稻核でイハナ八寸の焼魚を見、奈川渡で尺八寸の大鱒七本を茶屋で見届け、上高地温泉附近では四五寸の灰色で水中でもキラキラ縦線のボカシがあり、且頭の丸味あるイ

ハナを釣つたが、同地では此種が多い。逸物は少し先でないと思われぬとある。
 會津地方の一寸した細溪では眞夏の水温が尙高く感ずるかして水源の極冷たい清水の湧く邊までボシヤ／＼やつて来る。「冷え付」といつて子供が手づかみにするさうであるが、實に敏捷な魚であるから、漁夫として多く投網又は築で獲る。併し吾々は矢張夫れを苦心して釣る所に感興が湧くのである。

山間温泉の避暑客や登山者には、詠向の樂事である。釣りは各地各様である。茲には日本アルプス梓川上流の二三例に卑見を加へるのであるが、土着の漁夫通人に聞けば中々親切に研究資料を與へてくれるから難有い、お断りするが兩魚共發育の程度で仕掛や餌に差はあるが、釣り方は略似てゐるから、以下併記する間に諒解して戴きたい。

三、梓川邊の仕掛と釣餌

竿は眞竹の軽目な少しハネのよい尖細の延て約十二三尺、外にタマ餌入魚籠等を用意する。糸の全長は竿より三尺位短くし、竿先の糸付より三四尺は馬尾の四本撚を繼合せ、次は十分力ある手みながき中細テグスで、鉤元四五尺は極上透明の本磨き細物を付ける。

ツリ方には擬餌鉤と餌つりがあつて、三四月の newly 釣るには赤味ある心を巻いた蚊ばりを幾本も繋いで小鮎のやうに流し釣りをやる、鉤は播州邊のお粗末なるものでお尻は赤玉付、夫れから長くない黄色の鳥毛の出たアゴなしで、初めは浮子下六七寸の流しづり、六月では極軽目の丸錘付で、鮎のドブづり風に上下して魚を誘致する。

尙少し釣り方の呼吸はあらうが、輸入のアゴ付平折のトラウト釣からも篤と研究すべきもので、ペール・イブニング・ダンとか、レッド・スピナーとか、ブリーユ又はオリブのダン卷鳶色勝ちなもの、胴が孔雀の毛で周圍を褐色ダシダラの鳥毛で巻いたものなご、蛾、蛹、瀬蟲等に似たものを、季節天候水色場所又は魚の大小により十二乃至十四號形のものを一々實驗記録して各自が持寄り、釣り方と共に更に適切なものを考案すべきである。

餌つりの鉤は、少し腰のコケた袖形に近いアゴ付で、先づ大きさは大阪の六七分、軸は細手のオリブ色が銀メッキがよい。中には丸形又はハゼの大形ばりなごを使用し、軽目の丸錘は普通四六寸上方に附けるが、重量距離は區々である。

餌は蚯蚓、瀬蟲、柳の蟲、女郎蜘蛛又は川邊の樹に居るクモの小さいのなごである。上高地邊では

一寸蚯蚓は探しても分らないが漁夫山男なごに聞けばすぐ判る。中形以下で鉤先まで通して了ふ。蟲を垂らしては夫れだけをチヨクウれるからである。潮蟲は瀬の石を起すと、角のやうに二本の尾の出でる奴でムヅ／＼這ひ出す。頭から一つ差して尾の間に心持丈鉤尖を見せる。人に依ると之にアゴ付の蚊ばりを川を又、普通の鉤では二三匹差して鉤を見えなくする。柳の蟲は採集携行するもよい。柳の新芽の軸の脹れてゐる所丈を採つて、使用の時に割いて出す。徳木峠又は檜澤小屋から上高地温泉に行く道には見事な柳の大木が多いから、探せば之にも居るであらう。兎に角季節から言ふと潮蟲柳蟲蜘蛛み、すの順序が良いやうである。

四、釣り方とその快技

水の澄んだ時は蚊ばり、薄濁りの時は餌づりが良いとしてゐる。晴天には朝は九時頃まで午後は四時より夕方までとするが、餘り風があつては糸が吹飛ばされるので都合が悪い。曇り勝のトロンとした天候が誂へ向である。水が透明で魚が目敏いから、人や竿影は勿論無風の時は草木を搔分けるにも注意する。尤も背景が暗ければ助かる。大樹が川中に蔽被さつてゐれば愈々妙である。

蚊ばりの釣り方には指導者があれば一寸諒解するが、餌づりの方は餘程呼吸がある。魚は瀬脇から上るが、七八月の眞盛では瀧つ瀬の落ちて来た壺の巻込から餌を入れ、泡立つ流れと渦の淀みとの接合點を流す。又は荒瀬の岩影のたるみに落とし込む。時として大樹の蔭で薄暗い岸の上り込みの流れに静かに入れる。餌を石影より流れに引出さうとすると、魚は石影から素早く飛か、つて引込む。釣手は、一寸呼吸を見て、引く氣味で直ちに合せる。土着の釣手は、潮蟲又はみ、すなごは、凡て底を這はず心持を忘れないやうにと注意する。之を幾度も折返して見て形がなければ位置を變更する。此魚は釣上る。之は釣損じた魚が逸早く下ると、魚は次から次へ警戒する爲めに、つり下るは不利だとせられる。併し一概にも言へない。

上高地温泉附近では、川沿ひに岩の窪みが深い水溜となつて流に通じてゐる所が方々にある。之には澤山の魚が入込んで見える。物影から餌を落とすと魚群が電氣に引付けられるやうに寄つて来るが、餌には觸れないでパツと逃散つて影を潜める、之にはコツソリ静に餌を入れて之を飼せると、石影から一つ二つ弗々出て来てチヨクウる。其中の周章者が引込む處を手早く合す。一寸面白いが中々釣れない。

合せた魚は引上ぐる拍子に左手のタマで宙受の曲藝をやるが、例の七八寸ものとか、アメナの逸物になると水勢を加へて竿も折れよと引込む 全く適度に緩めなければポツンと切られる。魚は自由に荒れ狂ふ。岩角で糸が摺れる、岩影のたるみに魚が入ると、弓と張切つた竿が急にフイと跳返る。バラレたと思つて冷ツとすると、今度は手強く頭を二三度振つて瀬に出る。釣手は飛鳥の如く岩を飛び、水に入つて呼吸を合す。石の水垢でこつては起き直る。タマを落す、腰の物は濡れるといった譯で、活映にすれば「こ、暫くは追ひつ追はれつ光景」を演ずるのである。

五、本支流の釣場所

ヤマメは暖國でのヒラメ又はアマゴで、夏は水源近くに上るから狙へば初春の頃の下流の方を選ぶが、濃越では山間ならば夏でも相當に形がある。長良、木曾、九頭龍、日野の上流が夫れであるが、之のみで嶮難の跋涉も何うかとすれば、白山下の市の瀬田泉——福井より越前電鐵で勝山下車、谷峠牛首を経て一日行程——アルプス背面では飛騨の平湯蒲田の湯及吉城郡上寶村の双六谷溪流——越中からは船津より一日行程、木曾からは例の中山七里か——に至るには

夫々の釣場がある。東京ならば草津鹽原行又は中央線の遊覧又は登山旅行でも若干の氣分は味はへるだらうが、眞の妙境は矢張り日本アルプス登山を兼ねた上高地温泉行であらう。

信州松本驛下車——東京は飯田町、京阪神は中央線から——島々まで筑摩電鐵——こ、で登山と釣の方略を定める、イヤ竿や釣を調べる。白骨、上高地温泉へは何れも一日行程、泊れば清水屋三圓。

之から梓川本流に沿つて釣心勃勃々野麥街道を馬車——四人乗三圓——で南する約一里にして稻核に達する。此邊一帶は六月に入ると見事な魚が澤山なことで、七月月上旬頃が眞盛りである。坂本屋一泊二圓。

更に急斜の山腹を穿つた街道を約二里で奈川渡に着く。此半途までは馬車は大丈夫と思ふが馱者が危険だとして愚圖付けば徒歩にする。奈川渡には大きな水電工事で素的な堰止があるから殊に前記黒田君の行つた頃が魚の溯河期である爲魚族多く、水濁の折、投網の盲目打で大マスの七本も獲れてゐるのである。茶店もあり稻核との間を來往する或は細支流をあさつて盛んに釣まくることだ。イヤ鱒つりの經驗ある方は會心の妙技が揮ひたからう。

白骨行は街道を岐れて尙も川に沿うて檜峠の大峻坂を踏えるが、之は割愛して島々に引返し、梓川に合する一溪の島々谷から上高地へと出發する。

登山家お馴染の島々谷は松本小林區署管轄區域で、材木運搬のトロ軌道の利用が出来れば大いに助かる。溪流が實に美しい。サワラ、ツガ、モミなどの箭着たる一大深谿で太古の面影を十分味ひつ、三里で小林區の出張所夫れから約二十町で岩魚止の茶店に着く。此間にも澁茶を侷める女性の住むバラツクが出来てゐるさうだ、發電所も二三ある。此一溪でも往復二三日を熊に見舞はれさうな暗い森林の蔭で樂める。此邊は大に釣黨に開放した設備が欲しい。岩魚はこれからは急湍で上れない位で、眞夏でないといふ。茶店の此魚のテンプラ料理は少し不味い。魚も無殘念だらうイヤ釣客にかゝるのが本望だと待ちあぐんでゐるかも知れない。

六、上高地の原人境

日本アルプス唯一の展望臺で知られた徳木峠の峻嶮を踏える。めかした駒鳥が啼く、杜鵑や鶯との交響樂である。巢籠りの山雲雀が岩影からチロ／＼飛び出す、春が二度來た氣分で柳

の大樹の中を梓川上流五千尺旅館へと下る。穂高は近いが心はカツバ（河童）橋から碧玉を溶かしたやうな清流に魅入らる。居る／＼、岩魚が脚下にウヨ／＼してゐる。上高地温泉までは十町餘である。六月中旬の氣温正午五十五六度夜間四十度近い――

兩岸の白樺樹林が目立つて來る。下流に燒岳の噴火で梓川が堰止められて出來た大正池に其網を張切つて兩方から交互に迫立てるのである。愛釣家は此間の白樺の蔭で天幕生活の原人振を發揮して、前記の快技を恣にするのが最痛快であらう。登山なまは忘れる。そしてあ、でもない、これも駄目と、魚から散々翻弄されて、今度はと思ふ時分は歸る日が來る。

イヤ歸るどころか猛者連は更に四里半を白骨温泉に下つて檜峠を奈川渡に越すか、或ひは西方四里半の安房峠をダンス氣分で樂々と飛驒の平湯に出る。平湯から越中に下るに従つてイヤハナ、ヤマメ、アユ、ウグヒと逆練習が出来る。又南方へは山越に木曾へと長驅するのであるが、私は何處までも上高地と梓川が放れたくない。殊に釣の研究としては登山家の出盛る前に出掛けるやうにお勧めしたい。

別府温泉の住吉祭の「何とか時賜嘉魚」とある幟が今思出される。嘉魚は川ではイヤハナと讀

四月の沖釣

渡津海の底にも春は動く。冬眠より覺めた魚族は、沖から磯へ、南から北へと行儀正しく訪れて来る。こゝだ釣の天地は無限大に展開せられる。さて何から迎へようか。

性に目覺めた櫻鯛は、勢づいた春の暖潮に乗じて、節分頃より年長者が先頭となつて外洋を出發し、各がじ、生れ故郷の沿海内海へと、お産の紐を解くべく花々しく入込んで来る。阪神での本場は明石海峡、頃は例年魚鳥鱈網の噂に上る四月初旬、之を狙ふのが吾々の本領である。瀬戸貝賣の話ではこの磯にも手長蛸の新子が燃える程生いたといふ、之が遠來の彼女を

迎ふる唯一の御馳走である、之を聞く丈でも胸は躍る。

明石では西濱一帶の漁船に便乗して一日一人二圓、外に餌道具代飯代は凡て實費、副食物は罐詰か焼豚でも用意すればよい。其日の潮に依つて、前晚終電車で行つて漁夫の家に泊る。場所は淡路西浦沖、或は播州高砂沖まで四五里も釣つて行く。

例の「かぶら釣」に蛸の足の二筋差、一切漁夫に教へらる、儘に糸を下す。一寸底調が済むと、魚を誘ふ爲に一尋位づゝ糸を手繰る。又下しては手繰る。之を繰返す間に鮮かにコツン／＼キユと感ずる。キユツと強く合す。さア引くは／＼、漁夫は之を「走る」といふ。實際よく走る位引込む。糸に緩みのないやうに適度に延ばす。そして隙あらば引寄せ。又延す。魚は最後まで向う向きのまゝ上つて来る。半時以上も費して順次引よせ、碧水を通して、金色に輝く彼女の姿を認めた時は見てゐる丈でも痛快だ。

入込の魚は大きくて喰がよい。潮さへよければ少くも八九枚は當る。唯首尾よく引上げるか何うかゞ氣遣はれるが、そこに此つりの妙趣が湧く。

此釣は内海に限る譯ではないが、遊漁としては瀬戸内がよい。鳴戸から東讃、小豆島、瀬居

島——金山鯛の原産地——備前水島以西、尾道間の各島、伊豫の魚島は勿論、關門及豊後水道附近は正に理想郷である。鯛網見物としては、讃岐の引田、瀬居、備前下津井から水島へ、尾の道からは田島、魚島其他へ、幾干でも便船がある。煤煙にくすんだ花蔭を、懐手にくさめしながら、神経に尖り切つた白顔に目ばかりキヨロ付かせて通る都人士なみに、一目なりとも見せたいものである。イヤ近年は之を狙ふ人士は滅切り殖えた。「商賣にする私等でさへ面白くもんなア」と漁天の言ふのも無理もない。

又鯛でなくとも、港外の防波堤、各護岸等には、そよ吹く東風に打寄する春の潮に乗つて、めばる、あいなが捨石に群集して来る川蝦の「ふかし釣」が面白い。「鯛の投込み」も愛嬌がある。花見鯛の舟釣ならば、須磨の船頭付で行けば一日三五十枚は上る。白鯧も交つて来る。イヤ内海では夫迄に大鯧や鱸の春釣が盛に行はれる。日ねもすノタリくと春の波に揺られての沖釣は、何としても吾人の歡樂境である。(大正二、四、一六)

鮒の乗つ込と釣場所

鮒は東京が本場だと江戸前を振廻されても己むを得ない。奥深く潮の差込む川々は鮒の發育が馬鹿に良いからである。しかも東京には幾萬とも知れぬ閑人や熱心な研究家が居るから、釣り方も理想的に進歩してゐる。乗込時の此頃になると、是等の天狗が朝方の各郊外電車を獨占の勢ひで各方面に押掛る。北は利根の本流までといふ譯で、上方のアイザツク、ウオルトンも聊か忸怩せざるを得ないではないか。

併し近畿地方でも行く所は澤山ある。東は琵琶の太湖を控へ、淀の各細支流は勿論、神崎川から猪名の上流、殊に軍行橋の下流に理想地があり、河泉北攝方面では中古以來の名ある池堤も澤山であり、神戸ならば東播の鹽屋、垂水、明石、大久保、土山各驛より程遠からぬ所に、數へ切れない程澤山な池がある。

河では雪解水の冷氣に堪へられないのと、はち切れさうなお腹を抱へて春待ち兼ねた魚群がこの暖氣で競うて支流の渾みへ乗込んで来る。池は池でイチびつて邊地を遊廻る。之を狙ふの

が年中の書入である。流では成るべく瀬を見て糸を下す。
 胴の極細い小形の鮎鉤二本を、錘の上下四五寸離れて取付ける。手みがきテグスは一厘乃至一厘半柄で、上は可なり太くてもよい。錘は流に應じて多少軽重はあるが、泛子——丸形の紅白——をユラ／＼と水底に引込む位の軽さを見計らう。竿は細ッそりした延の九尺位がよい餌は細い縞み、すの一ツ差。そして靜に下して行く。當りがなければ泛子を水面まで引上げては下す。その途端うきが川上へビク／＼と動いたら合す。形があれば辛棒し、數回やつても形がなければ位置を變更して何處までも行く。これが所謂「シモリ釣」で最も面白いが、神崎川邊では芋の餌で引張の沈み釣も妙である。兎に角爾餘はその地の釣り方を参考して各自に工夫する方が効果が多いのである。

池では釣る前晩又は早朝、味淋粕か味淋で練つた酒粕若しくは煎糠の團子を丸餅大に固めて投込んでおく。何でも香の高いものを付け餌にする。仕掛は河づりと大差はないが、魚によつては一口鉤がよい。釣り方は普通ウキ釣で、一二本は投込で立鈴にかける。此方には鈴も鳴らさないでグーイグー引込む程の大物が見舞つて来る。餌は縞み、すが一等だが、ウキ釣ならば

搗き立ての餅、豆の粉にまぶした飯粒でもよい。

之にはよく諸子が邪魔をするが、之もハスの縮み付鉤にさい蟲を付ければ退屈なしに釣れる場所がある。琵琶湖諸川の春の樂事で、丁度子持の極大がウンと釣れる。子供には愛嬌が深い。尙同好諸兄に提供したいのは、カタサイとヒラメである。カタサイは河内邊の池で飼育してゐる。鮎の一種として發育も良く、肋骨も狭くて風味がよいから、川魚料理の珍として迎へられてゐるが、何うも釣れない。水の中層をイソ／＼泳廻り、投網を入れると、其對岸に跳上る位に素早く逃げる。一寸鉤にはか、らない。あれは潮來出島附近のサイ(ひごひ)の釣り方を應用しては何うかと思ふが、何うも此魚の研究が出来てゐないのは、大阪附近の同好者の遺憾とする所である。

今一つは中國のヒラメ——北國のアマゴ近畿のアメノイナカ——釣である山間ではまだ雪のある内から樂める清流の釣として推賞すべきであるが、何うも之を狙ふものが少い、何分一寸皮肉で言外に現せない處もあるが、各川筋の老練家に就けば容易に體得するから、各自大に研究を進められては何うかと思はれる。如何に敏捷な彼女も、少し研究すれば春の興を添へて吳

れる。餌は川蟲柳の蟲で、近頃百貨店などで賣る輸入のトラウト擬餌釣の中に稍理想的なものを散見してゐる。頗る技巧的で藝術味の豊かな處に此釣の妙がある。今年には私も初夏の頃までに、信飛加越方面にでも出掛けて少し研究して見たいと楽しんでゐる。

兎に角何魚でも研究するほど興が乗る。釣趣味は實際環境の那邊より湧くか分らない。茲三四年來、各地各様の同好者が互に來往交驩して、此民衆的な趣味の向上を計らんとする新機運が動いてゐるとすれば、陽春半日の興をやるにも、唯漫然と出掛けないで、及ぶ限り研究的合理的に之を試みたい。

鮎の川開きと蚊ばり釣

川漁として最も代表的な鮎釣は、各地方それ々の取締規則や漁業組合の規約などに拘束せられ、それに河川改修水利事業鑛毒などのため魚族が減少し、好釣家の興を殺ぐこともあるが、

それでもこの魚の盡きない限り、これのみは見逃すことは出来ない。

大阪では三月末から一寸鮎を釣る。元來幼魚を狙ふことは、如何なる場合にも紳士として深く慎むべきであるが實際六月——地方に依り遅速がある——の川開きまでが待遠しいもので五月の聲を聞くと、各地の川筋では、魚の發育、上り工合、狙ひ場所の偵察情報や釣具の詮索に好釣家を狂奔せしめる。

多摩川の川開には、東京の漁客が二三萬人も殺到し、その後の數日がこの釣の書入であるとすれば、事前に狂奔して必捷を期するも無理からぬ。いや東京のみではない。各地ともこれ沙汰で、殊に本年は客月來の雨と暖氣で、存外魚の發育良好との噂も高く、昨年の不漁に業を煮やした連中の鼻息は大分荒いやうである。

東京では遊漁者としての友釣は少し煩はしいので、蚊ばり黨が多い。それが過半は金澤流でこれに土佐、京都、又は土地の釣を加へ、中には合理的に研究して自身で巻く者もある。随つて京阪地方で百二三十種といふのが、東京では二百種を超えてゐる。何處でも好む「お染」でも新種が幾つもある。それが魚の發育の程度や、天候風位、水の流勢清濁、底の工合などで一々

選を異にし、僅々一二本の鉤で一日の吉凶が分れるといふ譯で、これには中々苦心する。尤も釣り方や仕掛の工合は在外簡單で誰でも分るが、鉤の選擇、場所の偵察等は、その地の實驗者又は參考書について、一應の指導を乞ふて概念を作るが捷徑である。

金澤、東京、京阪、四國邊では、成魚でも動物質の食餌を攝取するといふ研究が漸く肯定せられんとして友釣の出来る間釣れるだけの自信が出て來たので、一段と遊漁者の興味を唆り、各地相呼應して蚊ばり黨が激増しつゝ、あるのも面白い。

竿は東京、金澤の武骨な四五間物に比し、京阪は華奢な總塗の三間ものであるが、段々長尺を好む傾向がある。大阪では概して若鮎を狙ふためこれでもよいが、成魚を釣るには少し弱い、東京の竿にも改良の餘地はあらうが有効である。

所で大阪では、若鮎の上りをドブ釣するには、干した櫻海老をシガんで、盛んに釣場に吹込みながら鉤を入れる、試みに水中を透して幾十百の銀のメスでも引搔廻すやうな魚群を見ることとがある。馬鹿に成績がよいといふ。これが川開後にも効果があるかぎうかは知らないが一寸思ひつきである。

釣の種類は、お染、黄仙石、東郷、聯隊長、赤虎、赤えびなぎで、若鮎には鉤元を坊さんの拂子の毛、或は輸入ハスばりの縮みをつけこれが受けてゐる。

職漁としての技巧は友釣が最も進歩し、遊漁者としてもこれが普及してはゐるが、嫗む上においてには数の乏しさと可なり苦痛が伴ふけれども、この方は研究するほど技巧の方面に興が湧く。しかも餘程釣り易く、且深く水中に立込む必要もなく友釣で不向の場合——例へば濶や淵或は水垢なき石底の如き————適してゐる次第で、指導者があれば、婦人子供でも試みられ、誰も好む魚のことではあり、餌の心配もないから、初夏一日の行樂には十分である。

京阪神では、桂、淀、大和の木津、吉野、北攝の猪名、武庫の上流、播州龍野の諸川であるが、其他の細支流にもハスを兼て捨て難い所があり、また前夜から汽車で行くとすれば、好漁場は幾干でもある。中にも岡山から中國線で西行し、高梁川流域が頗る有望で、前記吉野と好一對で友づりでもこの釣でも自由である。兎に角各地の情報に依ると到る處の本年の川開は概して相當の賑ひを見せるだらうかと思はれる。(大正二一・五・二一)

夏の磯釣の快味

浴養に飽食晏臥はよくないが、さりとて激動を避くるものには登山探勝も考へ物であり、その歩きも興が薄い。然らば水に多くの親みを有つ之れからの趣向として、船遊や魚釣なごを兼ねるも面白い、同じく往くならば斯うした方面を選定すればよい譯である。

湯の街の夏は暑いとか、淫蕩的な情調の濃厚なものも困るといふものもあるが、夫れは各自の思ひなしで、一概にさう言つたものではない。早い話が別府でも、砂湯や地獄巡りなごの珍感には、数日でウンザリするものもあるが、朝な夕風風の涼味、一歩漕出してのひいやりした爽快さ、殊に磯傳をすると、正しく吹送り吹返す海陸風の涼味、高崎山麓から佛崎に至る十数町の翠山曲浦の風光は、海上から見ると全く湖上の静けさで、其間琵琶湖の鯛かきを思はせる張網の獲物を見、色々と特殊な釣の趣向を試みられるのも嬉しい。元來大分府日出數里の間は、人も知る随分變化のあつた火山地帯丈に海底の凹凸も甚しい、

山麓の護岸から五七十米突も漕出すと忽ち三十七八尋から六十一二尋も立つ所がある。夫れに東南は豊後水道を扼する佐賀の關、北は國東半島を控へた豊後灣の囊底となり、繩も網もいらぬ磯が多いので、多種多様な魚族が足を停める。釣るには確に妙である。

伊豫周防邊の漁民が、手船に米薪を積込んで、家族を擧げて入湯に来るのが此頃で、晝は釣に出掛け、夜は舟に寝て、幾日でも香氣に滯浴する。斯うした舟が波止の中に二三十隻も見受けることがある。イヤ普通の浴客でも、お定まりの宿の料理に飽き／＼するから、ソコは手釣の魚で好いた調理を試み、木賃の殿様振を發揮するも一興であらう。

北は焼拂事件で近頃問題になつた的ヶ濱から、東南は鎌崎龍宮さんまで、港内埋立護岸の十數町は、殆ど竿の入らない所はない。チヌ黒鯛アコ鰻アイナメ漢伏カタナギ鱧イナ鰈の子なご大小それ／＼の釣場がある。

尤も餌屋が乏しいので、各自が干潮時の磯邊や川尻で、ゴカイ、シヤコ、砂イソメなごを掘る。土着の太公望連と相伍して、麥藁帽の頬冠か、伊達巻の妻君に餌入を持たせてフウ／＼やつて居る。私なごは、時々岩イソメを買ひに、小三里もある所を電車で大分築港の手前まで行

つて、現場の蟲掘を口説落して来たものである。まだ物足りない連中は、網漁の人から活きた赤蝦やヒスゴを手に入れる。是丈でも中々良い運動になる。

夫等が夕刻から、きの岸にも三々伍々立並んで竿を上下し、何れも諸國訛の丸出しで、お國の釣自慢やお互に思ひくの研究を打明けて、ワイくはしやいでゐる、大鰻に小鯛の丸差し、チヌの潜り釣、カタナギの穴つり、モブシの大力づりなき、目先の變つた釣り方も大分ある、中にもモブシは朝市の生簀船を覗くと、サエや牡蠣の殻の破片を澤山吐出してゐる上、その鋭い齒と腮裏の喉骨でボリく貝を砕いて中身丈を呑込むと聞いては、更に餌の考案に一苦心をする、小時化模様となれば又夫れを利用してシグレの泛子釣を研究する。チヌや鰻も釣る。兎に角之れから先の海濱は納涼と浴客と共に中々の賑ひを見せるのである。

麥蘘柔魚は五月中頃には全長四寸位になる。形が見えらると、漁船が殆ど總出で夜づりに出掛ける。之には宵の内又は徹夜で客も便乗して行く。小さい間はだまし釣、大きくなると澤庵や小アジを付けた鉤で釣る。船毎に七十燭光の瓦斯漁燈が點る、豊後灣數里の間は星を散らしたうやに美しい。

喰止むと船の中に寢轉んで糸を手にして待つ。大空の星を仰ぎながら老船頭の昔の戀物語でも聞いていると、遠い磯山あたりでは杜鵑が夢の如くにしば鳴く。磯傳には人魂のやうな電車の火が稀に走つてゐるといふ工合である。

駄目といつても二三十、多い時は二三百も上る。丸煮にすればモチくと齒切がよい。同宿の甲乙にも之で愛嬌を振蒔く。實物宣傳の効果は靦面で、翌日は妻君も、お隣の客も「お伴を」と来る。夫れが八月に入ると全長七八寸になる。漁夫に割かせて干鰯にしてお土産にする。

此頃になると、湖面を過ぐる時雨のやうな小鯛の群が頻々磯近くやつて来る。今度は海面が霰に打たれる如く、小鯛の大群が盛上る程バチく音を立て、沸返へる。

朝夕の一二時間、手船で之を追掛ける。イヤ先廻りして十二三本繋ぎのだまし鉤を下して待受ける。魚群は舟近くなると忽ち一齊に沈下して舟の下を通過する途端に鉤に飛かゝる。ソロ／＼引上げて鈴なり満員の銀メスを生簀に移す。又魚の沸いてゐる方へと舟を押す、一二里の海上を何時の間にか押廻つてゐる。入梅の日中も乗出す。宿の傘を襟首から差込んで兩手で糸捌をやる。二三束を釣るに世話なした。

又波止の沖には五七寸の中アチの付く磯がある。之は漁夫吾一爺さんの獨占で何人も知らない場所である。梅雨明の外洋のうねりの餘波で他の魚が一時喰止む頃が此つりの書入で、未明に網のドロメンを手に入れて行く。五六寸の獲物がある、婦人子供の手にも容易にかゝる——

日が高くなると引揚げて、之を調理して朝餉をとる時の味は又格別である。イヤ人の思設けない海の幸をタマに入れての歸りに、道行く人を驚かす時は正に凱旋將軍の意氣である。

甘鯛は——クヅナ又はグチ——大體秋冬を盛漁季としてゐるが、五月に入れば外海から弗々入込んで来る。深海の魚であるが別府では十八尋位の所でも形があり、大分築港近くの白木浦沖で廿四五尋、其他では廿八乃至五十三尋の所で、海底は急斜した斷崖基部の洞穴から出て来て泥地を漁るといふのである。錘や魚の附着物を見ると凝灰岩のやうな軟い礦物質や、時として蟲の巢のやうなものがある、専攻學者の研究資料になるだらう。兎に角底の感じ、合せた時の魚の手堪から推して、漁夫のいふ所には一理がある。

仕掛及釣り方の呼吸は小著「釣の研究」同魚の條にもあるから略するが餌の赤えびは、須磨

邊の石蝶つりの如く、尾を切り胴丈の皮を剥いで頭部は原形の儘とし、尾の方から差したものが最も面白い、尤も秋になれば新子の丸差にする。

夏は駄目とした此つりも、船頭と共に場所や方法を研究して、二十數回の體験の結果、一日に六七枚から二十一二枚は何時でも釣れる丈の自信を得た——秋は七八十の大漁を見ることも珍しくない——魚の種類は赤が大部分で折々黄も交る、白は稀だ。味は白赤黄の順序である。此外長ハゲ赤太刀や色々の磯の魚も興を添へる、何しろ甘鯛は上る間の樂が長いのと、上げた時は鮮紅色の鱗の美しさと、姿の優し味には全く恍惚とするのである。尤も水温水壓の關係で早く斃死することもあるから夫れは船中で手入れをするのである。別府では沖釣黨は存外少く——ギサミ、キヌ黨は可なりある——且此つりは一寸場所が分らない爲精通した船頭を選ぶ必要がある。

何處でもだが、行樂の地には不良船頭の居るもので、爲めに大に興を殺されるから、そこは實地に十分當りを付けることである。雨季を控へての滯浴者、避暑水浴の前には、篤と各地各様の釣況も聞かせて、最も水に親み多き此シーズンに大に意義あらしめたい。尙各温泉水浴遊

暑療養地に於ける旅宿釣舟業者は徒らにボルことなく、親切簡便に是等釣客を満足せしむる丈の設備方法を講じ、各地特有の釣趣を汎く永く世に紹介することに努力して貰ひたいものである。(大正一一・六・一一)

夏の沖釣

陸では煎上げる程に暑苦しい日でも、海づらは絶えず冷いやりした風が舐めづるやうに流れてゐる。日覆をかけた釣船が白鳥の群の如く晴れやかな沖合に浮いてゐるのを見ると、アンダラーでなくとも、夏の水上生活の幸福を思はずには居れないのである。

しかも糸を垂れると、川の鮎を思はせるイソクとした白鱈や青赤黄なぎ色とりくりに盛装したベラの幾種、キュー〜プツ〜と鳴く丸いハゲの子、蝶の翼を揚げたやうに美しい鱈のハウボウや、両鰭でヒラ〜泳ぐカンゾウガレイや、いたいけな一寸鯛といったものが、婦人子

供の釣にもコロ〜上つて来る。草鞋かボロかと思つて引上げると。之れは意外にも蜻入道といつた調子で一日は過ぎて行く。

行くとなれば南は淡輪新和歌浦、土曜の晩から行けば淡路の由良がよい。今年是由良には釣の會が宿を提供してゐる。西でに矢張須磨鹽屋垂水で、明石では西方海上四五里を發動機船が曳船して送迎してゐる。

前に言つた魚には小潮時がよい。即ち月齢の八又は二十三の前後数日が頃合である。尤も明石の好漁場鹿の瀬行には大潮を狙ふ。休日は客が殺到するから、前日までに船宿に舟と餌を注文しておく。明石の大潮では前晩おそくから出掛ける。食費實費で泊めて呉れる船宿がある。兎に角何所でも朝は思ひ切り早く行く、寢坊がるては快味半減と承知すべきである。

経費は淡輪一日一隻道具付四人まで三圓四五十錢——遊山氣分で行けば廿圓以上かゝる——須磨は舟だけで四圓五十錢外に餌道具代一圓乃至一圓五十錢、鹽屋垂水は少々安く且ベラには好都合であるが、前日注文以外では餌がないこともある。明石は乗合で一人二圓、餌道具代は別である。貸切には在外高いふから詰らない、尙何處でも船頭の働き振を見て午後にはチツブ

を奮發する。

釣に行く用意は簡單で、浴衣掛に日光の透らないシャツ上下を着ける。其他は一切バスケットに入れる。握飯に副食物は必ず其朝のものにする。腐敗するからである。

飲料は船頭が用意するが不味であるから、鹽醬油味噌砂糖と共に魔法瓶を用意する、それで船中で船頭又は愛人に鹽やきや汁、キスカレイの糸切の刺身を作つて貰つてもよい、麥酒果物などは舟の生簀に投込んで冷やしておく。何でも簡略でよいが婦人には小川の爲に小さいバケツか金盥を携帯する。忘れた時はアカカキの杓でも借りる。日やけがお氣に召さねばアンチソラチンでも塗つて行けばよい。

道具は船頭が一切貸して呉れる。餌のエビは客で剥いて船頭に旨く切らす。切つた奴にはウンと鹽を振かけて濕めらす。餌の臭氣は時として船暈を催すから船頭に注意する。

釣り方は一二度聞けば誰でも了解するが、何しろ海底一面ベラでウヨ／＼してゐるかと思はれる程であるから、底が分つた頃には餌は喰はれて了ふ。一寸癩であるが致し方がない。そこで錘が底についたと感ずるや、最も手早く糸を張つて待つ、又は少し逃げる要領で軽く上下す

る。キスは鮮かにコツ／＼と来る。ガツチヨーテンコチーはピリ／＼、ベラとハゲはチクと軽く感ずる。カシイはフワリとして可なり煽るが、蛸はボヤリと軽くなり重くなる。最初は何でも構はないから、一々手強くキユツと合せて、根氣一杯早く手ぐる。呉服屋が尺を量る要領で手繰るのが最も下手で、釣瓶繩を早く手ぐるやうにするのが先づよいとする。何でも引上げては餌を付換へる。腰を立て、セツセとやる。一つ調子が揃ふと二三十は瞬く間に上る。潮時が良くなると舟中一齊に舷側の摺り竹に糸がキユ／＼軋る音で頭が緊張して来る。酔つた人は鈍感になつて釣れないからと又飲む。少し手の鈍い人には蛸がカレイが来て歡聲を揚げる。イヤ大事にかけて重いものを上げて見ると、牡蠣の喰つ付いた石コロがか、つてゐる。今度は魚だと感ずつたが、見ると、河豚の子が提灯を膨らせてブツ／＼愚痴る。「おのれ不倶戴天の仇」と糸を持つたま、クル／＼廻して船板に叩付ける。イヤもう暑さも時間の経過するの一切忘れられて了ふのである。

瀬戸内では到る處の磯で此快味は得られるが、紀州阿波土佐邊に行くと、土着の人などはべラは見向もしない。實際紀州湯崎の温泉などは、イガミやタカノハダヒなぎを漁ると痛快で

ある。イヤ近くの淡輪や垂水沖なごでも朝マヅメのエソ釣り、チヌやハスのふかしもやれる。明石では弗々鯛の變態づりが始まる。小鯨ならば大阪灣の到る處でやれる。工夫すれば海藻のある邊では鱸の引づり、蛸かけ、チヌの潜水づりもやれる。

海上一日の涼を趁ふ中には、漁夫船頭達の水上生活より受くる色々な印象や自然に對する興味ある想察を高め、船中の睦まじさと釣の快味は、一家知友の間に新なる生氣を加へて来る。水泳やボートも悪くはないが、私は裕に恵まれた海の幸を心行くまで受入れて何處までも海洋氣分に浸りたいのである。(大正一一・七・三〇)

新秋の夜釣

家では晝の熱氣が蒸返してゐても、川添や磯邊へ出てみると、清々しい蟲の音と共に、水面からはひいやりした夕風が吹立てる。流石に秋は既う流れてゐるのである。秋はい、多くの

魚族が一雨又は一朝毎に太つて来る。アングラーの痛快味は之れからである。しかも差向き晩涼の快を求むるには今が最も面白い。今年は傳染病も少く且恐るべき嵐風も數多く襲來しない丈に安心して行ける。

大阪灣に於ける太刀魚釣の快技は屢々紹介したから略するが、もう弗々外洋から入込んで来る。朝なぎ夕風の一二時間を新涼の氣に充ちた海上を漕廻る面白さは、關西及滿鮮西南沿海に於ける釣手の書入れて、關東人の羨望の的となつてゐる。鯛又は烏賊の夜釣や地曳網にかゝることによつて形が見えると一齊に押出して行くのであるから此好機を逸してはならぬ。

鯛の夜釣は今に限つた譯ではないが、餌とする烏賊の新子や手長蛸が手に入る此頃になると、新しがり此魚が好んで之に餌付く。八月の中頃から本物の明石鯛が大分市場に出でゐるが、之も此餌の賜物で夕まづめと明け方の潮時が最も面白い。殊に之からは秋の冷たさで、ほつ／＼と深みに集る所に海峡の天恵があるのである。例のカブラ鉤での誘きづりか、素人ならば變態のフカシづりをやる。一隻借切の餌道具付十五圓は少々恐れ入るが四五枚も出れば何でもない。それに他のチヌや磯魚が大分やつて来る。

鱸は港内川口又は岩礁の海底十二三尋の邊ならば多少其形のあるのが此季節である。尤も港によると禁漁が嚴重であり、殊に近年ガソリンボートの激増で油が浮流するので、魚が嫌つて寄付かない所もあるが、大潮の宵つりには自分ながら驚く程出ることがある。船渠、棧橋、又は護岸に繫留した本船の、何れも大アーケ燈の煌々たる下の暗い陰に舟を止める。餌は岩虫の一つ差か、大ゴカイの四五匹を引かけたフカシで、底から約一尺上げにして、手釣ならば鈴にかけて待つ。

鈴がチリンと鳴つたら糸を軽く指先に持つてゐる。次にグー、グー、ググーツと三尺餘も引込む所までスル／＼糸をゆるめて之をちよいと止める。テグスは無論廣東もの、「ヘッパタ」の飛切一本撰で十本二回から十回もする奴を二本繫ぎにしたものであるから、グーもスーもなぐ引いて／＼引寄せせる。魚に寸砂の隙も與へないで揃ふのであるが、糸に自信が薄ければ魚の走込むと共に糸を延ばす。例の腮を洗はせないやうに又引寄せせる。三四回も藻掻くと可なり神妙に寄つて来るが、水際の斷末魔が又恐しく暴れる。ばらすのは大抵此時である。兎に角魚の藻掻く程鉤の穴が大きくなるが危険であるから、成るべくは命知らずのテグスで遮二無二引

よせて揃ふがよい。一つ上れば、他の鉤に續々やつて来るから此機を外してはいけない。

海上の岩礁ある上を引づりする方では海老の一つ差でも、外國式の擬餌鉤でも、四五本繫ぎの鉤に鱸の子のオボコ又は牛肉、豚のリンドを串したので、船の進行に伴つて、魚が烈しく追かけて来るから、引かけたが最後グイグイ引寄せせることも出来れば又バツスロッドを以てリールで巻込んで自由である。そこに新しい快味がある。引づりは月夜の大潮がよく、内海、太平洋沿岸は今が眞盛りである。又日本海方面でも雲州の湖邊、但馬竹野附近、若州小濱灣、越前では丹生郡の蒲生から白濱の間と、三國港の西北雄島までの所なきは思出の深い所である。烏賊つりは所に依りて釣り方は異なるが、誰でもやれるもので、しかも闇夜に煌々たる漁火を點じて或は月を便りに數多く釣上ぐる所に妙がある。矢張一夜の中にも喰込む時は三四回で、其間は引切りなしに當る。到る處に之を見るに拘はらず夜だから恐いと躊躇するのは餘りに馬鹿けてゐる。太刀魚つりの出来ない所では此位痛快な夜つりはないのである。チヌつりは之も到る處の磯で釣れる、方法も色々ある丈に行くものは皆天狗の鼻を突合せてゐるから、釣り方は餘り説明はしないが、岩礁又は小石のある磯に寄る魚で最も狡猾とせられ

る丈に、さて實地に釣つて見ると容易に合はない。闇の中で他の人の竿と絡み合つたり、底に引かけなきして興を殺がれる。殊に幾百本の竿の中で一つでも上げやうとするには随分呼吸が要る。

併し容易な方法は撒ねさで魚を集めることである。名もない貝、雑魚、糠、魚腸、魚油等を泥砂に搗交ぜたものを、こ、と思ふ邊に時々投込んで魚の足を止める。荒磯の中で小石底の一寸広い所でもあれば、雲丹の雄だといふ黒い栗のイガのやうなカゼ——所に依るとガンヂョ——を二つ三つ潰して投込む。之れなきは實に妙である。夫れに雲丹の卵巣か貝の肉、鱈の皮を釣に巻付けたもの、魚油で煉つた團子、海邊にゐる蝦に撒えさを小さく軽く喰付けて投込んでよく、チドリ蟲の二寸切豆蟹の一つ差、魚の大小と其處で好みさうなものを選んで行けばよい。

ハター—アコのこと—アブラメ—一名アイナメ—なきの魚も略同じではあるが、凡て捨石ある所ならば、少し沖目で砂の中にチラホラ石がころがつてゐる邊と思ふ所に入れて待受ける。前記の小石交りならば、よく潮の干底に露出する位の所が面白い。しかも時化模様か或

は時化後の濁りのある時がよい。晝でもよくイチびつて餌付く。

尙注意すべきは、餌は其蟲の習性動作を其まゝに魚に示すといふ呼吸を忘れないことで、豆がに、えびなきで、小チヌを岸近く小引いて釣るのは其要領で、岩蟲チドリなきは投込んだまゝ、糸を張つて待つ。團子なきは水に溶けて行く間丈はよいが、溶けて了へば又付換る必要があるといふ譯である。

小アチは多く晝つりであるが、此間も横濱の埠頭に出ると夕方本船の横で、行燈つりで二三百も上げた小船が居つた。夫れが大アーク燈の下にウヨ／＼浮上つて來ると、泛子下三四尺の共餌の糸切又はゴカイで、華奢な竿で釣つてゐるものも見受けた。神戸の米利堅波止場ホテル前でも略之に似た要領で二三十も上げたのを見る。魚は既、四寸位になつてゐる。

此外穴子の夜つりも弗々形がある。鱧では但馬香住川邊の特技として張繩の擬餌つりが見られる。又各地の港内なきの波の穏かな邊では、釣ではないが、サヨリの新子が、闇夜の水面を青くキラ／＼する姿で浮かれ廻る所を小タマで掬へる、鳥賊つりの餘興としては小鯖を共餌の糸切でドシ／＼釣上げる。沖では夜つりに出掛け或は引揚げる頃に、エソの擬餌つりが出来る。

兎に角夜づりは此處一箇月許が最も面白く、其間に晝の沖づりが目眩しい程賑つて来る。避暑氣分の薄らぐ頃からは沖も磯も川口も全くアングラーの獨占に移つて、各自の特技を揮ふ絶好のシーズンとなるのである。

夜づりで注意すべきは、興に乗じて夜ふかしをしないこと、沖の防波堤なきに行くには天候の急變を常に氣を配ること、帆船又はランチの通行繁しき所では、投錨の危険を顧慮すること、瓦斯ランプの携行・釣具の整理を忘れないこと等で、ランプは最近着の外誌に依ると、帽子の前額に取付而も光度の強いのも見受ける位で便利なものもあり、餌は日によつて魚の餌付に影響最大なるものであるから、少くも自信あるもの二種類を選ぶと、又冷氣に堪ふるには魔法瓶に熱い茶を用意すると、潮時以外にはサツサと引揚ぐると、獲物は歸宅後直に夫々調理して了ふことなきである。(大正一一・九・三)

チヌの晝の川釣

初夏から晩秋にかけて、大阪の太公望を熱狂せしむるのは、何としても築港のチヌの夜づりである。京濱横須賀邊のカイツ黒鯛が即ち夫れであり、各地の防波堤護岸は勿論、磯といふ磯、島といふ島では之は狙はぬ漁客はない。

併し摺れツ枯らしの魔性の女のやうな彼の魚には、如何に百鍊の名手も醜弄される。夫れが晝づりとなると愈々手古摺つて了ふ。かぶせ・荒磯のフカシ、もぐり釣、網尻の見かけ釣な、ミ變態特技は色々あるが、何れも一筋縄では行けないのである。所で茲に晝の川釣といふ妙技が、つひ阪神間の川すぢで人知れず行はれ、昨今既に大分味を占めてゐると聞いては一寸見逃せない。早速實地に就いて當つて見た。

魚は背ひれ尾鰭の尖が黄味を帯び、胴は本チヌよりも少々幅廣く、色合はグレ程に黒くはない。釣仲間ではキビレチヌといふ奴の二歳から六歳位である。大阪では本チヌは目方にして四十匁が先づ一歳、キビレは六十匁内外を一歳として年齢を推定するものもあるから、右の年齢

は無論正確ではない。有鱗の魚は鱗を鏡検すると、樹木の年輪の如く明確になり、無鱗の魚は耳石に依るのがよいので、此法でなければならぬ。兎に角吾々の釣に當るのは四五十匁から最高四百匁のものである。四月下旬即ち八十八夜の一ト潮前から弗々入込んで来るが、盛漁季は六七八の三ヶ月で、十一月初旬には海に落ちて行く。

此釣は川のことであるから。何時も大潮の前後数日を見計らつてゆく。釣場所は神崎川本支流及淀川の潮の干満ある所で、神崎の方は阪神電車の千舟で下車するのが便利である。方角では一寸迷ふが、停留所から神戸寄の元佃の方の電車線路のすぐ上手の橋を渡つて下流に向つて右岸を約二三町下ると——大阪の人ならば、其反對に道を左に取つて、大和田に出る橋を越して下つてもよい——出来島に架けてある尼崎街道の千北橋に出る。眞夏の大潮前後には、此兩岸の樋口河除杭橋杭等の前の深みが面白く、島の東方にある支流の下方左岸も若干形がある。夫れから下流域の島の中島橋の上下、殊に阪神電車の安治川の鐵橋と中島橋との間の河よけ杭の並んでゐる邊、城島東南即ち本流域島橋の左岸に恰好な狙ひ場所がある。

尙中島橋から尼崎寄りの門殿川辰巳橋上手の千本杭、下流の初島の高橋お茶屋橋邊から、下

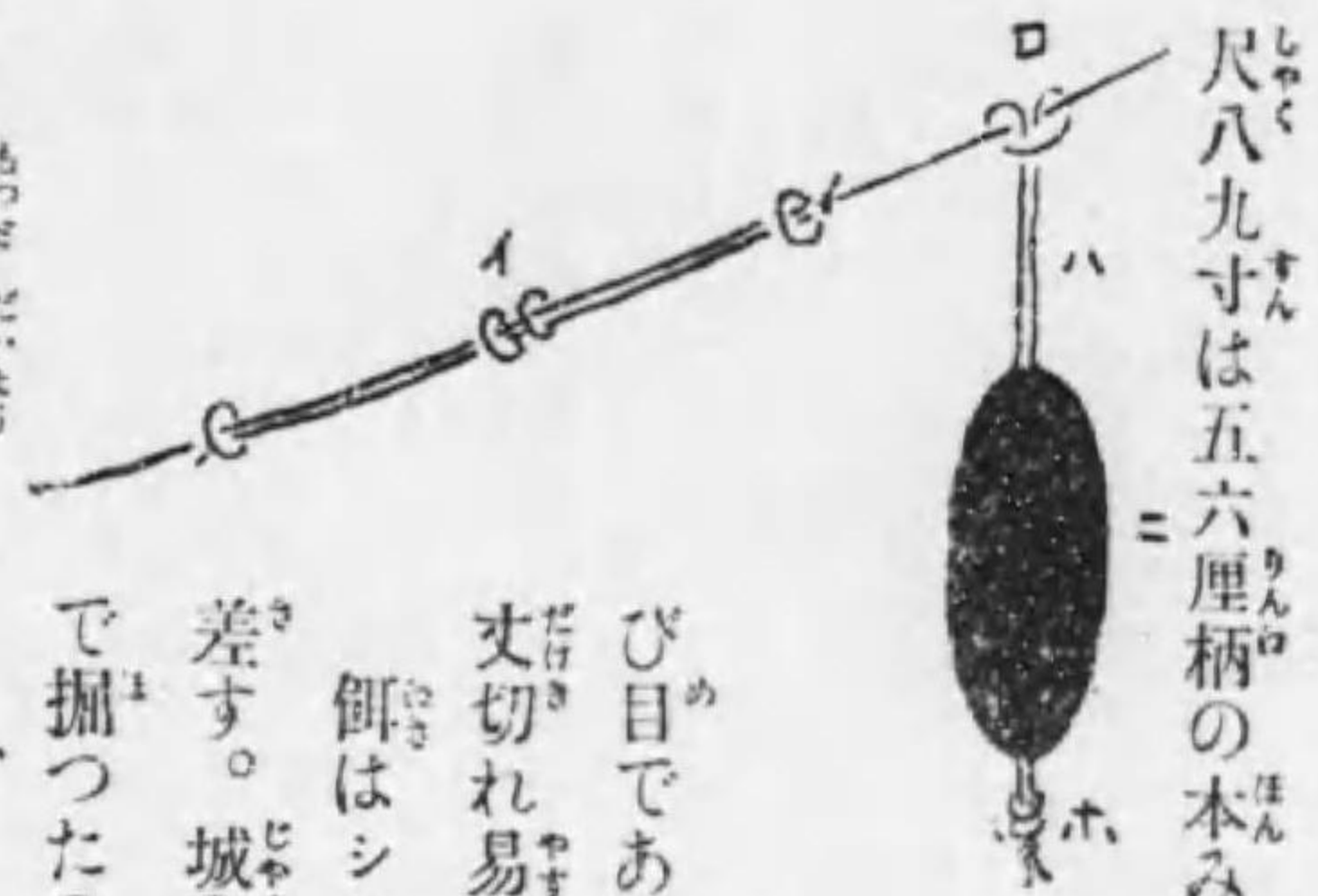
流東亞セメント工場の南側、尼崎の新波止の上なごも、舟つり岡ツ張り共に夫々の味がある。尤も悪液が流れる折は一寸注意しないと馬鹿を見ることがないとも限らない。此邊は大物下車が大分近くなる。

併し最有望な所は、何としても神崎本支流尻の各潮止の裏表で、中にも城島橋下流の堰止が最も成績が良い。上げ潮七八分の折は堰の下手、下げ潮にはその上手を選ぶ。無論之は堰の上から釣る時の話である。

淀の本流では、現在では阪神鐵橋より大分下流に數箇所ある、其岸近い深みの底の工合と流勢又は潮の加減に一寸呼吸はあるやうだが何れも形がある。イヤ上流でも潮の差込工合で見込のありさうな所もあるが私はまだ分らない。

釣り方には陸上と船との二種ある。何分潮の盛んに動く時がよいとしてゐるから流勢が餘程強いので、仕掛も磯づりや護岸でやるのとは一寸變つて来る。

陸つりの竿は三間以上の四本繼位で穂尖は可なりシツカリしたもの、糸は竿尖より三四尺は一把握一匁五六分の白又は澁したスガ、夫れからテグスは一分柄より八厘柄と順次細くし鉤元二



尺八九寸は五六厘柄の本みがきの極上。鉤は五月頃は一寸、少し先になると、一寸一二分のチ
 又鉤で、糸の全長は竿より三尺許短くする。
 圖のイは鉤元と道糸との結び目でロの點と同じくよく引締めて
 置く。ニは錘で棗形又は丸の三五匁、ハは細いテグス、ホは其結
 び目である。此錘付のテグスを細くするのは、底に錘を引かけた時に、夫れ
 丈切れ易くする爲である。

餌はシヤコで、尾の方から頭部へ鉤の形通りに屈側に鉤尖の出ないやうに
 差す。城島附近の餌屋——こ、には貸船もある一日六七十錢——が干潮に濱
 で掘つたのを買ふ。之が一等よい。なければ自分で聞いて掘に行くものもあ
 る。尤も代用としては活きた川えびの兜を除き、脳味噌の附いた儘を尾の方から差す、休日に
 は品切になることもあるから市中の餌屋で買ふか、池で掬つて行くことにする。水の濁つた時
 又は夜はイチヨセ即ち袋餌——神戸でいふイソベ——岩蟲、チヨリ等のウオームも無論良から
 うが、さうまで注意してゐないやうである。豆蟹や貝もない。土着の人は水濁にはゴカイで澤山

だと言つてゐるが、今少し魚の胃の腑を開いて見て食餌の嗜好を研究して見たいものである。
 さて竿は流れと直角よりも少し下流に尖を向け、水面より五六寸離れる程度で、よく糸を張
 つて待つ。注意するまでもないが錘は底に達してゐるのである。

魚の當りは色々であるが。大抵の場合、初めは芥でも引懸つたやうにグーと竿尖を一尺位
 引く。此時は魚が嘴付いたばかりの時であるから合せては可けない。氣を静めて竿を手にして
 待つ。すると竿の弓が半分位緩んで、直に小刻みにグ、ググ、コツン、グググ、グー、グーと二
 三尺も竿尖を水中に引込む、こ、だ。竿を上流の方へ平面に張る氣味で合はすのである。此時
 大抵の人は竿を立てるやうに合すとよいやうに思ふのであるが、さうしては、團扇の如き形を
 して、しかも一寸兎暴な此魚は烈しく水に抵抗するので糸を切らすか外れ易い。其後のあしら
 ひ方、掬ふ順序は、他の場所ですると餘り變りはない。

舟では矢張岸に沿つて、魚の通路を少し遠慮して岸によせて停止する。魚が潮に乗じて左右
 に目を配つて行く間に、少し小暗い影があるか一寸深みの處では、何かよき餌もがたと足をと
 めるから、さうした邊に餌の達するやうに流勢と底の様子を考慮するのである。それから錨で

は綱で魚を威嚇する虞があるから、其代りに金權二本で舟を繫留する。

竿は二本繼一間半位、大防出入橋或は福島邊の釣具店で適當なのが手に入る。大阪式の錨付で糸を引通す。鉤元は上記陸釣と同様の本みがきテグス約六尺、其上の方は一把即ち約十間のスガ糸で、歐米式ならば竿の根元にスプリング付のリールを取付けて、糸を巻よせれば良いのであるが、それには興がないとか、或は勝手が違ふとかで、しかも舟中のことであるから自由だといふので、リールの代りに六角のコロコロ糸巻に巻いて、身邊にころがしておき、適宜に繰出し或は手で引しほることにしてゐる。錘下の鉤寸は陸つりと同一である。竿の入れ方も合せ方も變りはない。

さて魚が懸つた時は、竿を利用して魚のひるむまでは手の内で加減して糸を伸ばす。此時は竿の根元を腰の邊りで極めてゐる。そしてその手で竿を前下方に下すと同時に、片方の手で糸を引き、又竿を立直しては右の如く糸を引く。一寸呼吸を要するが、之をやつてゐる間に舟つりの興が湧く。

是等の釣り方は他の魚でも似通つたものはないでもないが、其要領に於ては獨特の妙趣があ

る。元來大阪の愛釣家森本氏が大分以前に考案し、更に竿師が之を助成したものださうで、少數の漁客がひっそり楽しんでゐたのであるが、計らず汎く紹介するの機を得た次第である。高知大分外二三縣の大川の川尻では、鱸ほきではないが、意外な邊までチヌが上つて來て投網に入ることもある。

神崎川でも夜釣もよく、時化模様で潮の差込む折は小潮時の晝でもよろしい。晝つりで退屈すれば、七八月頃では二寸餘になつた沙魚の新子を漁り始め、殊に泛子づりでは、ゴカヒで二才のイナが弗々當る。鮎も半日位やれば四六百匁は出る。

ウグヒ釣の快技

イツ／＼泳いでゐる魚の姿を認めると、誰でも本能的に釣つて見たくなるものであるが。さてやつて見ると斯うした魚は容易に餌付かない。そこにアングラとして頗る物足りなさを感

する。尤も岩魚ハヤ鯉の如き又米國のマウンテントラウトでも、時として釣れないこともないが、流勢の緩急、水幅の廣狭、水の深淺増減、天候の如何を問はず、魚の習性を利用して、鯉一つで七八寸より尺五六寸の魚を自由に水面まで誘き出して釣る丈の快味を得ることに於ては、先づ我邦では秋のウグヒ釣の他には一寸見られない。此意味に於てウグヒつりは代表的な釣技の一として推奨すべきであるが、しかも從來餘り顧みられないのは何うしたものか。

形はニゴヒ又はアメに似て背は暗色腹部より尾にかけて白く、秋の末から春の産卵期までは頬の部分、側線と胸ひれとの間から尾の近くまで、櫻色のボカシが美しく目に立つ。雄及幼魚は其色なく或はあつても極めて淡いので、之を白ウグヒと呼び、胸が稍太つて櫻色の濃い雌を赤ウグヒと區別するものもある——雄の原圖は田中茂穂氏著日本魚學上卷一九一頁參照——尙地方に依りグキ、イダ、川マス、マルタ、イス、季節に依り櫻ウグヒと呼んでゐる。

春四五月には、下流から小鮎の釣れる邊まで上つて来て、堰の上手、枝川の瀬淵の砂石交りの底に大群をなして産卵し——鱒の好む卵である——常には鮎の居る深みの中層殊に石の瀬から砂底になる流域に多く棲み、又雜木林や岩蔭の多い所ならば、水幅二三間深さ三四尺以上の

枝川或は本流より流れ込む用水川にも居る。五七寸の幼魚は瀬淵の縁や水車橋杭井堰の下、細くて深い瀬の中、村の洗濯場荷揚場などにウヨクしてゐるが、成魚は可なり深い淵に潜んでゐる。秋風が立つと夫れが、漸次下流に移動し始めると同時に到る所に散在し、よく水面に浮出して浮流する蟲や木の實、菜ツ葉などをついばむ。釣るのは稻の花がこぼれて、道ばたのイナゴが飛立つ頃から、刈入の終るまでである。

竿は根元の直徑七分内、外長さ二間四五尺より三間半位のなるべく低い節の立こんだ眞竹の筵で、中太でないのがよい。年齢は三年、調子は腰のフラクシない穂先の完全なもので、秋口に太つた竹藪の中から切出して、自分で脂抜から矯めるまで注意する。糸は上半は赤黒馬毛六本撚、次は荒すぢの極上、鉤元三四尺は本みながきテグスの六七厘柄で、糸の全長は竿より二三尺位短くする。鉤は土佐物のチヌ型の黒い九分より一寸のに絹又は麻で糸付を作る。

餌のイナゴは背の蒼く翼の長くない雌を出道で三四十捕へて行く。草ツ葉の裏から掴めば容易で、容器の布袋の口を細く開けば一つ宛飛出して来るから、長い脚二本を去り、頸部から鉤を入れ、腹部の背面に尖を出し、次に鉤の根元を拵指の先で蟲の頭部に差込み、後に蟲の尾部

を少し引伸ばして鉤尖にシカとさし、鉤のきの部分も分らなくする。
 此仕掛は私が越前九頭龍川筋の鳴鹿より日野川の合流點迄三四里の本支流、竹田川田島川の丸岡以北——何れも鐵道の便がある——約二里、金澤の犀川上流等で約十六七年間やつてゐたものであるが、魚族は年中水の涸れない流域又は特殊な事情のない限り、殆んど全國的に大小分布され、殊に東海、東北、北陸、山陰、九州邊、及近畿では吉野、木津の一部に随分澤山居る河川があつて、何れも愛釣家諸君より屢々照會通信がある。

大體魚が不味い——北國ではさうでもないが——といふのと、釣憎いとしてゐるので、職漁者にも顧みられないのであるが、二三回やつて見ると到底他に得られない興味を感じるものである。秋晴の日ならば、朝の十時まで、午後三時頃から又團雲のムラ／＼する時は日中でも雲影を見て鉤を入れる。殊に泡立つ水流或は樹蔭ならば何時でもよいが常には出水後の薄濁りが理想的で、時を争ふ位に加減を計つて行く。

他は左程でもないが、竿影、足音及び太陽に光る糸の水に映る丈は出来得る限り魚に感せしめないやうにする。兎に角狭い川ならば、上流に蟲を落して水面を流す。向岸又は手前の魚の

居さうな邊を幾度も打返す。崖下の淵、水流の行當り、堰又は水車の下或は急流の落込の泡立つ邊りなごの魚は、少し小さいが勢ひよく飛かゝる。えさは時として水の泡で目に付かないから幾度も落し込む。

瀬や淵の少し広い所は竿を振廻して蟲を上流又は前面に軽く落して、恰も蟲が流る、形で水面を引く。夫れを打返して下流に移動する。この邊の魚は逸物が多いから特に釣上ぐる時の用意をしてかゝる。蟲を落し込む折は糸はなるべく水中に浸さないやうにして、唯蟲の落つる音で魚を誘出すがよい。

すると天候水加減のよい時は、如何なる逸物でも水面まで躍出してカバツと飛付いて引込む。一寸魚の目に付かない折は、蟲の落つる音を聞いて、水面下一二尺の所を横にピカリと金色の腹を見せて素早く通過する。そして二三度打返す間に蟲に飛付く。兎に角此通過で魚の大小鋭鈍が分る。又小魚は烈しく周章込み、逸物ほゞ靜にやつて来る。その雄姿を見るので先づ釣手の胸をワク／＼させる。

何しろ敏感な魚で、鉤尖が少しでも出てゐるか、糸の緩め方が一寸遅れて竿に感じるが、喰

込むまでに糸を早く緩めて影が見ると、引込んだま、餌を離して了ふ。殊に緩める際に竿の尖が少しゆれても駄目である。そこに緩急宜しく突差に調子を合せて緩めるが魚の性質や流勢水深の都合で、垂直に引込むのと、下流に走る奴がある。垂直のは釣り易いが、下流に走るのは其限度を咄嗟の間に糸の動き方で見分ける丈が面倒である。中には落した蟲が水中に影を没することのある場合、姿も見せないで其ま、引込むこともある位で、全く油断も隙もならぬ。

魚の水底で一旦餌を呑直したと思ふ頃を二三尺張る氣味で合す。少し馴れると水面の糸の移動によつて其吞込んだ呼吸が分るが、泡立つ急流では引込んだま、石陰にへバリ付いてゐるところもあるから、程よく合すことが必要である。

魚のよくイチビるのは、夕立の晴れ間、薄曇りか前記の團雲がチラ付く折り、北風が水面に鍵を立てる時なきて、平水に近い折は、前日釣損した魚は翌日も同じ所で姿を見せ、減水と共に少しづつ、下流に移動してゐる。又大増水の時或は菜ツ葉でも洗ふ下流の瀬なきては此處彼處に魚が浮いて水面に波紋が見える。その波紋や魚のハネるので大小鋭鈍位置を見分ける。又同じ北風でも大陸高氣壓の張出して来た時又は水面の冷たい時は魚は多く浮ばない。此時は細流

の深み或は淵の崖下、樹陰や岸の崩れなきて、蟲の翼を切つて二三尺沈めては流して見る。泡立つ流の二年子つりには何時も最有効である。夫れから濁の強い場合は、細流又は浅い所殊に橋杭の直下、深い瀬脇の土堤下を漁り、出水の濁りかけには、魚は深みから瀬に乗り、水の混濁に近くなると水面下一尺位の邊を泳いで餌を漁るか、瀬が強ければ底にへバリ付くから、其邊を見計つて流しつ、糸の止まりを見て盲目合せをやるか、引込を見て緩めて適度に合す。

一度合せたら随分烈しく魚が頭を振り又は走り込む。この時竿を立てる氣味で勢ひのひるむまでジツと辛抱する。そして漸次引寄せて砂石原にズルン引上げるが、土堤又は橋の上では魚が頭部を水面に出して寄つて来た所を腰と竿に拍子を付けて、前面上方に出す氣味でヌーツと上げると共に、中途後方に腰を捻ると一尺三四寸までならば頭上を越えて後方に難なく落下する。タマは馴れると不便になるから、最初多少の犠牲を拂つても此呼吸を呑込むべきである。

仲秋二箇月餘の勝負で、流域によつては、稻の刈入れがすんで、蟲の體色が茶化て来ても、えさ袋を爐邊において、穀の中を冒して出かけることもある。場所と方法に依りては年中餌付くけれども、如上の要領で秋晴半日に五六尾から三十七八尾の記録を作るには、之に二三倍す

る魚の姿を見る譯で、自由自在に之を誘ひ出して釣る所の快味は、アングラーの釣慾を満足せしむるに十分で殊に都人士の一度此快味を知るに於ては、何の釣をも捨て、飛出したくなるであらう。(大正一一・九・二七)

月下の太刀魚釣

「太刀魚々々々、太刀魚のとれ〜」

寢心地のよい初秋の朝、床の中で尙うつらくしてゐると、魚屋が呼聲勇ましく横町に駆込んで来る。はつと思ふ瞬間記憶に甦るは、須磨沖、月夜、手を引込まれるかと思ふ程、烈しく飛懸つて来る舟づりの快味である。さて其主の消息は何うだらう、矢庭に刎起きて魚屋を呼込んで聞いて見る「朝方些とばかり網に入りましたんや」といふ。夫れが今年は二百十日の翌の日であつた。

南海の底深く潜んでゐた魚群が、秋待兼ねて内海に侵入し、前衛は既に小鯛の群れなき追廻しつ、大阪灣の北沿岸まで押寄せて來たのである。夫れが鯛網に交つて入つた譯で、初漁の珍ではあるが、網丈に小さくて、目覺むるやうな白銀の光澤がない。此魚の長大なのは何としても釣に限る、そこに遊漁者の興味が湧くのである。

さて行くとなれば、秋晴の好季ではあり、關西ならば、日本海を除けば何處でもよい、所に依りては、晝でも夜でも構はない。しかし釣易い事は素人も子供もない、又よく喰ふ時間が最も誂向で、一日の勤務を了へてから一寸一走り夕まづめの一二時間、朝ならば東が白みかけて、濱邊の舫ひ舟から朝炊の煙が立初むる頃まで——に最寄の濱から七八町も乗出してピカリ〜、ひ廻る太刀刀、小太刀の、三十本も引上げて歸るに世話はない。

肥臭い郊外では、物憂けな虫の音の訪る、黄昏時、街路では毒々しいカフェエの五色の硝子窓に電燈の光がチラついて横町からは怪けな女の出入する時分、朝ならば、乳屋新聞配達の一汗絞る外は、まだ寢苦しい夢にうなされてゐる間に、吾等は全く別個の此快味が得られるのである。

それが船頭餌道具付の借切一隻が最高三圓最低五十錢、手船の連中ならば、道具一切で三四圓も買つておけば一秋は樂める。

あとは少々の補充と、出漁毎に鱈の十筋も用意すれば足る、道具のことは漁夫釣道具屋に相談するか、小著「釣の研究」太刀魚つりの條も何かの参考になる。兎に角今年は概して鱈が多い、随つて之を狙ふ魚群も自然に足が停る。天狗たらずとも出掛たくなるものも無理からぬ。大阪灣では今が眞盛りである、よし潮や魚餌の關係で、一寸喰止むことはあつても場所と方法とに依つては盛んに釣れる。

明石海峡から紀淡海峡にかけての深みなぎが夫れである。併し全じく獲れるものならば、阪神間の浦々から、神戸沖駒ヶ林須磨なぎがよい、中にも何時出掛けても都合のよいのは須磨であらう。沖から歸つた晝づりの舟は勿論濱に引上げてある舟といふ舟には、兩舷から艦にかけて、鈴を附けた幾本かの短かい竿が立てられる、道具や餌の箱桶持つて濱に駈出して來る女房子供と共に各自ワイ／＼喚き立て、舟おろす。

あか／＼と照る秋の日足が、なだらかな、一の谷の山の尾の彼方に没して、黄金がとろけ出

したやうな夕風の海を距て、淡路島がくつきり紫紺の色に浮び出る頃になると、東は兵庫沖から西は舞子邊まで三四里が程は何時何處から出て來たかと思ふ程の幾百かの漁舟が、互に聲高に呼交しつ、一齊に沖へ／＼と漕ぎ出して行く。浦々の漁舟が總動員の下に乗出すの壯觀は獨り此釣に限るといつてよいのである。

各舟思ひ／＼の位置に達すれば船頭は餌の鱈を取出し、一つ宛舟板に叩付けて特殊な釣に差し更に八十匁からの錘を附けた物々しい縋糸を枠から解いて取付ける、客が受取つて約四尋位の深みに垂れて魚を待つ間に後は豫て舟に取付けてある竿に結付ける、斯くて各自目指す方向を押廻り源平入亂れての接戦に移る。

振り返れば陸は早や山々の裾から暮れかけて、うす紫のほんのりした夕霞の中に家々の電燈がチラ／＼照る、東の空には星の瞬きが目覺めたやうに刻々冴えて來る、沖の舟は帆を垂れたまゝ、ビクとも動かない、淡路島山夢の如く夕燒の名残は僅に明石海峡の水平線上に影をとめて、時折間近くうねり來る波頭に反映する位に成ると、あたりの友舟には竿の鈴がチリツと鳴る。

「喰はしたなッ」

わが船頭思はず口走ると

「なアに細めいわい」

と答へる、さア斯うなると「ホイあの舟が……それ彼奴も」と叫ばざるを得ない。

次に他ならぬ自分の先がチリチリツと鳴る、船頭「よしッ」と言ひざま手早く糸引寄せて遮二無二釣り上げたと見るやピカ付く白刃の胴腹を鷲攫みにして釣糸と横一文字に張切つた儘、夜叉の如き白い歯牙をむき出して、魚の頸部の延髄と思ふ邊りをボリツと噴潰して生簀に投込んで了ふ。

「それ旦那の竿にも來とるがな」

と船頭君小猿の如く駈け寄て引上げる、さて今度は自分の番だ、吾が持つ糸に來るか〜と思ふとろ恐しさと嬉しさとが込上げて胸の奥まで一時に高鳴がして來る。

やがてギチノ〜キューツと引込んで行く、早う上げなはれと船頭から急立てられる、何糞ツと負ぬ氣で引寄せるが水面下一二尋の處で魚が死物狂に蕩搔廻る其度毎に、波津海の底から平

家の亡靈が太刀を揮つて物狂はしく浮上つて來たやうな氣がして冷ツとする。

水際では一段とピカ付く、魚から一尺位の上と思ふ所を持つて引上げると、船頭直に受取つて、例の調子でボリツとやる、實に鮮かなものである。

一尾釣ると度胸が据る、魚も魚で息をも繼がす飛か、つて來る。それ竿の方だ、イヤ手にも來たと思ふ内に三四本の竿が一時に鳴り出す、人といふ人、舟といふ舟は沈黙の裡にも息はずませて此所客も大章の奮闘だ、半里や一里は何時何う行つたのか、西も東も目界の付かぬ位の忙しさである。

此のつりの妙味は中々之に盡くるものではない、第一此魚は餌に觸れたと感しても合す必要がない。ヂツと待つて居れば魚の方から引懸つて呉れるから面白い、婦人子供でもやれるのである。夕暮の一二時間で切上げることではあり出來得るならば家族的に出掛くるにも妙である。

漁夫の家では海の智識と体力の乏しい子供の内は、沖漁には連れないことにしてゐるが、此つりのみは便乗させる。よし親達之を制止しても行きたい子供は如何にしても工夫する、爺が單獨に出漁して愈々釣始め様とする利那、舳先の舟板がムク〜動き出してヌーツと現はれ

た我子から「お父さん俺にも釣らしていなア」と強請まれて見ればまさか怒りもならず糸を與へるといふ様な事もあるので、實際濱邊の子供に何つりが一番面白いかと聞けば即座に「太刀魚」と答へるものが多いのである。

僅少の時間ではあり全く環境の異なる所に斯る快味を感ぜしむるは、兒童の將來に有益な一の暗示を與ふるものとしてお勧めしたくなる。

所で日が全く暮れる、ぼつたり喰はなくなる。魚が居なくなつたのではないが暗くなると俗にヒキが立つといつて、水中の糸や釣の周圍に着くキラ／＼した微光が目立つて見えるので、魚が恐れて近づかなくなるのである。普通には、之を見て思ひを残しつ、潜戻るのであるが、仲秋明月の前後数日——その翌日でもよい——縫針の耳の糸さへ通せる程に皎々と澄み渡る時は宵闇のやうに糸にヒキが立たない。

即ち夕まづめの一ト盛りさする間に、住江の天の一方から月が湧いて出る、勢ひづいて満み來る潮、女神が薄絹の裳を引はけるやうな月光を漂はせつ默然として沖から磯へ、絶えず緩るやかなうねりが見える、魚は愈々いちびつて水面近く浮び出て躍り廻るといふ調子である。斯う

なつて來ると、舟は又一時魚群を逐うて、明るい水面を果てから果まで、櫓の手に任せて漕廻はる。つり上げた魚、否それこそ雫の滴る生きた村正の名刀を、月の光に閃めかせつ、釣れるがま、に引上げて行くのである。

戦しばし收まつて、手を拭ひつ、ホツとする頃には、あさ霧に浮ぶ沖の帆船の方から、笛の音幽かに月の世界の消息を傳ふるが如く水面に亘つて來る。山の月、野の月、街路の月、見るべき月の數ある中に眞に愛すべきものは此釣の月である。之れだから魚釣は止められない。

これで朝夕のまづめと月夜とを紹介した積りであるが、また晝でも闇夜でも釣れる事がある、夫れは水深と光度とを考慮すればよい。即ち晝では、明石海峡から淡路東岸又は瀬戸内海ならば水深約そ八十尋——別府灣では六十尋内外——の所である。

大體海底百尋線は一寸黄昏近い暗さがするといふが、秋冬の弱い日足では、八十尋内外でも海老や魚の目玉が結構に蒼く光る。晝でも闇夜でも、此魚に使用する釣絲が、魚の目に立たない程度が恰も夫れで、之が百尋以上になると例のヒキが立つて面白くないともいふのである。魚は晝間は底深く潜んで居るが、必ずしも八十尋近くに居るとは限らない。

潮が濁つて曇天の日に、三十尋内外でも釣れることがある。併し行くとなれば八十尋がよい、阪神附近では明石がよいとするが少し行けば好漁場は幾干でもある。

漁夫としても、之れ専門に出掛けて十分生活費がとれる位であるが、注意すべきは水温魚餌の関係で、よく他に移動することで、其迅速なことは、二三日に三四十里位移動するものと見なければならぬ。又盛漁季には餌の鱈に缺乏して困るが、斯る場合は岡山縣トでやる烏毛魚皮等で作つた擬餌釣を試みてはどうかと思はれる。

九州別府邊では、夜分七十燭の瓦斯漁燈を點じて、水深四十二三尋の所に投錨し、終夜釣るのであるが、其光度は矢張夕まづめの程度で魚族の多寡、水温、清濁等の關係に依り、若干糸の長さを加減するのである。之れも潮流の移動激しい處又は船舶の來往頻繁な處では危険が伴ふから、何處でもよいと斷じ得ないが、夫れには別府なき好適地で、同魚の漁火の壯觀は、秋冬浴客の書入の一つであらう。

此魚を釣上げるや、直ちに嚙殺し、或は頭部を舷に叩付けるのは、鋭利な齒に嚙まれない用心と、一つは生かして置いては銀皮を傷け且鮮度が保てないからである。網漁では、小さい

丈でなく、漢搔いて皮膚が剥脱しては、不味で穢く見たるの面白くないが、釣獲魚はギン／＼光つて、しかも鮮度を失はないから、脂肪も多く旨いのである。尤も朝の内に賣りに来る魚には宵と朝とに獲つたのがある。宵のは一日蒸籠に並べて冷氣の所に密閉してあつても、矢張色が幾分悪い、夫れになると獲立ての魚は、銀紫又は檳榔色にガラリと光つてゐる。塩焼にしても一等旨い、絲切の刺身にも作り酢入に煮てもよい。

新鮮な銀皮は眞珠硝子に作られる、ネクタイのピン、髪根の根がけ、安物の指輪又は首飾にも用ゐられ、近年大分輸出されるが、内地では上記の如く、銀皮剥脱の魚は其儘は賣れなくて、蒲鉾に入れなければならぬので、原料が高くなる、又朝鮮西南沿岸では塩魚を臺灣に移出する位多額の漁獲はあるが、銀皮を防腐貯藏する方法が何うも不完全な爲に十分採取し得ないやうな憾がある。

兎に角、秋季の好漁家にとりては、否如何に初心のものと雖も此釣ばかりは逸すべからざる興味がある。太刀魚々々々、また別府にでも出掛けて、やつて見たくて堪らない。

掛釣の流行

釣味からいふと魚を引かけるだけでは、餘りに職漁的で面白くないとの説もあるが、釣そのものが結局引かけるのであるから、これが流行するに不思議はない。殊にそれが單なる引かけでなくて、普通の釣り方に適用するもので夫れ丈興を添へる。今年になつて、手づり竿づり、次から次へと色々な魚に夫れが應用されて行くのも當然のことであらう。

秋冬の季節に於ける海川丈でも、アユ、イナ、ボラ、サハラ、ハマチ、イカ、タコ、フグ、カハハギ、アイゴ、グチ、カレイなぎによく之を見るやうになつた。今數例を上げると

フグかけ 神戸では昨年から大分流行し始めてゐる。三本乃至六本の物々しい鉤が下方に并を擴げて、其中央に餌の海老又は魚肉をさし、同時に圓錐形の錘を取附けてある。そして港外四里以上も沖に乗出して、舟を停め、底から少し上げて待つ。魚 餌付くと感ずればグツと引かける。一人一日に七八十から百二三十も釣れる。

イカとグチ 本年はグチはまだ乏しいがイカは相當に生いてゐる。イカは元來色々装置の擬餌又は餌づりをしたものでイカ以外のものは釣れなかつたものであるが、游漁家が工夫した結果、従来グチ、コチつりに使用してゐるガニ釣——十三五匁の丸錘の下に一二寸の糸付ある胴長の大きい鉤二本を付けたもの——の錘の直ぐ下から四五寸の眞鍮針金を下げ、夫れに四乃至六本のイナ掛の錨鉤を下ける。そして上方の二本鉤に海老の尾又は二ツ切を皮なりで差し、錨が底につく程度で軽く上下し又は待構へると、魚それらの當りを見せるから、強く合せて緩みなく引上げる之にはカハハギ、イカ、タコ、グチ、コチ、ヒラメなぎ、何が來るか又魚の何の部分が引かゝるか分らない、そこに興味がある。

私は之れで赤エイ、紋イカ——豊後のモイカのとで、マイカの三五倍もある——なぎもかけてゐる。イカは最初あの長い力紐を引かけて来てボヤリと重く釣る手に感ずる。それを二尺許り靜に引寄せて急に夫れ丈緩めると、イカは餌に逃げられてはと、今度は八本の足で確かと抱き付く所をグイとかけると、一日素人でも十や二十は釣れる。

夫れから餘り重く引くので何の魚かと大事にかけて徐々に上げると、水面下七八尺の所を透

してカハハギの胴中を引かけたのが、車輪の如くクルクル舞で上がつて来たり、フグの腹をか
けて大提灯をふくらせたのが白く見え出して来るといふのも此つりに多い。

ボラカケ 東京湾特殊のボラの粗朶づりは、之れから都下の釣客を熱狂せしめる、腰の強い
一丈乃至一丈二尺の竿を両手に持ち舟を粗朶の間に乗入れる。蚯蚓、ゴカイの如き長い蟲を差
した鉤から、更に錘をつけた、錘を下けた仕掛で、底から一尺内外を離れて静かに上下して
ゐると、ドンムツノと来る。思ひ切りキユツと合せて、魚にキユも言はさないで、
舟板の上にドスンと落す。之れが東京人の氣質に適した痛快味を持つてゐる。釣友會の石郷氏
なまは昨秋の最高記録を作つたさうで、本年の盛況が思ひやられる。

大阪灣では魚の多い港外又は舟溜の深みに舟を停めて、錘付の錨形の上方に唐辛子形の錘を
つけ、これにカブセの團子を練り付けるが錨のすぐ根元につけて下し、魚が餌付くか或は糸
に體部が觸れたと感じた所を引かけ、少したよりないやうだが中々大流を見ることもある。
アイゴ見づり 今年程生いたことはない。神戸葺合港から御影住吉西宮邊の下水の流出口
殊に米の磨汁なまの流れる海濱は二三寸の新子がウヨヨとしてゐる。九月下旬から此月にかけ

て女でも三百五百を釣つたものも少くない。ウキ下一尺五八寸に錨形の鉤を、その上方三四寸
海老のむき身、共餌の肉ばかり、小あぢ、肉、豚の脂肉、み、す何でも白ツぼくなるも
もるりとしてまき、ウキのツン／＼する所を合せては投げ込む。石垣の上から見ると、縞ダヒ
と共に下水口の七八間四方が魚が埋れる位で、そこに竿が尾花の如く上下してゐる。イナヤセ
イゴ釣も此魚に餌をとられるので閉口してゐる。引かけ鉤も今年には六本かけなまが新に考案さ
れてゐる。

ハマチとサハラ 之は秋の沖釣の雙璧とも稱すべき痛快なもので、職漁の群に入つて味を見
せしめる。之は引かけといふ部類ではないが、二寸位の鉤の根元に鉛を取付けて、更にイカ又
は蛸の足、中葉のイワシをテグスで頭を縛り、鉤より更に二寸餘の麻糸で大きい控へ鉤を下け
てゐる。そして底から誘出して引つかけるのである。一二回行けば呼吸が分つて来る。兎に角
一日に數本を得る丈で十分の快感が得られる。殊にハマチには大ダチ或はヒラメがお添物で、
小魚は馬鹿臭いとか、大鯛は手に合はないと思ふ人の試むべき所であらう。この鉤から工夫す
れば色々なことが出来さうで、現に東京では石ガレイに應用した人から聞いた實話なまがある

が一寸面白さうである。

鮎のテンカラ又は硝子かけ、落鮎のコロづり、イナかけ、淡路邊のイワシ小鮎、小アヂかけなまは、殆んど純然たる引かけであるが、如上のは多く餌づりの缺陷を補つて必勝を期する爲の考案で、そこに味があり、まだく、應用の範圍も廣くなるやうである。漸く此頃釣れ始めた太刀魚なまには正に新考案が出さうに思はれる。

何しろ此種の掛づりとしては、英米の遊漁にも餘程取入れられて、そのま、我邦の釣に應用し得られるやうに思はれるのもある位であるから、各自が少し工夫すれば意外な好果を見ないとも限らない。イヤ擬餌ばかりと共に今年は確に此種の流行が見えてゐる所が頼母しい。

(大正一一、一一、五)

小魚の釣り方

いつもお父様やお兄様ばかりが魚つりに出かけて、僕達は詰らないと苦情が出ては申譯かな

い。今度は一つ茶目君本位のを三つ四つ紹介しよう。

水が冷て来ると多くの魚は弗々冬支度にかゝる。即ち深みや日あたりのよい處に移る。川ならば本流下流の釣の面白くなるのが其爲で、海では春夏に生れた魚が、いたづら盛りになつてよく餌につく。又冷めたい水を好む魚が、勢づいてやつて来る。斯うした魚を狙ふのが茶目君なまには面白からう。

此頃の暖かい日に、とろんとした川の淵や池のへりで、石垣の崩れとか、河よけ杭の下なまを透して見ると小鮎のやうな魚がウヨウと物影を出入して、石や杭に附着してゐる青い藻なまを舐めてゐるのが夫れである。

東京では昔から色々巧妙な釣り方も研究されてゐるが、此頃の見かけづりならば存外仕やすい。先づ七尺から一丈位の細い竿と、それに合ふだけの長さの細い／＼スガ糸にテグスを二三掛と、鉤は小鮎をかける位のあごなしの一口ばり六七本と、極小さい豆錘か板鉛が少々あればよい。そして鉤から三四寸上方にその豆しづか板鉛を細く巻付ける。

餌はサバ蟲——サシのこと——が一等だが、うさんでも、飯粒に糠か豆の粉をふりかけても

ゆで玉子の黄味でも、イトメのお尻の方でも、よく切れるナイフで、それこそ綺麗にホンのチヨンピリ切つて、はり尖をかくすやうにさして、魚の居る所に静に入れる。すると魚がチヨロ／＼集まつて引く所を軽く合せてヒラ／＼上げる。魚籠の中で振ればすぐ外れる。澤山居る所では入れる。上げる。又入れるといった調子であるから、餌の切り方、魚の取はづしを甘くやるがよい。五十七十は譯なく上げる。

深い所では豆うきをつける。それは餌と錘との目方で浮子がフラ／＼静かに水中に沈んで行く程度のもので、途中で浮子が横に動く所を合せる。若しそれが見えなくなるまでに魚が引かなければ、更に水面まで引上げて又沈める。大抵な池川湖岸にゐるから何時出かけてもよい。鰯、ギキ、モロコ、ハイなぎもよいが、今度は割愛する。

釣り方は説明するまでもないが、とろりとした日和で、上げ潮を見て竿を入れる。満潮近くになると足元の浅い所にやつて来る。殊に入江ならば潮の行づまりの所が面白く、下げ潮には水のはけ口で、流のすぐ脇を狙ふか、その水上の深みで待受け。干そこりには水溜の泥ぶかい穴を見つけて辛抱するのである。底に芥がない所は是非軽く静かに底を小引く。魚がチク／＼一

二度當つて調子づいて来た所を合せる。

阪神では堺の港口、大和、淀、神崎の川尻の數町、西宮今津間又は魚崎の田圃、尼崎大物からの舟づりなぎがよい。遠征では日本海方面の敦賀小濱橋立城崎、松江、伊勢灣の各川尻、武豊渥美濱名湖といったもので、京濱間では報道するまでもないが、近年相州馬入川口が大に知られて來てゐる。その柳島邊には最近有名な小説家の某々氏なぎが頗る御執着との音づれがあつた。

第一川魚ほぎに骨が折れなくて、誰彼の片身うらみなく釣れるのが愛嬌で、仕掛も一寸變更すれば色々に応用もされるし、船頭のを一寸習つて使用するから世話はない。例の片天秤か落とし釣のみである。餌も此頃は赤えびの新子で心地がよい。

唯今よく釣れるのは、マイカ、カハハギ、ベラ、トラハゼ、コダヒ、キス、イヒダコ、カレヒの子なぎで、夫れ／＼呼吸もあれば、場所らあるが、右の内でも最も數多く釣れるのは、これからトラハゼで須磨鹽屋から小潮に船が出る、一艘で二三百も上る。カハハギ、コダヒなぎい須磨明石間にはよい場所も多いが、痛快なのは南海沿線の淡輪、小島邊である。

イヒダコ、カレヒの子、キスなまは、神戸の脇の濱の前から東明までに數箇所ある。これには神戸の新生川尻葺合港に貨船がある。タコとカレヒはキスの釣れる砂底が泥にならうとする潮先に投錨して、香氣に投込で待つ。釣はキスより大きく、餌は海の赤エビの新子の頭だけ残して、胴より尾にかけて皮を去り、尾からさして入れる。底から五六寸上げて待つか、遠方に投げ込んで静かに引いて見てもよい。よく吞ませて合せる。キスは東明大石で最近味を占めてゐる者も見受ける。尤もカレヒは尼崎前のハゼ釣りで釣れることは書入となつてゐる、寒くなるほご面白い。(大正一・一〇・二二)

晩秋の鮒釣

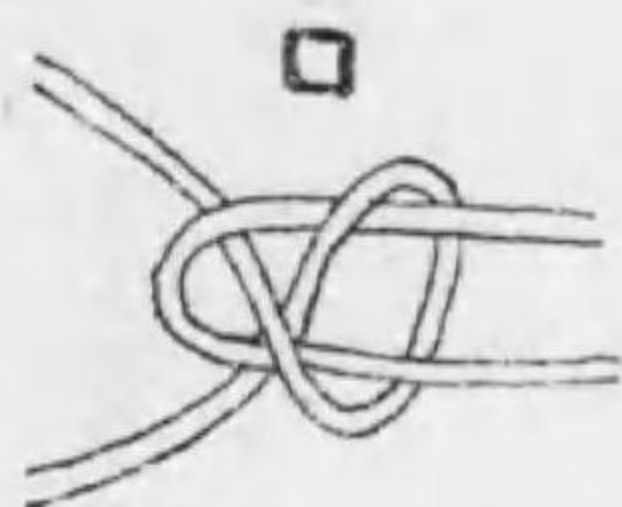
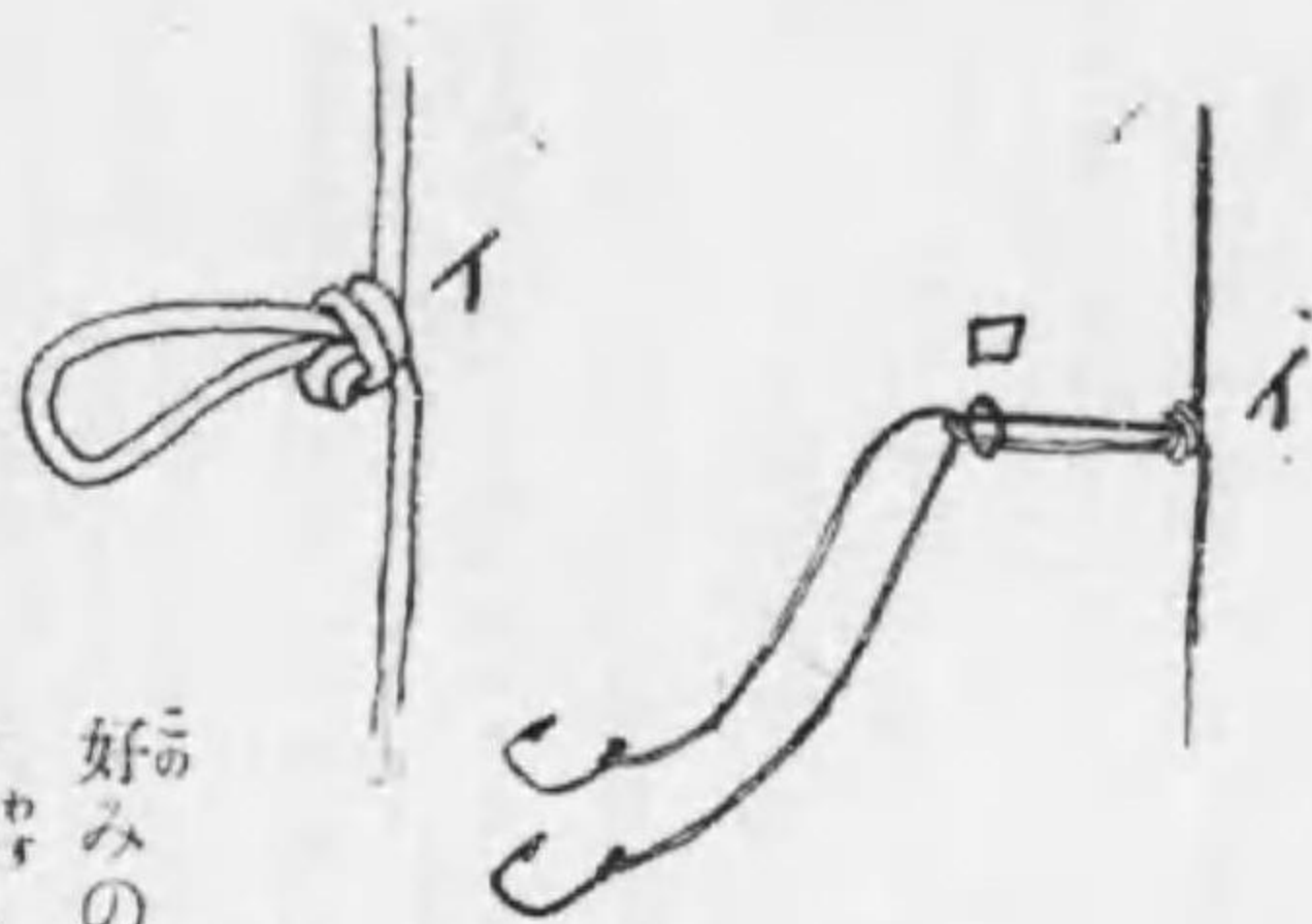
京阪神を中心として各郊外の野山に點在してゐる池堤の多いのは、それだけ鮒の釣場所も多いことを示すもので、随分釣手の興を添へてゐるのであるが、今年夏は夏の旱天に十數年手も付

けなかつた池までが灌漑用に放流されたので多大の魚族が濫獲せられ、參謀本部の地圖に朱を加へて得意がつてゐた通の連中までが尠からず面喰つてゐる。

所で山中の堤とか、川に通ずる池とか、田地よりも低い池とかは別段影響はないので、豫め附近の百姓なまに夏頃水を抜いたか何うかを確かめて行く。また斯うした池にはまだ藻草が一面に茂つてゐるものもあるから釣る前日に鎌竿で刈分けて、適當な釣場を作つて漬餌をしておく。

川筋では魚は漸次下流に移動し、湖沼でも物影の暖かい所なまには集團を作るのであるが、まだ冬籠りまでには間もあり、潮の差引する邊では幾分づ、位置を變へる。葭蘆の間や樋口の凹み、柵の陰なまがよい。流れのある所では沈床の水の突當る上横手のたるみ長い淵でも少々出張つた石垣の崩れの一才上手の處なまに出て餌を漁つてゐるから、よく場所と魚の動きと合つてを見て釣を入れる。天候は東風は禁物で西又はとろんとした無風の日を選び、又水がよく澄んだ折に出掛ける。要するに之からは天候と場所とに細心の注意を拂ふべきである。

大阪附近の流れある所では多く浮子付の沈み釣をやるが、これは廣場で置竿にして待つ時に限るのである。それも錘下に鈎元を附けるよりも、錘より二寸許り上の方を約一寸二三分の長



さて二重結びにして、それに適度の鈎を附けた方が當りもよく、糸も撚れないやうである。

最も味のあるのは脈づりで、流勢に應じて三四匁の錘を附けて徐に入れる。底と思ふ邊に達して魚の當りが竿先に感じた工合を見て合せる。喰はなければ幾度も之を繰返す。又軽い浮子を附けて例の餌と錘の目方で浮子がフラク、靜に沈んで行く間に横にピクピク動く所を合せるのが更に妙である。このつり方には竿の調子に色々の好みのあるは勿論糸の全長は水深より一二尺位長くする程度に極めることを忘れてはならぬ。餌はフカシ芋、糸女、み、すなごで糸女には鯉の二年までがやつて來ることもあるから、鈎も糸も可なりに選ぶべく、殊に引ツ張の沈み鈎や池のウキづり又は投込みには八九寸の大鯛も來るから、例の袖にかつても伸びたり折れるやうな鯛ばりは駄目である、伸びる鈎の効果は寒フナの折にでも更めて説明する。

この魚の浮き鈎は終期に近づいたがこれから潮界まで下るか、日常りのよい崖の下の一ニ尋の深み或は筏の下なみに潜んで越年する。尤も寒さに入るまでは其邊をウロ／＼して水の中下層を群泳し、出水又は冷氣の加減で随分移動するから、この魚を狙ふのは其日勝負として出掛ける。

餌は東京でのぼち或は藥種屋で賣つてゐる葡萄蟲或は蛹なごで、流の緩い所では豫め水深を測つて底より一尺位上げる加減で浮子を附けて、上手より糸が垂直になる程度で流す。もし餌が軽ければ鈎より四五寸上方に嚙付錘か板鉛を巻付ける。或は脈又はシモリ浮子づりも面白い。打返して當りがなければ、すん／＼下つて場所を流る。沈み鈎も悪くはないが、底のか、りが多い處を狙ふ折には都合も悪く且餌が移動しないので面白くないのである。二三年ものが多く、一般に釣るのは十二月中旬まで、あるが雪中でも形がある。

ワカサギは東京以北に多く、東京の好釣家が釣始めてからまだ幾年にもならぬ。關西では各府縣でこれが養殖に着目してゐる所もあるが釣るなごは殆ど知られてゐない。現在多いのは松江の宍道湖の西北岸、若狭の三方湖、近年弗々と繁殖したのが琵琶湖で、奈良縣でも養殖試験

をやつた筈で、非常に蕃殖が早いから早晚淀川でも我々の釣にもかゝることになるだらう。イヤ京都滋賀の人々には是非お勧めがしたいのである。

形は大分鮎に似て新子は十一月には約三寸位になり、琵琶湖のは四五寸のも居る。この釣りは私の習つたばかりで経験も機会も少ないが、竿は大阪のハス竿の上物が最適で、少し弾力ある中細テグスの尖に一口ばりをつけ、それより四寸上に軽い板鉛を巻き、其上四五寸間隔で、一寸五分乃至二寸の枝ばりをつける。此釣はテグス付のハスの二分がよい。そしてハスの立ウキより少々大きいのをつける。餌はサシ・イトメなどの小切でよい。

魚は大群をなして西風で吹寄せられる岸に立つて、風に向つて打込み徐々に電光形に引よせる。東京附近及利根川筋では兩三年これが大分賑はつて、一日二三百位は上るが、最初は調子にのつて合せるので口を切らず。之は何としても静に上げるに限る。場所によつてもシモリ浮子づりに近い仕掛を二本入れて、沈んで行く方から上げるといふ方法もある。兎に角右の三方小滝琵琶湖鳥取の池沼穴道湖から弗々始めては何うだらうか。竿仕掛が京阪地方に適品が多いやうだし、釣り方の在外簡易な點から見ても初冬の一興として試みるも妙であらう。

(大正一一・一一・二九)

紳士的な鱒釣

魚の好む天然の動植物を以てしてすら容易に喰はないものをだまし釣で釣れるものかと言ふ人もあるが却々さうでない。魚族が敏感となり且つ良餌を求むるに困難すればする程、斯種の考案研究を進むべきである。鮎は或程度以上に發育すれば、蚊ばりでは駄目としたものが、現に秋の落鮎まで釣通せることになつてゐる。水面又は中層を行く敏捷な魚に對してのこの研究も確に妙である。

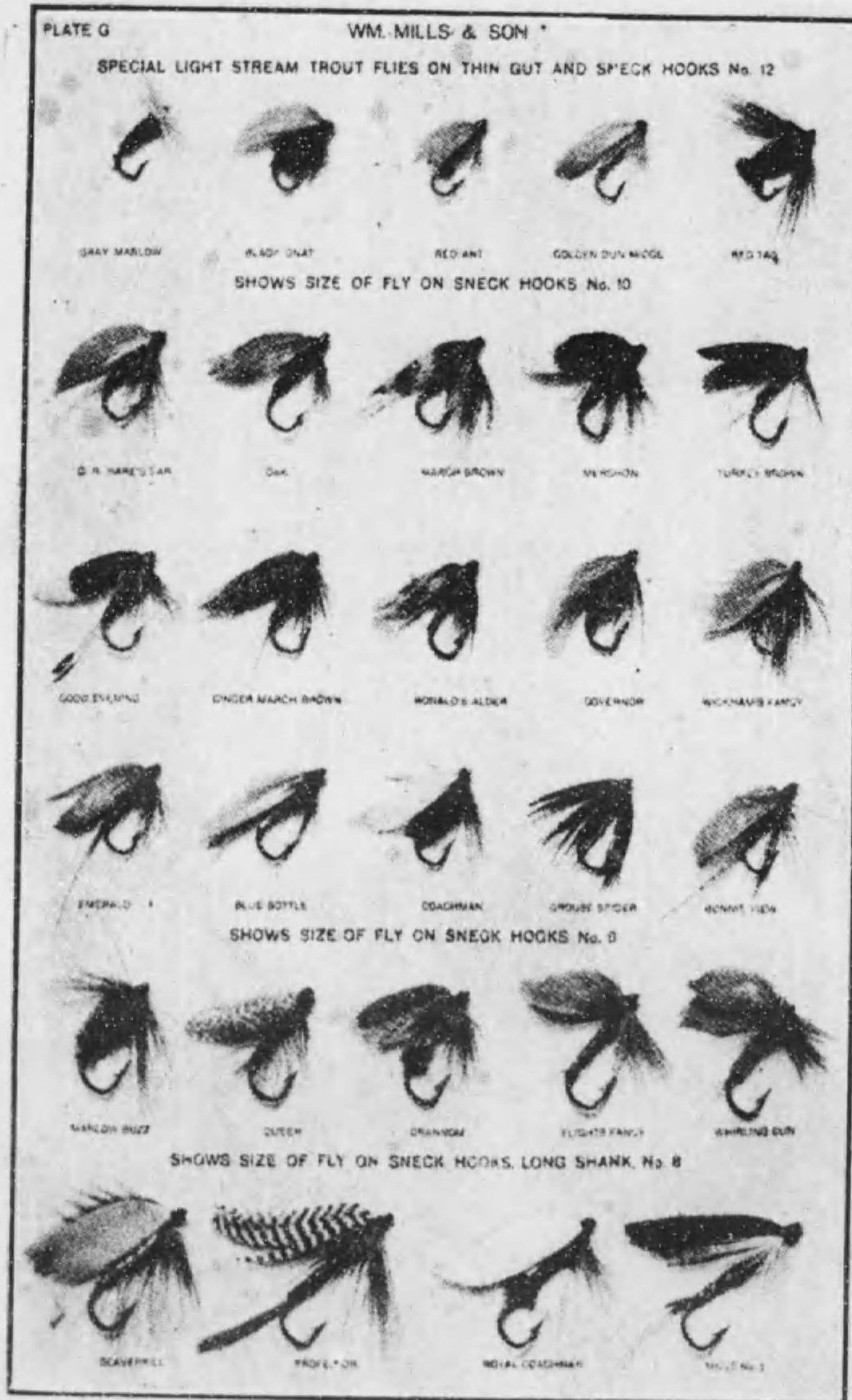
第一餌を採集貯蔵する手数が省ける、次に手も汚れず、差し方の巧拙もない。餌箱を持たないだけでも助かる。またこれならば随時隨處に試みられる。魚に依つては飛かゝる雄姿が見えて面白い。魚が來ても強く合せる必要がない。それに技巧の方面に興味が深くなる。

擬餌には味臭のないのを缺陷とするが、臭気は魚を誘致するには有効としても、魚の引か、る直接の動機とはなりかねる。それに臭気でも、餌によつては差支へることがある。鯰のボカン釣に、普通の蛙の代りにイボ蛙を使つて喰込んだ例がない。ウグヒの好む稻子に石油を振かけまたは屁ひり蟲の臭気をつけて、色々の方法で流して見たこともあるが、永年に一度より喰つたことがない。臭気も好悪である。目敏く飛か、る魚ならば、單にその視覚を咬るものならばよいわけである。

また魚には食餌を味だけの機能が發達してゐない。天然餌は呑込み、酷似した異物は吐出す處を見ると、如何にも味覺あるを思はしめるが、一面には同じ天然餌でも吐出すことのあるのを見るとこれも疑はしくなる。吐出すのは味でなくて、觸覺に依るとも見られる。魚が餌に飛か、る瞬間は、味臭に無頓着なことが多いやうである。鮫が鱸詰の空罐を丸呑にしてゐたのや、脂ぎつた鱈の腸からゴカヒに似た赤い絲が出た所を見ると味覺は頗る怪しい。船のボーイが水面に落した銀匙の舞込む所を餌が呑込んだのを見て、匙釣が考案されたとすれば、味臭なきは斯種の魚には餘り關係はない。少くも擬餌は天然餌よりも不結果とは云へないのである。

淀川筋での一寸鮎つりは可なり盛であるが、一本釣の擬餌の方は東京ほごに發達してゐない。尤も玉川では友釣は職漁組合員に限られてゐるからでもあらうが、金澤流の擬餌か、これら遊漁家に依つて更に研究せられ、空模様、水の清濁、流勢、深淺、底の色合、水垢の有無、朝夕の關係、魚の發育の程度、習性、居所等に依り一々、釣の種類を異にし、尙成育した魚でも硅藻質の水垢を舐めて生きるのではなくて、それに棲む水蟲又は附着せる蟲の卵を攝取するらしいとて、漁客が學術的範圍にまで喰入つて研究を進め、随つてこれに酷似した擬餌の釣が考案される、殊に注目すべきは、出水後上流に差返す魚群を狙ふのに、友釣では水垢のないためにその通路を發見するに困難するが、それがまたこの蚊ばりの特長の存する所で、馬鹿に結果がよい。

玉川における六月の川開には斯種の漁客が殺到し、一瀬の兩側に二三百の竿が芒のやうに上下するといふ盛況である。東京釣友會の中堅は矢張この玉川黨で、昨冬同會の職將牧氏につきその詳況を聞き、三浦氏の整備したフライブツクを見、松岡氏の研究發表に接し、更に例會に招かれたが、ウォルトンもブランシャールも呀ツと言ふ程の猛將揃である。



随つて現在使用されてゐるもの、みでも二百數十種に上り、——實際珍重されるのは十二三種に過ぎないが——金澤京都高知お手許の拜島産のものも殆ど研究せられ、確に鮎は我邦に於ける擬餌王たるに相違はない。併し玉川でよいから何處にでも有効とは言へない。又夫れが完成されたものでもなく、時と場所とによりて趣を異にし且僅々一二本の適否が其日の釣運を支配するとすれば、釣道具屋のみに便らず、各人各様に研究して始めて其妙技を發揮すべきである。

鱒釣は昨年攝政宮殿下が御滯英中蘇格蘭で試みられた以來知れ渡つて來たが、我邦では物故した飯島博士が歐米の擬餌より更に適切な幾種かを考案せられ、加藤子を會長とする東京縞紳間の一會があり、毎年日光の奥の丸沼に出掛けてゐるが、年々各員數百金を投じ、頗る贅澤なものである。十和田湖、野尻、中宮寺、箱根の蘆の湖は勿論、各地にも養殖が行はるゝに至らば、最も興味ある釣趣が味はれるであらう。

元來この魚は北海沿岸或は北陸の諸川では、生鱒または蚯蚓、稀に小蛇等で釣つてゐるが、輸入の擬餌は實に多種多様で、ヤマメ釣と共に精緻を極めた所は、何としても吾人の限界に取

入れらるべきもので、琵琶湖の同種屬アメノイナも早晚京阪神の同好者に依りて新福音を齎す時のあるべきを私に期待してゐる。

擬餌は各魚の好奇心を唆る形状色澤を選ぶのであるが、尙水及空色と一見識別し易くするところが必要で、歐米の擬餌は各魚各月各時各所に依つて考案せられ、主として昆蟲類魚類木實に擬し尙水勢に應じ、浮沈廻轉が實物に彷彿するやうに支障なく出来てゐる。釣の形状地質等には大に學ぶべきものがある。

ハスは土蜘蛛ならば寒中でも釣れるが、トラウトの二月釣に夫れがある。蛹に似たものは三月といふ風である。イダ——丸太——の好む菜ツ葉、稻子又は赤い椶實等は、清澄な秋の空色又は薄濁の際に色が判然識別され易い所に妙味があるとすれば、又麥刈頃には麥粒で幼魚が釣れる工合でも、また一寸鮎にヒワ茶がよいのも、能く考へられてあることが分る。ハヤの流し釣、ヤマメの春釣も單にダン巻や柳の蟲だけでは物足りない。イハナなごは正に擬餌として大に考究の餘地がある——上高地の穂高山を前にし、梓川の流入する大正池なごで、無智な漁夫が網で濫獲するなごは實に痛憤の極みである——海でも小鮎、中鮎、チヌ、鯉、鱒、鱈、エソ

寒釣

等には夫々地方に依りて、色々なものが出来てゐるが、あの痛快な太刀魚のは餘り適當なものが見當らないのは何うしたものか。(大正一・五・一四)

斯う寒くなつては釣にも行けまいと此間もある人が尋ねて來ての話であつたが、魚に依つては冬でも何かしら餌を求めゐる。殊に冬にならなければ元氣の出ない魚も居る位で、東京では寒鰯を始めタナゴ、ワカサギ、鯉、カレヒなごがあり、ハゼは舟に炬燵を入れて行くのがこれからで、阪神では寒ボラ、寒ス、キ、カレヒ、ハゼ、イカ、フナ、ハス、ハヤがある。沖は少々寒いが年内は行ける。殊に冬至が來と、須磨の夜網で鰈が一舟に十貫二十貫と上る位で阪神間では波際や日當りのよい風裏の護岸下や帆船の舫つてゐる蔭なごには岡ッ張もやれば舟づりも出来る。城崎温泉の圓山川口の津居山邊では、雪中のハゼ釣が呼物となつて來る。イヤ近くで

は神崎川のハス釣も出来れば、鰯の池づりが之から面白くなる。

大阪のハスは寒くなると鱗の蟲がなくなるのと、それでは喰が悪いから、塵芥の中を篩にかけて土蜘蛛を探し出す。指で摘むと潰れるから大事にそのまゝ、餌入に移してゐるのを見る。それで日當のよい淵の深みを狙ふ。魚の数は少いが大きいのが出る。殊に武庫猪名の二流では例年十二月に入るとよくハヤとフナの集團を見る所があつて、神戸のさる土佐人が網を以て追寄せて捕獲する。昨年未も一回に四五貫つゝ、上げて來たから、今年はその場所を調べてゐるやうな次第である。

鰯やタナゴは之も亂杭やしがらみの影に群れて手持無沙汰な呑夢のやうにボカンとして居る所を狙ふ。又漁とか潟に續く小川のトロには、よく粗朶を漬けて魚を集めてゐる所があり、或は自然に葎の茂みにも入込み、池ならば最深みに集まつて、中には泥に體を横へて居る。斯うなると釣り方も一寸工夫を要する。

かゝりの多い所では魚が釣れた時は大抵無事に上るが、魚が來なければ何かに引かゝる。そこで釣は強く張ると伸びるのを加減して選擇するのである。金澤の釣客が河北潟附近で寒中に

味を占めてゐるのが此方法で、鮎の沈みづりの名手で現今福井邊の釣手を驚かせてゐる西田君の得意な釣の一つである。

又九州西部では軽い長みある浮子を二つ、けて、下の浮子は餌の重味で水面より少々隠れ、上のが浮上つてゐるやうにして、餌が底に辛うじて達する仕掛で釣る。之は池づりの一の要領である。尙手前に掛りが多く投づりに困る折は、東京の鯛うきを少し小さくしたので、其尖の鑿に糸を引通し、餌鉤の上の軽い錘の上に止めておいて一緒に投込む。すると餌は錘で沈む間に浮子丈は段々糸を傳つて浮いて来る。夫れが水深を豫測して丁度程よく止るべき部位に糸ウキを付けてあるから、手許から見れば糸が水面まで横に緩斜して、水面下は垂直に垂れて餌は底に接する位でフラ／＼してゐる。斯うした時分の魚は大物が多いから、よく引くのでウキの動き工合を見て強く合せる。そして掛りの多い手前になると手早く引けばよい。

尙河筋では掛りの多い所では、脈つりをやり、かゝりなき所ではウキ付の引張りがよい。東京には近年利根邊まで遠征するやうになつて以來、随分長い竿を使用してキリツブの尖に糸を垂れてゐる。魚が大きい。最も香氣な方では後に付く魚を例のシモリウキ釣で楽しむものも見受

ける。之も寒前には随分當ることがある。

寒ブナで注意すべきは餌と場所、餌の蚯蚓の買へる所はよいが、買へない所では日當のよいドブの横手なごで雪や霜の當らない所に養殖しておくのである。しかも縞み、す即ち東京のキジ、江州のナゴヤがよい。夫れから潮の干満も大事ではあるが、夫れよりも魚の居所を突止めることが最も肝心で一つ形が見えれば、其場所を少しも違はないやうに鉤を入れねばならぬ。そこに扇形に一組即ち四本を入れて見張るがよい、同じ引かゝりがあつても底に鮑屑や古布れの多い所はよくない。舟釣では底が兎角移動し易いから夫等に細心の注意を拂ふべきである。ハゼは追々沖の深みに出て、形も大きい丈によく引く。京濱間では一隻に二十人も乗合が出てゐるが、行くのは小勢がよい。阪神の尼崎東西の釣場でも、まだ／＼行けるが乗合は面白くない。安全地帯ならば手船、左なくとも精々三四人で行く。釣り方に變りはないが、糸も竿も鉤も強くする。そして餌もゴカヒがなくなれば、エビのむき身か岩蟲の鹽藏でもよい。

ボラはこれから沖の深みに落ち、東京では十二月中旬になると形を見なくなるのが例であるが、暖國では寒ボラが釣れる。港内の棧橋下なきは好場所、魚は殆ど盲目に近い位に脂肪で

目がかすみ、泥の中に體を埋めるかと思ふ程にチーとしてゐるものもある。仕掛は東京の粗朶鉤式のイカリに孫鉤をつけたのでも、又大阪式の大きい錨の上四寸間隔で二寸位の股鉤を二三本つけたのでもよい。大きいゴカヒ又は縞み、すを数多くさす。當りを見るや強くグツと引つかけて一氣に上げるか掬ふのである。神戸では投込の引張りをやるが、夫れは夜つりの形で、晝は引かけがよい。

序でにいふが鰯は冬は随分南下するもので、阪神では二月一杯のつりであるが、小笠原でのボラ釣は十二月から翌年五月までを漁期とする。九州南部でも東京大阪よりは遅れても釣れるとの通信もあり、しかも其地方によりて中々釣り方のあるもので、過日の講演で一才紹介した青森での方法が、鹽鱈の肉で魚を集め、鯨の筋子を斜に切つて釣餌とする。又秋つりではあるが創作家の中村武羅夫さんなごは、相州片瀬から江の島西口邊で、小ガツチの餌にするシラスで大に天狗振を發揮して居られたさうであるから、季節場所によりまだく面白く工夫がありさうだと思はれる。

カレヒのことは略するが、他の魚でも釣れることは前記の通りで、ス、キを以て名ある出雲

の宍道湖では冬の雷がなると魚が海に落ちると傳へられてゐるが、神戸の港内では近年まで寒中コツソリ三尺許の大物を引あけて来たものがあり、或は魚の寄りを發見して背の内に三十二尾を釣つたものもある。ウグヒにしても既記の中づりのみではない。伯耆寄りの中海に接した川尻では、闇夜にウグヒの群を見て、——夜は魚の輪廓が蒼くギラ／＼光る——蟹の肉でフカシ釣をやつた實驗をよせられた方もある。朝鮮北滿では氷上に穴をあけて淡水魚を釣り、西伯利ではその穴にハネ釣瓶の如き仕掛で、魚が來ると自在に釣上げる遊びもある。寒いからとて中々釣はやめられない。否工夫すれば夫れ／＼に妙味のあるものである。

尤も寒いことに變りはないから、ウンと着込んで行くのゴムの長靴を履き、懐爐に熱い茶の入つた魔法瓶、辨當も其朝の暖いのを肌にあて、ゐるやうにする。唐辛子を嘗めるのも一時慄ひを止めるにはよいが、酒精類は絶対に禁物である。凍死を誘致するからである。

魚は釣餌や人影を何う見るか

水の深い處になると薄暗くなり且或る色は吸収される。そこで餌の色にも多少變化を見る。明け方つり舟の生簀を覗くと、海の蝦に依りては眼から鬚のあたりが綠色に光つてゐる。又死んだ蝦のむき身と活きた身とを比較しても大分違つて見える。イカの目玉でも皮膚面でも色々に見える。之を餌として魚が見た場合に、何れに飛か、るかといふ點を考ふるまでもなく、新鮮な又は活きた方がよい譯である。

蚯蚓イトメ玉筋魚ドロメン皆夫れ々の體色に注意すること、海の深さを考量することは魚の視覚から算出すべきは言ふまでもない。殊に朝夕と日中、夏と冬即ち時と季節に依る光度の差異が、魚の餌に對する視覚に影響する點を考へて見るべきである。漁夫は夫等には存外無頓着なやうでも、有史以前からの言ひ繼と各自の經驗とに依り中々巧に選擇してゐるから感心させられる。

ムツ、エソ、鯖、鱈等には其魚の肉を糸切にして釣る、可なり有効であるが之には必ず一片毎に其皮が附着してゐなければならぬ。夫れは其幼魚を捕食する習性を利用したもので、皮膚

の色が夫れを思はせるのであるから、之に似通つたものでもよいことになる。最近魚市場で小鯖の腹から小鯖が五つも出たのを見たが其適例と言つてもよい。尤も共えさは深海の外は日中は良くないこともある。

バイク魚に蚌形、魚ではないかイカに海老形、トラウトに昆蟲形の鈎を使用し、幼魚小魚を以て色々な中大魚の餌とする。又蝦でも少し形が崩れると魚は喰はないことがあるから、形状の重んずべき所も排すべきではないが、そこは近眼の先生のことであるから、活躍すべき餌が死んだり動けなくなると見付難く、よし発見しても警戒して近付かない。して見ると形状よりも其動作が必要となつて来る。

鯖つりの巧い漁夫の話に、秋のサゴシは小さいから、其だまし鈎には小さい鱈を、春は大鱈であるから大きい鱈を用ひるものもあるが、餌が大きくては駄目だといつてゐる。其理由は此魚はよく玉筋魚や小鯖を追廻すから、矢張其泳ぎ方をする程度の形状重量に匹敵する餌に一定すべきで、若し夫れが帆走中にイカナゴより大きく且重苦しく見え又は差し方で妙に回轉し又は横になつては、魚が警戒して飛か、つて来ないさうである。

餌は凡て夫れ々の特質習性を研究して、其動作を適當に表現して魚の視覚を唆る。えびはえびらしく自由に跳させるか、それに似せて小引くのである。岩虫や蚯蚓のやうに小引いて面白き道理がない。如何に高價貴重な良餌擬似鈎を求めても、其動作に對する敏捷周密な居止注意を缺いてはならぬ。是等の選擇又は餌の臭味硬軟色澤等魚それ々のことは拙著又は本誌既刊にも分記してあるから重複は避けるが、太公望の鈎の要訣は鈎の動作を適處に於て巧に示す所にあると思はれる。如何に敏捷な鱒もヤマメもウグヒも斯うなると警戒どころか猛然として飛かゝる次第である。

日に向つて戰ふ者は敗れるといふが、魚を日光に向はせて釣ることは何うも面白くない。ウグヒや鱒の浮かし釣では殊に不結果であり、キスの漕づりでも、日が西に傾いてからは屢々夫れに氣付いたこともある。まだ確な研究もして見ないから、宿題として同好家に提供して見るのである。

又鯉の繪を見ると水面に跳上つて昆蟲を取るのがあるが、魚は果して水面上が見えて躍出するものかは頗る怪しい。尤も或學者の實驗では、よく食馴れ見馴れた餌を池面三呎の高さま

でピンセットで持つて行くと、金魚が活躍して來るが、ピンセットのみの場合は其様子がなかつたと言ひ、貯水池の鯉が浮上つて水面に落ちた昆蟲を喰つたのを幾度も目撃した水道吏があるが、一般の鯉や他の魚でも斯うだとも言へまい。

英國のブルツクといふ人が實驗室を水中に沈下して觀察した記録を見ると、水中から見た水面は一大明鏡のやうで其圓周は光線が屈折分解して虹の如く美しく、或る範圍外の物體は見えない。川を渡る人影は水面に出てる部分は見えず、水面を界として水面の上の二本の脚が反映する。恰も水面の杭が逆さに水に映るやうなものらしい。して見ると魚の見た人間は、二本脚を上下逆さに繼合せたお化けとなる譯である。

蟹や潜水夫の話では、水底から浮上るに隨つて眼界が狭くなり、餘程水面に近付かないと水面上の物體は分るものではないといふ。又ウグヒの浮づりに餌が水面に達するまでにテグスが日光に光つて水に映つても大して魚には感じないやうであるが、餌が水中に落ちると魚が恐る恐る餌に接近して急に逃出し或は急に餌に飛か、つて一二尺位引込んだま、口から離す。何うも糸の光を恐る、らしいやうである。又試みに竿を以て水面數尺の上を音なく振廻しても、日光

さへなければ存外魚は驚かない。殊に大樹の下又は竹藪を背景とした影からすれば殆ど魚には見えないらしい。

釣魚の上から餌や物影なごを研究するには、自分も水中の魚になつて、しかも十分其生活状態を見ることも必要である。若し如上の記述を魚が理解するものならば「俺は近眼だが、水中では太公望は盲目だ」とでも笑ふだらう。イヤ實際その近眼の世界を、もつと深く探究したいものである。(大正一一・八・二七)

釣具の考案とその趣味

釣魚は釣そのものに親しむのが面白いのであるから、無暗に道具に凝るのも何うかと思はないではないが、之を趣味としてやる上には敢て差支なきのみか、實用の上からも、装置使用が簡便で有効なものを考案撰擇し、容積を小さくし且輕量堅固であり、殊に夫れが爲に自信を高

むることは、夫れ丈妙味も加はる次第で、遊漁者として暇にあかせて物色し或は自製するなごは實に面白いに違ひない。

尤も釣る上には、その呼吸即ちコツのある所が面白いので、理屈や機械で合理的に攻め立てられるのも何うかと言ふ人もあるが、米人の携行漁具漁装なきには吾々としても随分範とすべきがあり、左なくとも近い所では、東京と大阪との漁具を對照研究する丈でも、そこに啓發する處が少くない。元來賣品は儲かるから扱ひもし、製造もするといった譯で、時間と努力とを惜まず、その進歩向上を計るもの、少ない今日、遊漁者としては不快不便も多しことであるから、釣に親む一面この方面に素人としての技巧を進め、趣味を求めるのも確に必要となつて来る。

海でも川でも、少し巧者な漁夫では、必要に応じて自分が釣具を作つてゐる。ス、キ、ハマチ、サハラ、カツチ、イカなきには夫れが多く、川の方でも個々の材料を蒐集して、一掛の仕掛を作る。之は吾々でも同一である。元來仕上げたものが何時でも手に入れば便利なのではあるが、何うも實用の上には感心しないこともあるといふ譯で、各人の技巧によりて之を作上げ

るか、最信頼する人の作品に俟たなければならぬことが多い。

東京釣友會の笹野友治さんは、日本アルプス上高地の梓川に於けるイハナ釣にかけては中々の達人で、あの邊の山の主と呼ばれた故嘉門次爺さんよりの直傳により、擬餌釣を手巻にし猪の毛たの、鶏のいろくゝな種族の部分から採集した毛たの、それに適した鈎だのを蒐めてゐられる。夫れを見ると、私の父が四十年も以前に眞綿の着色したものの、鶏の毛、極細い眞綿線又は絹糸、カハセミの毛なごを以て作つたヤマメ鈎と酷似し、金澤で作るイハナ鈎が其進歩の系統を有し、更に右笹野さんの手巻が其土地で特別有効なものとされてゐる。又掛入の之に要する擬餌を見ると、前者の概して原始的であつたに比し、一層科學的な精巧さを示してゐる。實際今日數百種に達してゐる鮎の蚊ばりなごは、其起源は藩士なごが自分の遊漁の上で考案したものも多いやうで、今では夫れが内職どころか本業となつて、こゝ、數年長足の進歩を示してゐる。

その鈎を本人が巻いたが、卷子又は職人が巻いたかは、一見その優劣も分らないが、さて之を擴大鏡で見ると、巧拙良否が明瞭となり、その材料の實質なごの相違をも發見し、實用の上

には同じ「お染」でも、「吉野」でも、甲の鈎にはよく魚が来るが、乙に代へると駄目となる。ウグヒの餌ばりで、同じ土佐の黒い丸ばりを使用しても、その鐵や尖の歪み工合で、魚が外れたり、よくかゝるなご、夫れを實驗して見るとデリケートな趣味が湧いて来る。して見ると、一本の鈎の研究考案が、數十回の出漁よりも面白いことがないとも言へない。

竿師には随分天狗のあるもので、何れも其材料の選擇、製作の技巧を獨り自から誇つてはるが、その心中何れだけの自信を有してゐるかをよく叩いて見ると、否その仕上げた作品に対する實用上の効果如何を調べて見ると、竿師の氣に入つたものは一年に幾本も出来るものではない。夫れになると天然の良質を素人が延のま、で使用してゐるのに稀代の逸品を見ることもあるといつた譯であり、竿師でも四五年の内には理想的なものを發見して、思はず商賣氣を離れて仕上げるのがあるが、夫等の内面的な苦心と、完成に至るまでの経過と、出來上つた竿の調子とを味つて見ると、そこに藝術的な氣分が流れてゐることに氣付くのである。

竿の穂尖には色々の調子を有つてゐるが、それが一節缺けても、又その途中に針尖程の虫喰の穴があつても、或は俗に道樂結びの糸付の糸の重さと糸の巻き工合でも、それが魚に感ずる

工合又は引上げるまでの調子に影響することもあり、それかと思れば、沖釣で、カツヲ、サバ、サハラ、太刀魚、イカナギには、尖なしの殺伐なものもある。何がよいのか其場合に直つて見ると、随分疑問も生ずるのではあるが、之を通じて竿の調子といふ点に於ては、質の精粗良否に拘はらず、考慮すればするだけ趣味も効果も變つて来るものである。

竿師の作る竿は、主として川つり又は海濱に使用するもので、少し良いのになると其の調子が中々氣持よく出来てゐる。根元直径何分で何間の長さ、魚は何々と假定すれば、それが何本纏であらうと、その纏ぎ目／＼の太さ或は竹材の原質等が略定まつた表が出来てゐて、夫れによりて作成し、仕上げて尖から曲けて見たり或は夫れを離してはねた時の調子が如何にもよいと見られるのは可なり澤山であるが、しかも之を釣る時の要領で腕で支へて見て、根元から尖までの重量が腕に何う感ずるか、又魚がか、つた折の振動が何うなるかなぎの点になると、遺憾とすべき点が多々ある。

歐米の竿はリールを附けて持つて見ると、可なりの重量があるに拘はらず、軽い感じがする。それは使用する場合の支点重点を合理的に考慮して作成されてゐるからであるが、我邦の竿師

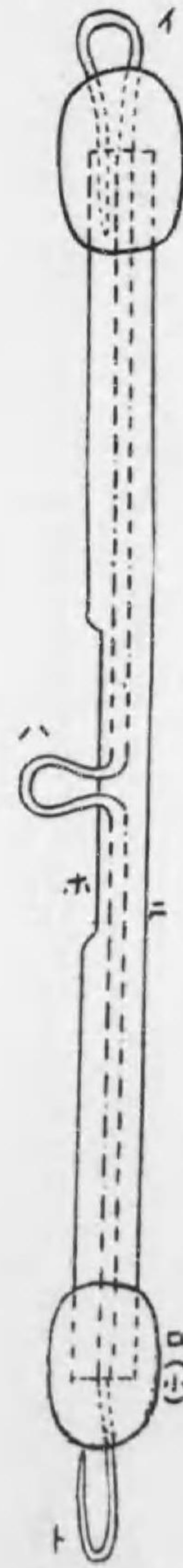
にしては、夫れ等には存外注意を缺いてゐるのがあるので、一見調子がよいものでも、使用して見て手が草疲れるとか、魚が来ると調子が違つたり、永く使用すると狂ひが多いことも發見される。元來之も考へないではないが、製作の上は無理があることは争はれない。そこで少し頭のある人では、竿を求め又は自製する場合、大体の検査を了へると、次には重量を調べる必要がある。その標準は、川釣のものでは根元から見、竿の全長の四分の一の部位を重量の中心点として、夫れから尖の方に中心が移るやうでは使用する上に無理が出来ると見る。これなごは簡単な一法である。尤も場合に依ると、其平均を保つ爲に、根元の方から、節の中へ金属製の棒を入れて、之を調節することもやるが、夫れでも多少無理を生ずるから、さういふことのないもので、重量の中心が注文通になつてゐるものを、選ぶのがよい譯である。それ等のこととは一應の鑑識を以て、各自が工夫して見ては何うかと思れる。

浮子も二十幾種に分れてゐるが、如何に本塗でも、舶來でも、使用して見ての妙趣とは必ずしも止比例するとは言へない。錘にしても、其形状と重量が、微妙な所まで影響してゐるとすれば、賣品だけでは物足りない。種々考察研究して有効ならしめたい。緞糸に至りては愈

六ヶしくなるが、夫れが流勢水脈波動との關係 魚の飛か、る時の感覺なきの影響を、一々釣具の上に考慮して行く。之れが中々趣味の深いことを思ふべきである。

魚の喰立つは、潮汐或は朝夕の一と時であるから、その時間に餌の附替や道具の應急修繕なきに時間を要してはならぬ。就中魚の吞込んだ釣を外す上に便利なるものを要する。別項講演の中にも一寸紹介してある浅井さんの考案になる釣はづしなきは、比較的簡便で有効である。元來これには木の股、箸なきの有合せを使用し、外國製では、齒の鋭い魚にはA字形の開口器を使用し、然る後、麥酒の口抜の如き握りの附いた丁字形の金屬製の釣はづしもあるにはあるが、浅井さんののは左の如く全く獨創的な處が嬉しい。

圖中のイは眞鍮線、ロは木製の球、ニは眞鍮製の薄板で、ハ及びホの方面に於て稍扁平な管になつてゐる。使用する場合は、魚を何かで押へて、先づ第一圖のトの所を釣糸に引かけ、



次にハを事前に引く。すると釣糸は此器から外れないやうになる。そこで片方で糸を張り、片方で此器を第二圖の如く魚の口中に押込めば釣が外れて第三圖の如く出て来るので、これに色々な特長が伴つてゐる。缺點としては——外す上に於ては先づ申分ないが——魚を片手で持つて之を行ふことが困難なこと位である。

底にかけた釣を外すには、在來品の所謂「いてこい」といふのは、眞鍮の丸い輪に三日月形の丸い鉛を取付けたもので、普通に使用してゐるが、夫れでは竿づりにはよいが、投込の時に其輪を通して送るとすれば、何處か糸を切らなければならぬ不便があるので、更に浅井さんが開閉の出来る「いてこい」を考案されてゐるし、それに佛國式の更に面白いのになると、輪形の鉛に鎌の如き刺を幾つも附けて、藻草なきのからまぬやうにしたのもあるが、考へれば幾干でも面白いものが出る。

餌入になると、外國製には餘程便利で而も餌を保存し、出入する上に頗合理的なのが多い。擬似釣を入れるフライブツクなどは、近來整理も仕易く一目して適品を手早く引出して取替へ得るやうに出来るのがある。鮎の防水布底の袋でも、罎入の桶でも、テグス入でも、竿入のサツク或は筒でも、魚籠、タマなごの附屬品でも、釣道具屋任せでは、到底趣味としての満足は得られない。そこに遊漁者自身が、出漁し得ない雨の日風の夜の樂事として、之を完成し且續々發表して汎く其惠福を豊にすべきで、同時に技術者をも獎勵して、もつと合理的に且清雅にして輕快な釣具漁裝品を製作せしめ、釣る上の趣味を深くしたいものである。實際我邦に於ける遊漁者或は漁夫として自製に係る釣具を蒐集して見たらば、そのみでも意外な趣味と實益が得られる次第で、其方面に着々歩を進めては何うだらうか。否既に東京、神戸、大阪の某某氏などは餘程これに興味を感じ、種々なる方面に亘つて手を染めてゐる所が頼母しい。(大正一一・一二記)

大正十二年九月二十日印刷
大正十二年九月廿五日發行

サンデー毎日叢書 第二編

釣 の 話

不許複製
定價金一圓

大阪毎日新聞社編纂

發行兼 荒木利一 郎
大阪府豊能郡箕面村平尾七七三

印刷所 株式會社 大阪毎日新聞社
大阪市北區堂島二丁目三六

發行所 大阪毎日新聞社
大阪市北區堂島 振替大阪四五〇番

同 東京日日新聞社
東京市丸ノ内 振替東京二八〇〇番

書叢日每一デンサ

錢六料送・圓一價定・裝美・紙表絹・版六四

第一編 西川一草亭氏述 生花の話

アート紙刷 寫真版 十五葉挿入

本書は新時代に適應する新花道の提唱であります。生花の藝術的價值、さうしたものが現代の生花界から殆んど忘れられて、單なる裝飾としての面も個性の失はれた切付けたやうな形としての生花が傳へられて當然視されてゐるのは寧ろ不思議とも云ふべきでせう。併し、では生花を生けたり又味はつたりするには一体何うすればいいか、本書は現代を風靡してゐる抛入と一草亭式生花の秘訣を説いてゐます。

第三編 小鳥の話 近刊

所 行 發

大阪毎日新聞社 大阪大替 市四区 北區 堂番
東京日日新聞社 東京大替 市丸ノ内 番

515
83

終